

日本武道学会第58回大会 研究発表抄録

期 日 令和 7 年 8 月 30 日(土)・8 月 31 日(日)
会 場 法政大学 多摩キャンパス



日 本 武 道 学 会

Japanese Academy of Budo



ご挨拶

日本武道学会会長 大保木 輝雄

昨年の大会は九州で開催、一昨年は大阪、そして今年の58回大会は関東での開催となりました。コロナ禍による対面開催規制が解け、従来の「対面」での大会が復活されて三年目の大会となります。そのような本大会の開催に際し、一方ならぬご尽力とご配慮いただいている法政大学の永木耕介委員長・小田佳子副委員長を始め実行委員の皆様へ厚く御礼申し上げます。また、同大学副学長澤柿教伸教授には、2020年の第63次南極地域観測隊越冬隊長を務められた経験から極限状況下での隊員の安全確保などの「リスクマネジメント」についてご講演をいただけます。武道における「危機管理」の問題を改めて問う契機となるのではないのでしょうか。どうかよろしくお願い申し上げます。

さて、本学会は、コロナ禍後のAIの諸機能の活用を踏まえつつ、「武道」の「伝統と文化」の具体的な内容について、国の内外を問わず発信する使命を帯びるようになりました。

本部企画では「武道稽古の多様性：オンライン稽古・指導における身体性を考える」と題するシンポジウムが開催され、eスポーツやコロナ禍による対面不能の時期に工夫されたオンライン活用の稽古・指導における新たな時空での身体性について議論がなされます。それは、対面性への新たな視点を提供することに繋がるのではないのでしょうか。

ところで、武道の世界への普及が嘉納治五郎師範の功績にあったことはよく知られています。嘉納は1928年に第九回オリンピック競技会（アムステルダム）に臨席し、ベルリン、パリ、ローマ、ロンドン、アムステルダム、ジュネーブなどを訪問。翌年の昭和4年（1929）の天覧試合の開催後に出版された『武道寶鑑（宝鑑）』（昭和5年）に著した「天覧武道試合所感」に、当時の世界への普及状況を以下の様に綴っています。

「柔道に就いて云へば単に我国のみならず近來欧米各国で盛んに行はれるようになり、殆ど一種の流行をなしている観がある。一昨年私が独逸伯林（ドイツベルリン）を訪れた時、同市だけでも既に十数個の柔道倶楽部が設けられ、其の会員の如きも一万数千人の多きに及んでいるといふ話を聞いた。更に進んで同国の柔道をナショナル・スポーツにせんとする運動さへ起こっている。伊太利（イタリア）にも広く普及して居り、英国も年々盛んになり、又、羅馬尼（ルーマニア）では摂政宮殿下が御躬ら総裁となられ、同国の警視總監が会長となり立派な組織が出来ているとのことである。又埃及（エジプト）の如きも最近羅馬尼に倣って柔道を奨励することになったとの報道に接した。」その他、米国に於て盛んに行われ、中国、インドでも実施され「柔道の世界的進出は実に刮目すべきものがある」と述べる。さらに、「さりとて今後我国が柔道に対して十分の研究と改良とを加えず、その奨励を怠るようなことがあったならば、上記の諸国に株を奪われて了（しま）ふ如き虞（おそれ）なしとせぬ」との憂慮が綴られています。

嘉納師範は武術による人間形成論を中核として体育法・勝負法・修心法の三つの方法を柱として「柔道」を提唱し、海外の人達にも納得できる論理を展開してきました。戦後のGHQ支配下にあつての武道禁止令を経て、1964年の東京オリンピック開催時に設立された「日本武道館」、1968年の「武道学会」の開設などの底流には嘉納精神が息づいています。「武道」とは何かを発信するという新たな「嘉納師範の憂慮」は、柔道や武道の根幹をなす「一本」と「自然体」の読み解きによってこそ応えられるのではないのでしょうか。



ご挨拶

日本武道学会第58回大会会場校
法政大学 理事・副学長 澤柿 教伸

日本武道学会第58回大会の開催を心よりお慶び申し上げます。また、法政大学多摩キャンパス・スポーツ健康学部が、全国各地よりご参集いただいた日本武道学会の会員皆様による研究成果の発表の場となること、大変喜ばしく存じます。

法政大学は、1880年（明治13年）に産声を上げた日本最古の私立法律専門学校「東京法学社」が前身であり、2030年には創立150周年となります。今日、法政大学の学生総数は30,000人弱で、この多摩キャンパスと市ヶ谷キャンパス、小金井キャンパスの計3キャンパスで全15学部から成っています。多摩キャンパスは、東京都の西端、神奈川県に接する位置にあり、豊かな自然に囲まれた環境にあります。多摩キャンパスには経済学部、社会学部、現代福祉学部、スポーツ健康学部の4学部があり、学生数は約8,700人を擁しております。

スポーツ健康学部は、2009年にスタートした若い学部であり、学生数は約800人弱と法政大学の中では小規模ですが、2016年に大学院修士課程、2020年に博士後期課程を設置し、順調に歩んでおります。「スポーツを軸にして健康を学問する」というコンセプトのもと、スポーツコーチングコース、スポーツビジネスコース、ヘルスデザインコースの3コースがあり、トップアスリートを含めた個性豊かな学生が勉学に励み、卒業後は企業をはじめ医療系、教職、アスレティックトレーナーなど多様な職種に進んでいます。

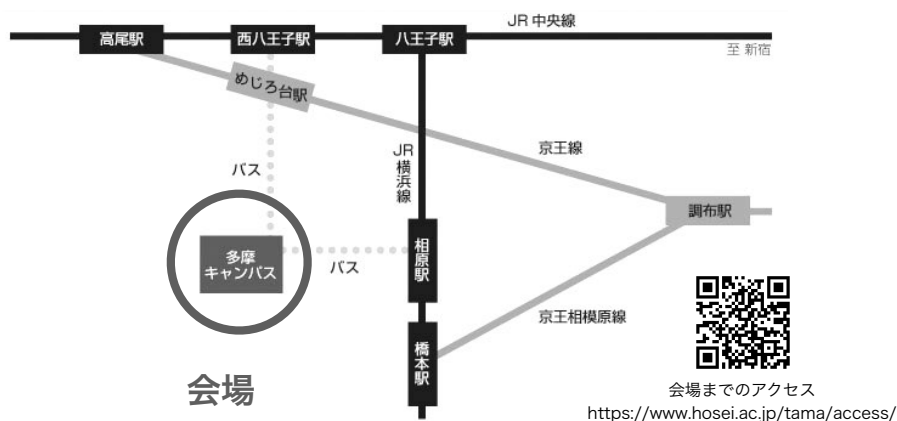
多摩キャンパスでは、練習場所・拠点の関係から課外活動の「武道」はほとんど行われていませんが、市ヶ谷キャンパスなどにおいて、伝統のある柔道部、剣道部、空手道部、弓道部等が熱心な活動を行い、全国的にも活躍しています。

私の専門は自然地理学で、「地球環境を見続けること」をモットーとしております。第63次南極地域観測隊に越冬隊長として参加した経験から、「隊員の安全確保」をはじめ、極限状況におけるリスクマネジメントについても多くを学ぶことができました。それは武道の世界に通じる点があるかもしれません。なお、昨今の地球温暖化による気候変動には注意すべき点が多々あります。どうぞ皆様、体調に留意して学会大会へお越しください。

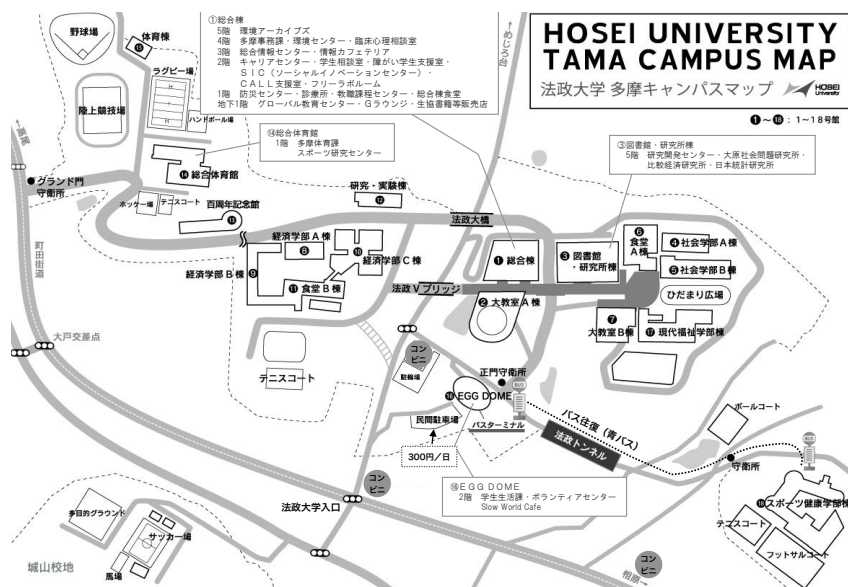
本大会の実施にあたり、大保木輝雄会長をはじめ日本武道学会の役員の皆様、実行委員各位のご支援に感謝申し上げます。参加者の皆様が新たな知見を得るとともに交流を深める機会となることを心より願っております。

最後に、日本武道学会の今後益々のご発展を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

＜法政大学多摩キャンパス・スポーツ健康学部へのアクセス＞



- ・京王線：新宿駅から特急で50分、めじろ台駅下車、バスで約10分
 - ・【JR】中央線：新宿駅から快速で50分（特別快速で41分）、西八王子駅下車、バスで約22分
 - ・【JR】横浜線：新横浜駅から快速で30分、相原駅下車、バスで約13分
- ※上記各バスで「法政大学」下車



◎図の中央・下の「バスターミナル（16EGG DOME）」にバスで到着し、図の右下の「18スポーツ健康学部棟」まで「法政トンネル」を抜けて徒歩約7分程度（後半は坂を上る）です。なお、会期中は「正門守衛所」の通りを挟んだ右向いから学内バス（青色：無料）をスポーツ健康学部棟まで循環させる予定です（朝夕に限定、15分に1本程度）。

◎スポーツ健康学部棟周辺に駐車場はございません。お車でお越しの場合は、「多摩キャンパス全体図」にあるEGG DOMEの左下の「（渋谷・しぶや）民間駐車場」が利用可能です（300円／日）。駐車場は、キャンパス入口のセブンイレブンを南方向に200mほど下った所を鋭角に回り込んだ先にあります。学内からは車で直接入れませんのでご注意ください、徒歩で学内へは往来できます。

大会案内
日程
演題一覧他

本部企画
専門分科会

一般
IA-1
IA-11

一般
IB-1
IB-9

一般
IC-1
IC-7

一般
IP-1
IP-10

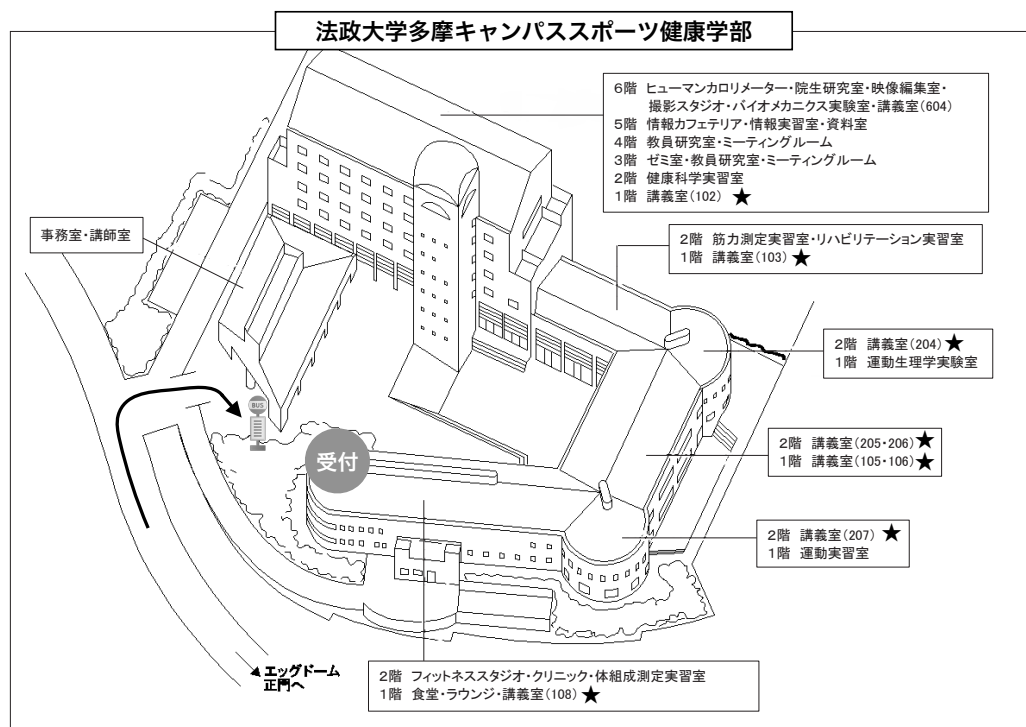
一般
IA-1
IA-12

一般
IB-1
IB-6

一般
IC-1
IC-6

一般
IP-1
IP-10

<会場案内>



1 階講義室102	招待講演・基調講演・シンポジウム(1日目) 総会(2日目)
1 階講義室103	自然科学研究発表(1・2日目) 空手道専門分科会(2日目)
1 階講義室105	実行委員控室(1・2日目)
1 階講義室106	役員控室(1・2日目)
2階講義室204	人文社会学研究発表A(1・2日目) 少林寺拳法専門分科会(2日目)
2階講義室205	一般控室(1日目) 弓道専門分科会(2日目)
2階講義室206	シンポジウム等打ち合わせ(1日目) 障害者武道専門分科会(2日目)
2階講義室207	人文社会学研究発表B(1日目) 武道指導法(2日目) なぎなた専門分科会(2日目)
1 階ラウンジ	ポスター発表(1・2日目) 休憩所
食堂・売店	昼食等

＜大会への参加にあたって＞

【大会会場の近隣の宿泊先について】

JR相原駅が大学の最寄駅ですが、相原駅周辺にはホテルはございません。

最寄の宿泊先としては、以下の3駅周辺が便利です。

- 1) JR「橋本駅」周辺
(橋本駅から法政大学まで路線バスあり。JR橋本駅からJR相原駅まで横浜線で1駅
乗車時間約2分)
- 2) JR「八王子駅」周辺
(JR八王子駅からJR相原駅まで横浜線で3駅、乗車時間約10分)
- 3) JR／小田急「町田駅」周辺
(JR町田駅からJR相原駅まで6駅、乗車時間約20分)

【昼食について】

8月30日および31日の昼食については、スポーツ健康学部棟の食堂を営業予定です。
食堂の営業時間は11時～14時、食堂内の売店は10時～15時45分です。ご利用ください。

最寄りのコンビニは、多摩キャンパス周辺に3箇所ありますが、
スポーツ健康学部棟からはいずれも徒歩で往復20分程度を要します。

【Wi-Fiについて】

会期中はスポーツ健康学部棟内で「eduroam」、
または「GUEST-HOSEI」への学内wifi接続が可能です。
wifi利用を希望される方は、学会受付でお申し出ください。

【理事会・評議員会、懇親会について】

8月29日（金）に市ヶ谷キャンパス・ボナソワードタワーで行う理事会・評議員会後の
懇親会に参加される方は、会場の都合上、事前予約制となっておりますので、
学会HP上から前払い（5,500円）※の手続きをお願いします。

理事会・評議員会：ボナソワードタワー26階会議室A・受付、25階・会議室B・控室

<https://www.hosei.ac.jp/ichigaya/access/>



ボナソワードタワー

懇親会会場：上海ブギ・市ヶ谷店

https://sekkomon-shop.com/shanghaibugi-ichigaya/?utm_medium=referral



上海ブギ・市ヶ谷店

※学会ホームページの「会員マイページ」のメニューの「イベント」から
クレジットカード決済ができます。



会員マイページ

参加者の皆様へ

1. 参加者の受付は、以下の時間帯で行います。

8月29日（金）理事会・評議員会 13:00～17:00

法政大学（市ヶ谷キャンパス）ボアソナードタワー 26階フロア

8月30日（土）、31日（日）学会大会 8:30～15:00

法政大学（多摩キャンパス）スポーツ健康学部棟1階 食堂

- ※ 参加費未納の会員（参加申込み未登録会員も含む）、会員以外で大会に参加される方は、学会サイトの会員マイページより、大会参加費をクレジットカード決済にてお支払いください。
- ※ 大会参加章は、受付で配布されます。大会期間中必ず着用してください。着用がない場合、入場をお断りすることがあります。

会員種別	会員区分	事前割引 4月1日-8月29日	当日現地受付 8月30日-8月31日
会員	一般	5,000円	6,000円
会員	大学院生	4,000円	5,000円
会員	学部生	1,000円	2,000円
非会員	一般	6,000円	7,000円
非会員	大学院生	5,000円	6,000円
非会員	学部生	2,000円	3,000円

2. 令和7年度の会員年会費（一般会員：8,000円、大学院生会員：7,000円、学部学生会員：1,000円）は、受付業務の煩雑さを避けるため大会参加者の受付では納入できません。会員サイトより、クレジットカード決済にてお支払いください。
3. 大会期間中の昼食は、大学構内にある食堂等をご利用ください。
4. 宿泊が必要な場合は、各自でご手配ください。
5. 会場では、事前登録をされた方には大会プログラム（抄録集）の配布をいたします。また、学会サイト、大会サイトには大会プログラム、発表者による資料データの提供がございますので、参考にされる場合は発表会場にはPCやタブレットなどをお持ち込みください。
6. 会期中はスポーツ健康学部棟内で「eduroam」、または「GUEST-HOSEI」への学内wifi接続が可能です。wifi利用を希望される方は、学会受付でお申し出ください。

座長の皆様へ

口頭およびポスター発表の座長の皆様は、担当される演題の発表時間 15 分前までには、発表会場受付にお越しください。

＜口頭発表の座長＞

1. 口頭発表の発表時間は発表 12 分、質疑応答 3 分の合計 15 分です。発表時間に関する卓上鈴での合図は以下の通りとなります。
 - ・ 第 1 鈴 発表終了 2 分前
 - ・ 第 2 鈴 発表終了と質疑応答開始
 - ・ 第 3 鈴 質疑応答終了
2. 座長は質疑応答に際し、「質問者は、所属・氏名を述べた後、簡潔に質問するよう」にご指示ください。
3. 座長は、発表時間厳守での進行をお願いします。

＜ポスター発表の座長＞

1. ポスター発表の発表時間は、1 演題 5 分です。ご担当演題の進行役と発表時間の管理をお願いします。発表時間の管理はご自身の時計等をお願いします。
2. 質疑応答は、ご担当の演題が全て終了した後、随時、発表演者自身に行っていただきますので、取りまとめ等の業務は特段ございません。セッション終了の際、「この後の質疑応答は随時となりますので、演者の方はポスターの前で待機してください」とアナウンスし、座長終了となります。

発表演者の皆様へ

1. 発表形式は、口頭発表またはポスター発表です。
口頭発表 発表 12 分 質疑応答 3 分
ポスター発表 発表 5 分 質疑応答は随時（発表前、後も含む）
発表者は、発表時間の厳守にご協力ください。
2. 発表の進行等は、担当座長の指示に従ってください。
3. 発表演者の変更は認められません。但し、急病等のやむを得ない事情がある場合は、大会本部へ速やかに連絡し、指示に従ってください。
4. **口頭発表者**は、発表開始 20 分前までに各会場受付で受付を済ませ、発表時間の 15 分前には次演者席で待機してください。
5. **口頭発表者**は、12 分以内（時間厳守）で研究内容を発表してください。
6. **口頭発表者**でプレゼンテーションソフト（PowerPoint 等）を使用する場合は、発表資料の入ったご自身のパーソナルコンピュータを必ずお持ちください。また、プロジェクタとの接続用の変換コネクタ、電源アダプタも必ずご持参ください。
7. 紙媒体の資料等（発表で使用するものも含む）の配布が必要な場合は、会場に持参し、会場入り口のテーブル上にご提出ください。なお、残部は会場で廃棄せず、お持ち帰りくださるようお願いいたします。
8. **ポスター発表者**は、発表日の 9 時までに会場受付を済ませ、所定の場所にポスターを掲示してください。ポスターは A0 サイズ（幅 841mm × 縦 1189mm）程度までです。また、発表時間の 10 分前までには、掲示したポスターの前で待機をお願いします。
9. **ポスター発表者**は、5 分以内（時間厳守）で研究内容を簡潔にまとめて発表してください。
10. **ポスター発表者**は、質問を随時受け付けていただきますので、ご自身の発表が終わってもポスター前近辺で待機し、質問者への対応をお願いします。
11. 掲示したポスターは、正午過ぎにご自身で撤収してください。

日本武道学会第 58 回大会日程表

8月29日(金)		8月30日(土)			
8:00 					

8月31日(日)					
8:00					
9:00					
10:00	(スポ健204) 人文・社会科学A 12演題	(スポ健207) 武道指導法 6演題	(スポ健103) 自然科学 6演題	(1階ラウンジ) ポスター 10演題	受付
11:00					
12:00					
昼食・休憩					
13:00					
令和7年度日本武道学会総会(スポ健102)					
14:00					
15:00	(スポ健103) 空手道 専門分科会	(スポ健204) 少林寺拳法 専門分科会	(スポ健205) 弓道 専門分科会	(スポ健206) 障害者武道 専門分科会	(スポ健207) なぎなた 専門分科会
16:00					
17:00					
スポ健105 実行委員控室 スポ健106 役員控室 スポ健205 一般控室 スポ健206 シンポジウム等打ち合わせ			<休憩所> 1階ラウンジ 食堂・売店		

※各専門分科会で開始時刻が異なります。

一般研究発表

第1日目 8月30日(土)

人文・社会科学系

A会場 (204)

時間	演題番号	演 題	発表者 所 属	座 長
9:00	IA-1	柔道の旗判定と曖昧さ耐性	成田 泰崇 国士舘大学	久保田 浩史 (東京学芸大学)
9:15	IA-2	全日本柔道連盟による「月経による出血が柔道衣に付着していることが目視できた場合の対応方針」発出の経緯	稲川 郁子 日本体育大学	
9:30	IA-3	コロナ禍における鰐競り合いの厳格化が国際レベルの剣道試合に与えた影響	二ツ森飛鳥 法政大学大学院 スポーツ健康学研究科	
9:45	IA-4	フランス柔道連盟柔道普及について	瀧本 誠 駒澤大学	増地 克之 (筑波大学)
10:00	IA-5	ドイツにおけるライフステージに応じた生涯スポーツとして柔道の取り組み：ドイツ柔道連盟の級段位規定及び指導者養成に関するガイドラインの分析を中心に	Maja Sori 津田塾大学 Doval	
10:15	IA-6	地方議会における武道に関する議論	田中 宏和 高崎経済大学	
10:30	IA-7	柔道場経営に関する一考察	中村 和裕 福山大学	和田 崇 (県立広島大学)
10:45	IA-8	運動部活動地域移行に向けた剣道町道場の役割と課題	北村 尚浩 鹿屋体育大学	
11:00	IA-9	伝統少林拳の継承状況—現地調査による実証研究	川島 直央 北京体育大学	
11:15	IA-10	ガッツポーズの是非を巡る「問いの構造」の再定位：柔道における勝者と敗者の間柄についての倫理学的考察	佐藤 雄哉 国士舘大学	中嶋 哲也 (茨城大学)
11:30	IA-11	日本柔道における「強さ」概念の考察：強いとはどういうことか	竹市 大祐 国士舘大学大学院	

昼食・休憩

招待講演、基調講演、本部企画

会場 (102)

13:00	招待講演：澤柿教伸（法政大学業務執行理事・副学長）
14:00	「南極観測隊という極限環境におけるメンタルレジリエンスとリーダーシップ」
14:10	本部企画シンポジウム 基調講演：松井 崇（筑波大学） 「e スポーツ科学：自他共栄を具現化する「e 武道」の創生を目指して」 シンポジウム 「武道稽古の多様性：オンライン稽古・指導における身体性を考える」 司会：三村由紀（防衛大学校）、筒井雄大（国際武道大学） シンポジスト：新井 良（剣道スウェーデン代表男子監督） 久保田浩史（東京学芸大学） 荒川尊祐（国際武道大学）

一般研究発表

第1日目 8月30日(土)

人文・社会科学系

B会場 (207)

大会案内
日程
演題一覧
他

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:00	IB-1	多様な子どもを指導する柔道クラブ指導者の感じる困難さと成長に関する調査研究	川戸 湧也	三重大学	太田 順康 (大阪教育大学)
9:15	IB-2	剣道と人間形成—人格と人間的成長に着目して—	松本 秀夫	東海大学	
9:30	IB-3	自己省察プログラムによる学業および競技者アイデンティティの変容	秋山 大輔	九州産業大学	
9:45	IB-4	戦前の学校武道法制に関する新事実—1919～31年の高等学校・中等学校における体操科の剣道・柔道—	坂上 康博	元一橋大学	堀川 峻 (環太平洋大学)
10:00	IB-5	日本文化としての柔道 —オリンピックの柔道採用をめぐる嘉納治五郎の思想—	永木 耕介	法政大学	
10:15	IB-6	ライフヒストリーからみる戦後武道史: 島根県の講武館関係者への聞き取り調査	中嶋 哲也	茨城大学	
10:30	IB-7	デジタルアーカイブを活用した武道史研究の可能性と展望: 「邦字新聞デジタル・コレクション」からみる武道史再考	矢野 裕介	愛知淑徳大学	小田 佳子 (法政大学)
10:45	IB-8	リバイバル剣道実践者のライフスタイルに関する研究 —高齢・高段位者に着目して—	井上 涼	東海大学大学院	
11:00	IB-9	日本在住外国籍剣道経験者による「剣道・武道」への認識: 在日コリアンによる「剣道」を中心とした「自己(アイデンティティ)」への認識について	金 希妍	東京大学大学院	

昼食・休憩

招待講演、基調講演、本部企画

会場 (102)

13:00	招待講演: 澤柿教伸 (法政大学業務執行理事・副学長)
14:00	「南極観測隊という極限環境におけるメンタルレジリエンスとリーダーシップ」
14:10	本部企画シンポジウム 基調講演: 松井 崇 (筑波大学) 「e スポーツ科学: 自他共栄を具現化する「e 武道」の創生を目指して」 シンポジウム 「武道稽古の多様性: オンライン稽古・指導における身体性を考える」 司会: 三村由紀 (防衛大学校)、筒井雄大 (国際武道大学) シンポジスト: 新井 良 (剣道スウェーデン代表男子監督) 久保田浩史 (東京学芸大学) 荒川尊祐 (国際武道大学)

一般研究発表

第1日目 8月30日(土)

自然科学系

C会場 (103)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:00	IC-1	活動後増強が柔道選手の握力に与える影響	佐々木健志	順天堂大学大学院 スポーツ健康科 学研究科	曾我部晋哉 (甲南大学)
10:15	IC-2	一流競技者の背負投：上肢の運動パターン分析	石井 孝法	NPO スポーツ コーチングアカ デミア	
10:30	IC-3	投の形動作を対象とした骨格検出精度の評価	横山 喬之	摂南大学	
10:45	IC-4	柔道における頭部衝撃曝露の探索的検討：初級 者と経験者の“投げられる機会”に着目して	越田専太郎	SBC 東京医療大学	高橋健太郎 (関東学院大学)
11:00	IC-5	高機能な衝撃低減性能を有する面防具の試作と 評価	濱西 伸治	東北学院大学	
11:15	IC-6	日本剣道形における脳活動と視線に関する研究	中島 有健	東海大学	小澤 聡 (常磐大学)
11:30	I C-7	剣道の発声の文献検索による研究の着想と独自 性の検証	橋爪 和夫	アール医療 専門職大学	

昼食・休憩

招待講演、基調講演、本部企画

会場 (102)

13:00	招待講演：澤柿教伸（法政大学業務執行理事・副学長）
14:00	「南極観測隊という極限環境におけるメンタルレジリエンスとリーダーシップ」
14:10	本部企画シンポジウム 基調講演：松井 崇（筑波大学） 「e スポーツ科学：自他共栄を具現化する「e 武道」の創生を目指して」 シンポジウム 「武道稽古の多様性：オンライン稽古・指導における身体性を考える」 司会：三村由紀（防衛大学校）、筒井雄大（国際武道大学） シンポジスト：新井 良（剣道スウェーデン代表男子監督） 久保田浩史（東京学芸大学） 荒川尊祐（国際武道大学）

一般研究発表

第1日目 8月30日(土)

ポスター発表

P会場 (1階ラウンジ)

大会案内
日程
演題一覧
他

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:30	IP-1	柔道ゴールデンスコアの戦略に関する調査 その1	越野 忠則	国際武道大学	越田専太郎 (SBC 東京医療 大学)
9:35	IP-2	柔道ゴールデンスコアの戦略に関する調査 その2 —GS 時の戦術と組手の意識について—	中矢 力	東海大学	
9:40	IP-3	柔道の組手における攻防の運動切替技能に基づく練習法の提案	高野 綺海	東京学芸大学 大学院連合学校 教育学研究科	
9:30	IP-4	中央と地方における旧制高校剣道部の活動状況	佐藤 皓也	新潟医療福祉大学	筒井 雄大 (国際武道大学)
9:35	IP-5	原馬室獅子舞棒術に伝承される武術的要素 (第一報)	渡邊 峰雄	日本薬科大学	
9:40	IP-6	計量テキスト分析を活用した武芸伝書分析の試み	太田 順康	大阪教育大学	
9:45	IP-7	『紀効新書』の武術記述分析 — 戚継光の武術観を探る —	劉 暢	国際武道大学	
9:30	IP-8	大学柔道選手が指導者から受ける非言語的行動の印象と頻度に関する調査 その3	熊代 佑輔	国際武道大学	伊藤 潔 (九州共立大学)
9:35	IP-9	跳込み流し突きの創出についての考察	江川 玖成	東京学芸大学	
9:40	IP-10	柔道を始めた契機に関する一考察	塚田 真希	東海大学	

昼食・休憩

招待講演、基調講演、本部企画

会場 (102)

13:00	招待講演：澤柿教伸 (法政大学業務執行理事・副学長)
14:00	「南極観測隊という極限環境におけるメンタルレジリエンスとリーダーシップ」
14:10	本部企画シンポジウム 基調講演：松井 崇 (筑波大学) 「e スポーツ科学：自他共栄を具現化する「e 武道」の創生を目指して」 シンポジウム 「武道稽古の多様性：オンライン稽古・指導における身体性を考える」 司会：三村由紀 (防衛大学校)、筒井雄大 (国際武道大学) シンポジスト：新井 良 (剣道スウェーデン代表男子監督) 久保田浩史 (東京学芸大学) 荒川尊祐 (国際武道大学)

一般研究発表

第2日目 8月31日(日)

人文・社会科学系

A会場 (204)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:00	IIA-1	居敷の可能性について ～新陰流と制剛流との関係から～	佐竹 彬	石田・佐竹稽古塾	阿部 弘生 (仙台大学)
9:15	IIA-2	後期水戸学における「文武」に関する研究―藤田幽谷に着目して―	鈴木 謙心	筑波大学大学院	
9:30	IIA-3	新当流伝書にみられるわざに関する比喻表現についての一考察―『兵法自観照』を中心に―	軽米 克尊	天理大学体育学部	
9:45	IIA-4	弓と鍼～日置流弓目録「当拳の事」について～	三保 翔平	仙台赤門医療専門学校	原田 隆次 (国際武道大学)
10:00	IIA-5	ハワイの超禅寺弓道の概念と歴史に関する一考察	INOUE Makoto Reed	国際武道大学 武道・スポーツ研究科	
10:15	IIA-6	日置流雪荷派弓術家太田雪應について	松尾 牧則	筑波大学	
10:30	IIA-7	【古流柔術】竹内三統流と本覚克己流の比較	河野 敏博	新風館武藝研究所	加藤 純一 (皇学館大学)
10:45	IIA-8	琉球王朝時代の武技(唐手・那覇手)の源流探求	早坂 義文	古武道研究会	
11:00	IIA-9	棚倉藩伊原勝司の槍術修行について	森本 邦生	貫汪館	
11:15	IIA-10	松浦静山の剣術論に関する一考察：易の思想との関連に着目して	堀川 峻	環太平洋大学	軽米 克尊 (天理大学)
11:30	IIA-11	幕末期の武芸観と武芸教育に関する研究	大澤 誠	皇學館大学大学院文学研究科	
11:45	IIA-12	夕雲流剣術に関する研究―真理谷円四郎の剣術論に着目して―	柴田 直生	筑波大学大学院	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (102)				
	空手 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会	弓道 専門分科会	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会
	103	204	205	206	207

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

一般研究発表

第2日目 8月31日(日)

武道指導法系

B会場 (207)

大会案内
日程
演題一覧
他

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:00	II B-1	生成 AI を用いた中学校剣道授業の動向分析：2017 年以降の指導法に着目して	加藤 純一	皇學館大学	奥村 基生 (東京学芸大学)
10:15	II B-2	高校生の武道授業に対する関心低下の要因分析—体育授業との比較—	杉田 菜摘	大阪教育大学 大学院	
10:30	II B-3	障害者への剣道指導を通して見える試道の可能性 ～競争社会から共創社会へ その 8 注意力の変化に焦点をあてて～	三苦 保久	滋賀県立大津清 陵高等学校	
10:45	II B-4	空手組手競技における指導者と競技者の作戦意識の関係	大徳 紘也	日本体育大学	前川 直也 (国際武道大学)
11:00	II B-5	異なる素振り動作が剣道初心者の打突動作に及ぼす影響	椿 武	神戸親和大学	
11:15	II B-6	中学校柔道授業における「柔道演武」の実践	川染 拓海	大阪教育大学	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (102)				
	空手 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会	弓道 専門分科会	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会
	103	204	205	206	207

※各専門分科会企画で開始時刻が異なります。

一般研究発表

第2日目 8月31日(日)

自然科学系

C会場 (103)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:00	II C-1	投げ込みを用いたタバタ式トレーニングにおけるトレーニング法の探索	長谷 晃希	中京大学	石井 孝法 (NPO スポーツ ツコーチング アカデミア)
10:15	II C-2	内股の跳ね上げにおける運動連鎖のバイオメカニクス的研究	池田 希	いけだ接骨院	
10:30	II C-3	重心動揺からみる柔道経験者の姿勢制御の特徴について	曾我部晋哉	甲南大学	
10:45	II C-4	弓道における「離れ」局面での上肢関節角度と狙い・射出角度の関係	原田 隆次	国際武道大学	五賀 友継 (国際武道大学)
11:00	II C-5	個人競技の選手が集団練習する意義について～空手道を題材として～	花田 光	国士舘大学大学院	
11:15	II C-6	口呼吸改善を目的とした鼻呼吸訓練の効果 一空手道選手を対象として一	鈴木 浩司	日本大学 松戸歯学部	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (102)				
	空手 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会	弓道 専門分科会	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会
	103	204	205	206	207

※各専門分科会企画で開始時刻が異なります。

一般研究発表

第2日目 8月31日(日) ポスター発表
P会場 (1階ラウンジ)

大会案内
日程
演題一覧
他

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:30	IIP-1	柔道授業におけるフィードバックの認知が学習成果およびスポーツ参加に及ぼす影響	山本 浩二	関西福祉大学	川戸 湧也 (三重大学)
9:35	IIP-2	柔道授業が柔道整復術ノンテクニカル(精神面)に及ぼす影響(第2報)―養成学校生に対する認識調査を基にして―	福井悠紀子	環太平洋大学	
9:40	IIP-3	柔道競技における国内大会と国際大会の技術特性: 2022～2024年の講道館杯と世界選手権の比較	三宅 恵介	中京大学	
9:30	IIP-4	武道としての「競技かるた」の起源と今日一遊びや競技の「楽しさ」に着眼して―	清野 宏樹	桃山学院大学 人間教育学部	川井 良介 (日本大学)
9:35	IIP-5	近代剣道歌の時代的特徴―計量テキスト分析に基づく考察―	小林 勝法	文教大学	
9:40	IIP-6	日本剣道形実施時の視線行動は熟練度へ関係するの	高橋健太郎	関東学院大学 理工学部	
9:45	IIP-7	運動有能感の高まりを活用した剣道授業の開発	鳶田 瑞希	大阪教育大学 教職大学院	廣野 準一 (信州大学)
9:30	IIP-8	剣道のスコア分析に基づく年代・ポジションと試合内容の関連	池田 孝博	福岡県立大学/ 鹿屋体育大学 連携大学院	
9:35	IIP-9	竹刀形状が正面打撃時に与える影響	山口 幸一	関西福祉大学	
9:40	IIP-10	空手道競技における外傷発生率に関する考察	元野 紘平	神戸大学 整形外科	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (102)				
	空手 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会	弓道 専門分科会	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会
	103	204	205	206	207

※各専門分科会企画で開始時刻が異なります。

招待講演

講師：澤柿 教伸（さわがき・たかのぶ）先生

テーマ：「南極観測隊という極限環境におけるメンタルレジリエンスとリーダーシップ」



私は、1992年から2023年までの間に4度にわたる南極地域観測隊への参加を経験しました。今回はそこでの経験を通して、特に極限の環境における精神的な持続力や回復力の持ち方、そしてリーダーシップをどう発揮するかという点についてお話ししたいと思います。

日本は高い技術力を持っていますが、それだけではありません。南極で行われている調査の数々は、「100年単位で観測を続け、地球全体の気候変動を観察しよう」というもので、継続してデータを収集することが必要です。これは、勤勉な日本人の性質に合っ

ている作業でしょう。

日本発祥の武道は、日々の鍛錬を怠らない、地道なトレーニングの積み重ねを重視しており、日本人の性質を表す運動文化だと思います。そして、武道の目的の一つは、意識的に己を極限状況へ追い込んで、冷静さを保つ、動揺しない、そして油断しないといった「心の扱い方」を知ることだと聞いています。私が南極観測隊における体験から得た知識や行動力が、武道学会会員のみならず、何らかのお役に立てれば幸いです。

澤柿 教伸 教授（2025年～、法政大学・業務執行理事・副学長）

北海道大学理学部地質学鉱物学科卒業、北海道大学大学院環境科学研究科修了。博士（環境科学）。専門は氷河地質学、自然地理学など。北海道大学を経て2015年より法政大学・社会学部教員。国立極地研究所客員教授も務める。1992年から2023年までの間に4度にわたる南極地域観測隊への参加を経験し、私立大学教員初の越冬隊長も務めた。著書に『なぞの宝庫・南極大陸 100 万年前の地球を読む』（共著・技術評論社）、『フィールドに入る（FENICS100万人のフィールドワーカーシリーズ）』（編集／分担執筆・古今書院）、『自然地理学 事典』（分担執筆・朝倉書店）など。2014年日本雪氷学会論文賞、2017年北海道地理学会論文賞受賞、2023年南極観測事業功労者表彰。

<https://www.hosei.ac.jp/info/article-20230621132534/>

【法政の研究ブランド vol.23】—第63次南極地域観測隊越冬隊長が語る—「地球を見続ける」南極地域観測隊の活動と、氷河地質学の研究が拓く未来とは（社会学部社会政策科学科 澤柿 教伸 教授）
:: 法政大学

日本武道学会第 58 回大会 本部企画

場 所：法政大学 多摩キャンパス

開 催 日 時：令和 7 年 8 月 30 日(土) 基 調 講 演 14:10～

シンポジウム 15:20～

基 調 講 演：e スポーツ科学:自他共栄を具現化する「e 武道」の創生を目指して

講 師：松井 崇（筑波大学）

シンポジウム：武道稽古の多様性:オンライン稽古・指導における身体性を考える

司 会：三村 由紀（防衛大学校），筒井 雄大（国際武道大学）

発 表 者：剣道関係 新井 良（剣道スウェーデン代表男子監督）

柔道関係 久保田 浩史（東京学芸大学）

空手道関係 荒川 尊祐（国際武道大学）

企画趣旨

武道が多様性をも含み込むある種の無限の可能性を秘めていることは、女性の武道を考えたり、多様な「性」のあり方について議論をしてきた中で、十分に確認されてきているように思います。それらを受けて、昨年度の第 57 回大会では、「武道ならではのインクルージョン」として、視覚的、知的、身体的に特性を有した方々における武道の取り組みについて様々な情報と生の声を共有していただき、その現状と課題などについて話し合いました。様々な特性を有した方々と共に歩んでいこうとする時に、競技場面におけるインクルージョンのあり方、それ以外の場面でのインクルージョンのあり方など、考えなければならないことが次々と登場し、定まった答えや方向性にまでは至りませんでした。一方で、シンポジウムという場でのディスカッションは、とすると偏狭に陥りがちな私達の視野を大いに開いてくれたものと思います。

その開かれた視野から再度武道を見直したとき、武道が「多様性」を包括していく、という観点はもちろんですが、武道のあり方自体が多様化していることにも気づかされます。特に、前代未聞のコロナ禍に立ち向かって創意工夫してきた中で、オンラインを活用した稽古・指導の在り方が創成されてきました。そして、コロナ禍が落ち着いた現在にあっても、それは随分広がってきているように思います。身体性を中核に据えた身体運動文化である武道を思うとき、オンライン稽古・指導では武道の本質には到底行きつかない、という考えもあると思います。しかし、頭ごなしに否定する前に、一度立ち止まり、オンライン稽古・指導の意義や、オンラインや e スポーツのような新たな時空における武道の身体性を考えてみてもよいのではないのでしょうか。ということで、今回の本部企画では、武道のオンライン稽古・指導における身体性について、e スポーツ科学の最新の研究成果やオンライン稽古・指導の実践者からのお話をうかがいながら考えていければと思います。

企画委員会：大石純子(委員長)、増地克之(副委員長)、三村由紀、松井崇、軽米克尊(幹事)

e スポーツ科学 ～自他共栄を具現化する「e 武道」の創成を目指して～

○松井 崇(筑波大学)

【プロフィール】2007 年、筑波大学体育専門学群卒業。2012 年、筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。博士(体育科学)。柔道五段。2012 年より、学振特別研究員 SPD、スペイン・カハール研究所・客員助教を経て「スポーツ神経生物学」を推進。2015 年、筑波大学体育系(運動生化学)に着任。2017 年より、全日本柔道連盟科学研究部・基礎研究部門で「柔道生理学」を展開。2020 年より、「自他共栄の科学」の一環として、筑波大学スポーツイノベーション開発研究センター・スポーツ IT 分野にて「e スポーツ科学」を先導。2022 年より、筑波大学健康ライフスタイル開発研究センター・副センター長として「老若男女の健康スポーツライフの創成」に取り組む。

「精力善用 自他共栄」。嘉納治五郎師範が 1922 年に提唱した講道館柔道の究竟の目的である。強くなるために効率的に努力し、勝敗を乗り越え、他者とともに鍛えた心身で社会貢献することを理想とするこの指針は、人間教育としての武道、ひいては、体育の普遍的価値を示唆する。

提唱から百余年、競技力や健康に資する「精力善用の科学」は進んだが、他者との競争、協力、共感等の身体性基盤に迫り、その強化に役立つ「自他共栄の科学」は手つかずといえる。他方、他者との競争に大筋活動の不要な「e スポーツ」が登場し、高い包摂性から多様な活用を期待される。本講演では、柔道から、アメフト、陸上、e スポーツまでを手がかりに、自他共栄を生み出す身体性の神髄に迫り、時空を越えてそれを後押しする「e 武道」の創成に向けた自然科学的試みを紹介する。

1. 自他共栄の身体性基盤候補: 絆ホルモン「オキシトシン」と生理的同期現象

近年、定期的な武道稽古が共感性を高め、攻撃性を抑制するなど、社会性の改善をもたらすことが分かってきた(Harwood ら、Aggress Violent Behav、2017)。武道全般に自他共栄効果がある証拠だが、その身体性基盤は不明のままである。

身体接触、動作模倣、アイコンタクト等の身体性コミュニケーションは、個人間の絆やチームワークを育む(Kraus ら、Emotion、2010)。最近、これらが絆ホルモン「オキシトシン (OT)」の分泌を促進し、自他の心臓や脳などの身体反応が揃う「生理的同期現象」を生み出すことが分かった。これらは人間の社会性を担う身体性機構、すなわち「社会生理機構」として注目される。私も、この社会生理機構が自他共栄を具現化する身体性基盤になると想定した。

2. 自他共栄の科学: 柔道が身体接触を通じて高めるオキシトシン分泌

上述の仮説を検証すべく、組技系の柔道稽古が一人でのエクササイズでは高まりにくい OT 分泌を促進するかどうかを検討した。大学生男女柔道家に普段通りの稽古を実施してもらい、その際の唾液中 OT 濃度を定量した。その結果、柔道稽古は男女ともに、特に身体接触の多い寝技稽古を通じて OT 分泌を促進した(松井ら、武道学会、2022)。武道が身体接触による OT 分泌を通じて、性別を越えて自他共栄を具現化しうることを示唆する初めての証拠である。

3. 身体接触は必須なのか?: スポーツ種目毎の自他共栄機構

自他共栄に身体接触が必須なのかどうかを探るため、まず、アメリカンフットボー

ル選手の練習が OT 分泌に及ぼす影響をポジション毎に検討した。その結果、身体接触と類似動作の多いディフェンス選手では、そうでないオフェンス選手と比べて、一体感とともに OT 分泌が高まりやすいことを確認した(松井ら、体力医学会、2025)。自他共栄には身体接触と類似動作が重要になる可能性がある。

次に、完全な非接触スポーツである陸上トラック競技の練習にお邪魔し、選手達の並走がステップ頻度と心拍数の同期に及ぼす効果を検討した。その結果、並走は独走と比べて、ペア間のステップ頻度と心拍数の同期を促進し、一体感とともに OT 分泌を高めた。また、高まった OT と主観的疲労度や走タイムとの間にポジティブな関連もみられた(松井ら、体力医学会、2025)。

これらの結果は、共通の目標に向けた競争や協力が自然な生理的同期を生み、これが身体接触なしでも OT 分泌を促進する可能性を初めて示唆する。OT は絆形成だけでなく、ストレス緩和や脂質酸化にも役立つことから(Fukushima ら、Cell Rep、2022)、個人の身体パフォーマンスにも一役買う可能性がある。すなわち、OT は、自他共栄と精力善用の相互作用を促進する身体性基盤としても重要かもしれない。

4. e スポーツ科学：体力水準を越えた自他共栄を目指して

ビデオゲームの対戦による e スポーツは、ダイナミックな身体動作を要しないことから、性別、年齢、障がいの有無等を乗り越えるインクルーシブな活用の期待が大きい。しかしながら、その身体性基盤に関する科学は全く進んでいないのが現状である。

私どもは、バーチャルサッカーを用いて、「マインドスポーツ」とも呼ばれる e スポーツが心と体の交差点としての心臓の動きに及ぼす影響を検討した。その結果、一人プレー(ビデオゲーム)では心拍数が変動しないものの、対戦プレー(e スポーツ)が心拍の増減を引き出し、それをプレーヤー間で同期させた。次に、e スポーツが OT 分泌に及ぼす影響を検討したところ、対面プレーが勝敗によらず、笑顔と OT 分泌を年代を越えて促進したが、それらはオンラインで消失した(Matsui、ICSSPE、2024)。

これらの結果は、e スポーツの対面プレーがフィジカルスポーツと同様に心拍同期と OT 分泌をもたらし、インクルーシブな自他共栄を具現化する可能性を示唆する。しかしながら、現在のオンラインプレーではそれが難しいことも同時に意味する。

5. 「オンラインの壁」を乗り越える：バイオシェア技術による e 武道の創成に向けて

上述のオンラインの壁は越えられるのか？私どもは非言語的な身体性信号をサイバー空間でやりとりすると、心理的距離感を近づけることができるかどうかを e スポーツを用いて検討した。そのために、オンラインで相手プレーヤーの心拍数を視覚・触覚的に感じられる「バイオシェア技術」を開発し(特願 2022-173185)、その生理心理的効果を検証した。その結果、通常のオンラインプレーでは生じない OT 分泌が、心拍数をやりとりすることで対面プレーと同等のレベルにまで回復し、「共在感」の形成に役立つことを初めて見出した(Modar と Matsui ら、IEEE Access、2024)。これらの結果は、競争時の身体性信号のやりとりが自他共栄の神髄であり、それをサイバー空間に広げる e 武道の創成に向けた具体的方策になりうることを示唆する。

当日は、今秋に大阪万博で披露予定のバイオシェア技術を実演させて頂きながら、武道と e スポーツという一見異質な文化を自他共栄の理念に基づいて接続し、科学と理念、そして、技とテクノロジーとを橋渡しする e 武道の提案を試みたい。

本部企画シンポジウム 武道稽古の多様性：オンライン稽古・指導における身体性を考える

剣道スウェーデン代表チームにおけるオンライン稽古の状況

○新井良（剣道スウェーデン代表男子監督）

【プロフィール】ギリシャ・ペリステリ剣友会館長（2015 年より）、
剣道スウェーデン代表男子監督（2020 年より）

活動の現状

現在、ギリシャ共和国のアテネに居住しているが、スウェーデン代表チームの活動にも携わせていただいている。2018 年の世界大会後よりスウェーデン代表の助監督、2020 年には男子監督に就任した。費用や時間の関係から、頻繁にスウェーデンを訪れることができないこともあり、オンラインでの稽古を取り入れ、現在は 4 都市で週に 1 度、1 時間程度のオンライン稽古を実施している。実際に竹刀を交えて稽古することが最善であることは間違いないが、オンラインでの稽古でもある程度の効果があるとも感じている。2025 年 5 月に開催された第 33 回ヨーロッパ剣道選手権大会では、男子個人戦においてスウェーデン勢としては 32 年ぶりに優勝を果たした。

オンライン稽古の効果

オンライン稽古の効果はいくつか挙げられると思うが、まず継続して同様の稽古を行うことができる点が挙げられる。何かを変えるにはある程度の時間が必要で、一定期間、同じ稽古を継続することができるのは大きな利点である。また、住んでいる地域が違っていても稽古内容はほぼ同様のため、合宿や試合前のウォーミングアップ等、チームが集まって稽古をするときでも、スムーズに稽古に入ることができるのも利点の一つであると考え。稽古の動画もチーム内で共有しているため、他の地域の選手がどのように稽古をしているか、イメージをつかみやすい仕組みになっている。さらに、候補選手の多くは普段指導的な立場にある場合が多いが、オンライン稽古中は自身の稽古時間として活用することができる。最低限週に 1 度、自分の稽古に集中する時間を取れ、これにより競技に対する意欲を継続できる側面もあると考える。

課題

現在、代表候補選手の多くは首都ストックホルムに住んでいるため、ストックホルムでの稽古は大人数での稽古となり、細かいところまで見るのが難しいこともある。両端にカメラを設置して録画することにより、改善しようとしているが、録画した動画を見返すのにも時間を要する。また、2 週間に 1 度、オンラインでのチームミーティングを行っており、その中で改善点をチーム全体に共有しているが、稽古中にその場でアドバイスを送れる指導者の育成が必要だと感じている。ストックホルム以外での都市は、比較的少人数で稽古が行われるため、稽古中にアドバイスを送ることは比較的容易である。しかしながら、地方に住む候補選手が少ないため、稽古相手は選手が所属するクラブのメンバーであることが大半である。各都市に複数人の候補選手を確保することで、稽古の質を高めることが課題として挙げられる。

柔道におけるオンライン稽古・指導について

○久保田浩史（東京学芸大学）

全日本柔道連盟指導者養成委員会委員、デフ柔道強化委員、講道館柔道六段

コロナ禍で、スポーツ活動は制限され、中でも対面で身体接触を伴う柔道の稽古はかなり制限された。それまで導入されていなかったオンラインによる稽古や指導は、感染拡大防止の緊急避難措置として急速に普及した。このコロナ禍及びそれ以降における柔道のオンライン稽古・指導の実践から見えてきた利点や限界、そして今後の可能性について整理する。

まず、柔道の技能は、対面で行わなければその身体感覚が伝わりにくいという特性がある。組み合わせなければ相手や自身の力がどう伝わるか体感することはできない。この点は、他のスポーツ活動とは異なり、柔道のオンライン稽古・指導における最大の課題として残る。しかし、オンライン稽古・指導が新たな可能性を提示したことも事実である。コロナ禍以前、柔道の稽古・指導は道場での対面形式が常識であり、オンライン形式はほとんど普及されていなかった。しかし、コロナ禍において、多くの指導者や団体はオンライン稽古・指導という新たな手法を模索した。手探りながら Zoom 等を用いた合同トレーニングや、指導者が自宅から技術指導を行う試みがなされた。柔道専門分科会も学校授業用に柔道指導における ICT 活用に関する資料を公開した。私自身、大学の柔道授業用にオンデマンド教材を作成し、受講者には自宅でできる身体活動課題を課した。これらのオンライン稽古・指導の利点と限界を整理する。利点としては、普段交流のない道場や選手との交流が生まれること、遠隔で指導者や学習者が繋がるということが挙げられる。例えば、「野村道場」では野村忠宏氏自身がオンラインで指導を行い、全国の子どもたちに技術や考え方を伝えたり、「ひのまるキッズ」ではオンラインを活用した柔道指導や交流イベントを実施したり、新たなコミュニティ形成を試みている。合同でオンラインでの稽古や基礎体力を向上させるトレーニングによりオンライン上で他者と繋がること、同調して心拍数を上昇させるような活動は絆を深めると言われている。また、コロナ禍の制約により対人技術の練習が難しくなった分、インターネット動画を視聴しながら基礎的な動作を単独で反復練習する機会が生じ、個々の技術習得に集中することが増えた。また、技の説明や指導内容のアーカイブ化がなされ、復習や指導内容の共有に役立った。これらの事例は、オンラインが対面指導の代替ではなく、補完的な役割として、また新たな指導形態として機能しうる可能性を示唆している。しかしながら、オンラインでは対人における身体感覚は体感できないという事実は、対面での稽古・指導の重要性を再認識させたと私は考える。

柔道におけるオンライン稽古・指導は、コロナ禍という特殊な状況下で急速に発展したが、その経験は柔道指導のあり方を考える上で貴重な示唆を与えてくれた。オンラインでの稽古・指導の限界を理解しつつ、新たな指導法を模索し、柔道の普及・発展に繋がる可能性を追求していくことも必要であろう。オンライン稽古・指導でどこまで柔道における身体感覚が実現できるのか、また最新テクノロジーにより稽古・指導は変わるのか、柔道を広義で捉えた場合はどのように考えられるか等、聴者の皆様と共に議論を深めたい。

Web 空手道指導の実践とその意義：身体運動文化としての空手道における試み

○荒川尊祐（国際武道大学）

【プロフィール】 国際武道大学特任准教授・同大学空手道部監督

日本武道館武道学園講師 白水修養会主宰（空手道）

はじめに：空手道という身体運動文化を、Web を介して指導した実践について報告し、その成果と意義、さらには直面した課題について考察する。武道の本質や稽古の場に対する再考、コロナ禍による社会変容とデジタル技術の活用、さらには Web 指導の可能性について論じる。

1. 道場という稽古空間の再考：武道の稽古は「道場」という特定の空間において行われてきた。しかし、武術の本来の目的は実戦、すなわち戦場での技術発揮にある。そうした観点から見れば、道場での稽古そのものが、すでに一種の「仮想空間」であると言える。ゆえに、Web 空間で行う稽古もまた、現代の技術的条件を前提とした「仮想稽古」として、武道の本質から大きく逸脱するものではない、と捉えることも可能である。

2. コロナ禍による転換点：新型コロナウイルス感染症の拡大は、世界的に日常生活に多大な影響を及ぼした。空手道のような、対人接触を前提とした稽古は感染拡大のリスクが高いと見なされ、活動の継続が困難となった。しかし、この未曾有の危機は同時に新たな可能性を開く契機ともなり得た。

3. Web 学習環境の整備と導入：日本はしばしば「デジタル後進国」と評されるが、教育分野においても ICT の導入は諸外国に比して遅れていた。しかし、コロナ禍における対面機会の減少は、インターネットを活用した教育手法の導入を急速に促進した。空手道においても例外ではなく、Web 稽古が導入され、物理的空間に依存しない指導方法が模索されるようになった。

4. Web 稽古の実践と反応：筆者が主宰する道場では、Zoom 等を用いた Web 稽古を開始した。当初は見切り発車に近い形での実施であったが、参加者からは「通常の対人稽古よりも指導者との距離が近く感じられる」「技術だけでなく、理念や文化についても学べる」といった肯定的な意見が寄せられた。このように Web 稽古は単なる代替手段ではなく、学習の質を高める新たな機会ともなり得る。

5. Web 指導の拡張可能性と障がい者支援への応用：さらに、松井完太郎（国際武道大学）、三村由紀（防衛大学）らとの共同研究においては、障がい者を対象とした Web 指導の可能性が探求された。ヨーロッパ在住の脳性麻痺を有する障がい者に対し、ライブ配信およびオンデマンド型の動画教材を通じて指導を実施したところ、運動能力の向上が確認された（現地の理学療法士によるインタビューより）。この結果は、Web 指導が地理的制約を超えて多様な対象に身体運動の機会を提供し得ることを示している。

結論：Web 指導・稽古が有効な手段であるのは、空手道が、伝統的に一人で形稽古をすることが継続してなされてきたことによるところが大きい。すなわちコロナ禍を契機に、「伝統的な対人稽古のあり方が見直され、Web を活用した新たな稽古形態が創出された」のではなく、「空手道の伝統的な稽古方法が、Web 活用に親和性があつた」のだと考える。今後は、その効果の検証とともに、障がい者や海外在住者への支援を含めた、さらなる展開が期待される。

空手道専門分科会企画

日本武道学会第58回大会の基調講演・シンポジウムのテーマは「e スポーツ科学：自他共栄を具現化する「e 武道」の創生を目指して」である。今回の空手道専門分科会企画では、未来のe 空手を考える前段階として、現行競技におけるデータサイエンスの活用について検討する。

空手道競技においてデータアナリシス導入を開始したのはTOKYO2020 オリンピックに向けた準備からであり、起点となったオリンピックに向けた準備とオリンピック競技会を対象として「空手道競技におけるデータサイエンス」をテーマとする。

さらに、データサイエンスの活用は競技の戦略的な側面を強化するだけでなく、選手のパフォーマンス向上にも寄与する。例えば、選手の動きや技の成功率を詳細に分析することで、トレーニング方法の改善や個々の選手に最適な戦術の策定が可能となる。また、データを基にしたフィードバックは、選手が自分の強みと弱みを理解し、より効果的な練習を行うための重要なツールとなる。これにより、競技の質が向上し、観客にとってもより魅力的な試合が提供されることが期待される。

本企画で扱う空手道のデータサイエンスの知見は、間合いを重視する他競技、例えば、剣道、なぎなた、テコンドーなどにも、応用可能であると考えられる。空手道だけでなく、他武道の関係者のみなさまのご参加を期待している。

テーマ：「空手道のデータサイエンス」

司 会：空手道専門分科会企画委員 麓 正樹（東京国際大学）

開会挨拶：空手道専門分科会会長 鈴木 浩司（日本大学）

講師及び講演

1. 林 晃（全日本空手道連盟ナショナルチーム元監督）
「TOKYO2020 に向けた空手道のデータ活用」
2. 大徳 紘也（全日本空手道連盟アナリスト）
「TOKYO2020 とそれからの空手道のデータサイエンス」
3. 千葉 洋平（株式会社ユーフォリア、フェンシングナショナルチーム前アナリスト）
「現代スポーツのデータサイエンスとそこからみた空手道」

武道ツーリズムは推進すべきか否かー 3つの事例から考えるー

日時：8月23日（土）15：30～17：00 開催形式：Zoomによるオンライン

※ 本企画は、大会前週に Budo World と共催でオンラインにて開催します。

講師：和田 崇（県立広島大）

【プロフィール】高校教員と民間企業を経て2008年に大学教員に転身。現在、県立広島大学地域創生学部教授。専門は人文地理学。博士（文学）。剣道錬士七段。

武道ツーリズムとは

スポーツ庁は、武道ツーリズムを「武道や武術の見学、観戦、実技体験、施設見学等、発祥の地である日本でしか体験できない、スポーツと文化（伝統文化・精神文化）が融合した、希少性の高いツーリズム」と定義する。また同庁は、武道ツーリズムに活用する資源として、卓越した技能と修練・修行を伴う精神世界に触れる伝統スポーツとしての「武道」と、武道から波及した文化や伝統的要素を楽しむスポーツとしての「BUDO」の2つを挙げている。

名古屋市事例

名古屋市は、2021年策定の「名古屋市スポーツ戦略」に、尾張徳川藩の武道文化を活かした武道ツーリズムの推進を明記した。そして、同年設立の名古屋市スポーツコミッションが中心となり、世界弓道大会期間中の関係者向けツアーの企画開催、ライト層向けの関連施設や体験メニューの紹介などに取り組んでいる。そこでは、主にライト層が楽しめるように娯楽性が重視されている。

奈良市事例

奈良市柳生地区は柳生新陰流と長谷川流棒術の発祥地として名高く、柳生家を題材としたNHK大河ドラマが放送された1971年から多くの観光客が訪れた。ブーム終了とともに観光客数が減少したが、2006年から住民主体で開催する柳生さくら祭、2014年から地域おこし協力隊員が仕掛ける里山体験コンテンツ事業を通じて、歴史・武術愛好者やコスプレ愛好者が訪れるようになっている。来訪者が重視するのは物語性や聖地性だという。

鹿児島市事例

示現流を継承する鹿児島市の東郷財団は、欧米富裕層を中心とする観光客向けの稽古体験（10,000円/人）を受け入れている。門人であるイギリス人が経営する旅行会社が仕掛け役であり、示現流に加えて陶芸や琵琶など現代に継承される島津藩の歴史・文化を体験するツアー商品を造成し、欧米の旅行会社にBtoBで販売している。示現流体験では日常性や真正性が重視されている。

武道ツーリズムは推進すべきか否か

3事例の共通点は地域固有の武道文化が集客資源に位置づけられていることである。名古屋市では尾張徳川藩、奈良市では柳生藩、鹿児島市では薩摩藩を代表する文化の1つとして武道が位置づけられ、他の歴史文化と組み合わせた地域文化観光が展開されている。一方、3事例の相違点は武道の活用方針であり、名古屋市では娯楽性、奈良市では物語性と聖地性、鹿児島市では日常性と真正性が重視される。本講演では、これらの点を踏まえ、地域文化観光の1形態としての武道ツーリズムの推進可能性を考えたい。

弓道専門分科会企画

弓道からみた日本と中華圏域の文化交流 (日本武道学会第 58 回大会 弓道専門分科会企画)

本報告は、文化人類学的視点から、日本および中華圏（中国大陸、香港、台湾）における弓道と射礼文化の伝播と再興の実態を明らかにすることを目的とする。講演者は 2017 年より神戸にて弓道を学び始め、以降、国際シンポジウム等の機会を活用し、各地の弓道場および関係者への訪問・聞き取り調査を行ってきた。

2018 年 3 月には、香港中文大学において「中国射礼与日本弓道的教育伝承」と題する講演を行い、香港弓道場および同協会を訪問した。さらに、珠海市では北京師範大学珠海分校の求真弓道館にて、内藤敬氏の弟子である王富曦氏より案内を受け、北京師範大学—香港浸会大学聯合国際学院では、弓道部監督の李軍陽氏から中国伝統弓術の弓道場「一陽射圃」の建設経緯と自身の内藤氏から弓道を学んだ学習歴についての証言を得た。深圳市では中国正鵠会会長の胡震環氏に会い、同会設立と国際弓道連盟との交流について聴取した。

続く 4 月には、筑波大学蓬矢館を訪れ、松尾牧則氏および大学生の稽古を視察したほか、入江康平氏と面会し、2017 年に江蘇省徐州市で行われた「中国第一回礼射国際学術会議」への日本側の参加状況について確認した。6 月には山東省済南市の奎虚射圃を訪問し、鄭海廷氏より、北京師範大学—香港浸会大学聯合国際学院で内藤氏から弓道を学んだご子息の影響で弓道を学び、中国伝統弓術の弓道場を開設した経緯など聞き取り調査を行った。

8 月に中国の指導学生たちを連れて日本の弓道場を見学し、日本の学生達と交流してきた内藤敬氏と大阪で面会し、1995 年 9 月以降、天津市と珠海市で弓道場を建設し、弓道を教えてきた長い経歴などについて聞き取り調査を行なった。10 月末から 11 月初旬にかけては、北京市内の五輪館および澄明弓道場を訪問した。澄明弓道場の指導者である許博堯氏は、日本の帝京大学弓道部出身であり、日本と中華圏における人材交流の一端を示していた。2019 年 11 月には、中国伝統弓の第一人者・徐開才氏へのインタビューを実施し、続けて中国社会科学院世界宗教研究所にて「日本的武道与宗教：以弓道為例」と題する講演を行った。さらに、清代創業の弓具店「聚元号」の第十代当主・楊福喜氏にも取材し、伝統弓文化の復興動向を把握した。

同年 12 月には台中科技大学での学術会議で発表を行い、台北市内の蔵月弓道館を訪問し、台湾における弓道文化の定着状況も確認した。

以上の調査から、日本の弓道文化が古代中国の射礼に由来しつつ独自に発展してきたこと、そして現在では中華圏各地における伝統射芸復興の一因となり、文化交流と相互理解の媒介となっていることが明らかとなった。

- 日時 : 令和 7 年 8 月 31 日 (日) 14:30~16:00
開催場所 : 法政大学多摩キャンパススポーツ健康学部棟 103
予定 : ①企画・趣旨説明 五賀友継 (国際武道大学)
②講演「弓道からみた日本と中華圏域の文化交流」 秦兆雄 (神戸市外国語大学)
③質疑応答
司会 : 原田隆次 (国際武道大学)

なぎなた専門分科会企画

武道の未来をつなぐ：道具と職人から考える持続可能な取り組み
～する・みる・ささえる取り組みの事例から持続可能なSDGsを考える（第2弾）

本研究会は、「なぎなた」を中心とした武道の価値を、持続可能な社会づくりの観点から再考する取り組みの第2弾です。昨年度は、地域スポーツやスポーツ大会ボランティア、大学スポーツなど、「支える側」の視点から、大会や行事を通じたSDGsへの貢献や、豊かな社会と健康的な生活の実現に向けた新たな取り組みについて議論しました。これまでの研究では、「する（実施者）」「みる（観戦者）」「ささえる（支援者）」という多様な立場から、地域活性化やウェルビーイングの実現に向けたスポーツの可能性を探ってきました。特に「なぎなた」がもつ社会的価値を発揮し、より良い社会づくりに貢献していくことは、今後ますます重要であるといえます。

今回は、その第2弾として「道具」に注目し、武道の持続可能性について考えます。現在、武道具の材料入手の困難さや、職人の高齢化・減少といった課題が深刻化しており、「なぎなた」を含む武道の継続にも影響を及ぼし始めています。第1部では、このような現場の現状を知る一例として、胴の工房見学を通じて、職人・田中敏和氏の技術やものづくりの課題を報告し、武道具づくりの持続可能性について考えます。第2部では、参加者自身が武道具の修理や手入れを体験し、道具を大切に使い続ける意識と、実践的なスキルの習得を目指します。

本研究会を通じて、「する・みる・ささえる」すべての立場から、武道の持続可能な未来をともに考える機会としたいと考えています。

日 時：2025年8月31日（日）14：00～15：30（予定）

開催方法：対面+Zoomを用いたハイブリッド開催（予定）

開催場所：法政大学 多摩キャンパス

進行予定：

- ①なぎなた専門分科会代表挨拶 田中ひかる（近畿大学）
- ②なぎなた用具の現状とこれから－武道具の歴史と未来－ 木村有里（聖心女子大学）
- ③体験会＜防具修理ワークショップ＞ 橋元城太郎（京都もりわき）、木村有里、宮田尚美
・必要な持ち物（ご自身でご準備いただくもの）：修理が必要なすねあて、先のとがったはさみ、セロハンテープ
・必要な方には、体験会で使用するキット（先着20名）を購入いただきます。
・キット内容：革ひも（すね用）¥500、ラジオペンチ ¥220、送料別
・キットを申し込みして頂いた方には、会場で配布いたします。
・ただし、オンライン参加の方は8月31日までに送付いたします。

詳細は申し込みフォームにてお知らせします。

④質疑応答

司会：宮田尚美（名古屋市立本城中学校）

申し込み：

参加をご希望される方は、8月18日（月）までに、申し込みフォームにて申し込みください。

質問等は、なぎなた専門分科会事務局までご連絡ください。

なぎなた専門分科会事務局 担当：田中ひかる（近畿大学）

E-mail : nagilabo2020@gmail.com 申し込みフォーム : <https://forms.gle/7WpSdjShPx6AXAit8>



【申し込みフォーム】

障害者武道専門分科会企画

『ID 柔道 Study Camp 2025』

— 第1回 ID (Intellectual Disability=知的障がい) 柔道強化合宿の開催と今後の可能性 —

話題提供者 濱名 智男 (日本文化大学)
石井 陽平 (千葉県立千葉商業高等学校)
小林 晴奈 (ID 柔道選手保護者)
高部 摂子 (ID 柔道選手保護者)

コーディネーター 中村 和裕(福山大学)

日時:令和 7 年 8 月 31 日(日)14:00～15:30

場所:法政大学 多摩キャンパス スポーツ健康学部棟 206

今回は、全日本柔道連盟・知的障がい者柔道振興部会部会長・一般社団法人 ID 柔道 Network 代表理事である濱名智男先生から、2025 年 5 月 3～6 日に日本文化大学（東京都八王子市）で開催された「ID 柔道 Study Camp 2025」についてご報告いただきます。

「ID 柔道 Study Camp 2025」は、全日本柔道連盟 ID 柔道強化合宿として、また 2024 年 6 月に設立された一般社団法人 ID 柔道 Network のスタートアップ事業として開催され、オーストラリア柔道連盟から招聘された ID 柔道選手団に加え、スウェーデン柔道連盟からの指導者も参加し、総勢 100 名を超える選手・指導者による国際的な交流合宿となりました。

濱名先生からの自然体の理、柔の理、崩しの理についての説明を踏まえ、参加選手たちが、積極的に手を挙げて発言をする姿も見られました。また、その後に選手同士で実際に組み合いながら、どの方向に、どのように動けば、相手を崩すことができ、技をかけられるのか、また逆に自分が相手の技にかかりにくくするためには、どの方向へどのような動きをすればよいかなどを実際に試すこと通じて、理解を深める姿が見られました。

運営側・受講側の双方で参加した石井陽平先生、そして ID 柔道選手の保護者にも話題提供者としてご参加頂き、ID (Intellectual Disability=知的障がい) 柔道強化合宿の開催と今後の様々な可能性について議論します。

参加無料(一般の方も参加できます)

開会時 10 分ほど頂いて障害者武道専門分科会総会を実施いたします。

ご不明な点は、松井までお問い合わせください。 Kantaro@budo-u.ac.jp 090-2240-5394

一人一人が主役の修練

～少林寺拳法におけるインクルージョン～

日 時：2025 年 8 月 31 日(日)14:00～16:00

場 所：[対面] 法政大学（多摩キャンパス） ／ [オンライン] Zoom

プログラム

【第 1 部】話題提供（14:30～15:00）

- ・ 話題提供者①：桑島 亜紀（長野県安曇養護学校 教頭）
- ・ 話題提供者②：三浦 勇（KHSC 三田支部 支部長）
- ・ 話題提供者③：新井 庸弘（元一般財団法人少林寺拳法連盟 会長）

【第 2 部】パネルディスカッション（15:00～16:00）

- ・ パネリスト：話題提供者 3 名
- ・ コーディネーター：中島 正樹（富士見丘中学高等学校教諭）

【目的・趣旨】

少林寺拳法は「自己確立」と「自他共楽」を理念とし、単なる技術の修得にとどまらず、人格の向上と社会との調和を目指す武道である。本シンポジウムでは、「一人一人が主役の修練」というテーマのもと、少林寺拳法におけるインクルージョンの在り方を深く掘り下げる。

修練においては、すべての拳士が自分らしく輝き、成長を実感できる環境が求められる。性別、年齢、障がいの有無、文化的背景などの多様性を尊重し、それぞれの拳士にふさわしい関わりや評価の仕方を考えることが重要である。誰もが「自分が主役」として修練に臨めるようにすることは、道場における関係性の質を高め、学びのモチベーションを育てる鍵となる。

本シンポジウムでは、こうした多様性に対応した評価のあり方、そしてそれがどのように身体性の育成や修練の質の向上につながるのかを検討する。また、修練と大会の両面において、「公正で納得感のある評価」とは何かを問い直し、多様な拳士が自らの成長を実感しやすい修練環境をどう実現するかについても議論する。

参加者それぞれが「一人一人が主役」となるための実践的な知見を共有し、今後の少林寺拳法の指導・運営に役立つ視点を得ることを目的とする。

【参加対象者】

少林寺拳法指導者および拳士、武道・スポーツ関係者、教育・福祉関係者、一般参加者（少林寺拳法に興味がある人）

【期待される成果】

- ・ 少林寺拳法を通じたインクルージョンの実践方法を共有
- ・ 多様な拳士に適した評価方法の検討
- ・ 身体性の育成とその評価方法の確立
- ・ 大会や修練における評価基準の見直しと公正な評価方法の議論
- ・ これらの成果を道場や教育現場での実践につなげる

以上

柔道の旗判定の意義に関する研究：柔道経験の有無と曖昧さ耐性

○成田泰崇(国士舘大学), 佐藤雄哉(国士舘大学), 吉永慎也(国士舘大学),
田村昌大(國學院大學), 星野映(甲南大学), 河緒一彦(関西学院大学)

【目的】

柔道における旗判定は、審判の主観的判断に基づいて勝敗が決定される重要な要素である。ただし、技の効果や攻防の優劣が明確でない場面では、審判の印象や解釈に委ねられるため、その判定に一定の曖昧さが伴うことがある。この曖昧な判定は、柔道の経験者にとっては、武道特有の駆け引きや間合いの妙として受け入れられることが多いが、未経験者にとっては不透明で不公平に感じられることもある。特に観戦者の「曖昧さ耐性(ambiguity tolerance)」や柔道経験の有無が、旗判定の受け止め方や試合の面白さの感じ方に影響を与えている可能性がある。近年、国際柔道連盟(IJF)によるルール改正が進み、判定の明確化や一貫性の向上が図られているが、その一方で柔道本来の武道的魅力が失われる懸念もある。本研究では、観戦者の曖昧さ耐性と柔道経験の有無が、旗判定への評価や試合の印象にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

K 大学学生 123 名を対象に、「柔道の旗判定に関する調査」という題目で、「曖昧さ耐性」に関連する質問内容を組み込んだアンケートを作成し、Google フォームを用いて Web 上で調査を行い、分析、考察をした。

【結果および考察】

本調査では、柔道の旗判定に対する評価および試合中の心理的反応について、柔道経験の有無を基準に 2 群(経験あり／なし)に分けて t 検定を実施した。その結果、「判定の瞬間に緊張や興奮を感じた」、「判定は妥当だったと思う」といった項目において、経験あり群の方が有意に高い評価を示し、旗判定に対して肯定的に捉える傾向が確認された。

一方で、「判定に曖昧さを感じた」、「判定の結果に納得している」といった項目については有意差が認められず、旗判定に対する評価は経験の有無だけでは一概に説明できないことが示唆された。これにより、判定の印象には個人的な価値観や曖昧さに対する耐性、観戦経験などが複雑に影響している可能性が考えられる。

また、現在の国際柔道連盟(IJF)のルールでは、延長戦(ゴールデンスコア)での指導による決着が増加傾向にある一方で、試合の終了タイミングが予測しづらく、観戦者にとっては不明瞭で不完全燃焼な印象を残す場合もある。これに対して旗判定は、試合終了と同時に審判の判断が示されるため、視覚的な明瞭さと演出的な緊張感があり、観戦者にとっての満足度や納得感を高める可能性がある。

さらに旗判定は、終了時間が予測しやすく、ジュリーの介入による試合中断が発生しないという運営上のメリットもある。これらを踏まえると、旗判定方式は、現行の長時間化しやすい延長戦(ゴールデンスコア)による指導決着よりも、観戦者に受け入れられやすい形式として再評価される余地がある。今後は、観戦者の満足度や納得度の定量的測定を通じて、競技運営と観戦体験の最適化を図る必要がある。

IA-2

全日本柔道連盟による「月経による出血が柔道衣に付着していることが目視できた場合の対応方針」発出の経緯

○稲川郁子（日本体育大学）

【目的】

2025年3月、公益財団法人全日本柔道連盟（以下「全柔連」と記す）審判委員会は、「月経による出血が柔道衣に付着していることが目視できた場合の対応方針」についての通知を発出した。本通知は、全柔連内の複数の専門委員会において検討を経たものである。本研究では、本通知が発出されるに至った経緯と、検討された主な論点を整理することを目的とする。

【方法】

通知の条文策定に関して、全柔連医科学委員会における検討事項を中心に、関連文献およびインターネット上の報道資料をもとに分析を行った。

【結果および考察】

月経時の経血処理および漏れの問題は、女性アスリートにとって極めて重要かつ切実な課題である。特に白や淡色のユニフォームを着用する競技では、漏れた経血が目視されることにより羞恥心や不安を引き起こし、競技への集中やパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性がある。また、こうした問題は心理面のみならず、衛生面での懸念も含んでいる。とりわけ、ユニフォームが白色であることにアイデンティティが存在し、彼我の距離が至近である柔道競技の特性上、女性の柔道選手における経血漏れの問題はより深刻である。

これまで、女性アスリートの経血に関する問題はタブー視され、公の議論の対象とならず、個人の衛生管理の問題に帰せられる傾向があった。しかし、例えば経血漏れの事実をもって敗戦や試合継続が不可能となる事態は選手の尊厳を損なうものであり、規程や対応指針の整備による対応は求められる。また、サニタリーショーツや吸収性素材を用いたインナーウェアの開発など、テクノロジーを活用した予防的アプローチも重要である。こうした製品がパフォーマンスを妨げず、かつ不安感の消失に寄与することで、選手の身体的・心理的負担を軽減する可能性がある。

2024年5月28日、WHOが定めた「月経衛生の日」に公開されたYahoo!ニュースの記事によると、2023年開催のある地方大会において、試合中に経血漏れが確認されたものの、選手に着替えや生理用品の用意がなかったため、試合続行が不可能となったケースがあったという。実際に本件の現場にいた大会役員によると、当時は経血の柔道衣への付着に関する規程が存在せず、選手の了解を得たうえでのやむを得ない対応であったという。

このような背景を踏まえ、2024年より、全柔連では審判委員会が医科学委員会に意見を求めるかたちで経血漏れに関する対応指針の検討および整備が進められた。本発表では、策定された規程を基に、その検討の経緯と課題について報告する。

【結論】

全柔連が2025年3月に通知した柔道衣への経血付着に関する対応方針は、2023年の大会における経血漏れにより試合続行が不可能となった事案を契機に、審判委員会が医科学委員会等の意見を取り入れ策定したものである。経血漏れは、女性アスリートの心理的負担や競技パフォーマンスの低下、さらには衛生面の問題にもつながる重要な課題であるが、これまで十分に議論されてこなかった。今回の対応指針策定は、女性柔道選手が安心して競技に集中できる環境整備の一助となることを目的としている。

コロナ禍における鰐競り合いの厳格化が国際レベルの剣道試合に与えた影響

〇二ツ森 飛鳥（法政大学大学院）、小田 佳子（法政大学）、永木 耕介（法政大学）

【目的】

剣道の試合では、「鰐競り合い」の長時間化や不当な行為が長年の課題とされてきた。馬場ら（1989）は、剣道の試合時間の半分以上が鰐競り合いによって費やされていることを指摘している。この鰐競り合いについて、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、「新型コロナウイルス感染症が収束するまでの暫定的な試合・審判法」（全日本剣道連盟，2020）（以下、暫定的試合審判法）の中で、趣旨1として感染予防のために、趣旨2として不当な鰐競り合いをはじめとした諸反則行為の解決のために厳格化が図られた。剣道の試合において鰐競り合いが課題であったことを踏まえると、暫定的試合審判法の趣旨2について、実際の試合における影響を検証する必要があると考えられる。

剣道の試合における暫定的試合審判法の影響について、国内の大学生レベルの剣道試合を対象とした池田ら（2021）や、全日本剣道選手権大会を対象とした香田ら（2023）は、鰐競り合い時間が減少したとともに、不当な鰐競り合いによる反則行為が減少したことを指摘している。このように、国内の剣道試合においては暫定的試合審判法が鰐競り合いにかかる課題を改善する可能性が見出された一方で、暫定的試合審判法の影響について、国際レベルの剣道試合を対象とした研究は乏しかったところ見当たらない。

そこで、本研究では、国際レベルの剣道試合として世界剣道選手権大会男子団体戦を対象とし、暫定的試合審判法の運用が試合に与えた影響について明らかにすることを目的とする。

【方法】

世界剣道選手権大会（以下、WKC）における、コロナ禍以前の16WKC（日本，2015）および17WKC（韓国，2018）、コロナ禍以後の19WKC（イタリア，2024）の3大会男子団体戦（5人制）準決勝以上の団体9試合（計45試合）を対象に、以下の分析項目に基づいて試合分析を行った。※18WKC（フランス，2021）については新型コロナウイルス感染症のため中止

《分析項目》（各大会における…）

- ①勝敗の内訳 ②総有効打突数とその内訳 ③試合時間
- ④鰐競り合い時間 ⑤分かれ・合議の回数 ⑥総反則回数とその内訳

【結果および考察】

各大会の総試合時間に占める総鰐競り合い時間の割合は、コロナ禍以前の16WKCで60.9%、17WKCで63.6%であったのに対し、コロナ禍以後の19WKCでは36.5%に減少していた。加えて、勝敗の内訳においては、両者有効打突の無い引き分けが16WKCでは4回、17WKCでは3回であったのに対し、19WKCでは1回となっており、鰐競り合い時間の減少によって試合が活性化したと考えられる。総有効打突数においては、16WKCが22本、17WKCが23本、19WKCが25本であった。19WKCの有効打突のうち7本は引き技であり、鰐競り合い時間の減少による引き技の消失は起きていない。他方、不当な鰐競り合いによる反則は16WKCで2回、17WKCで0回、19WKCで3回となっており、19WKCが最も多かった。これは、鰐競り合いの厳格化によって、これまで以上に正しい鰐競り合いのあり方が審判に意識づけされたからだと考えられる。また、審判による「分かれ」の宣告は16・17WKCの平均8回から19WKCでは0回まで減少した一方で、「合議」は16・17WKCの平均3回から19WKCでは10回まで増加しており、審判基準の共通認識が今後の課題だと考えられる。

IA-4

フランス柔道連盟の柔道普及について

○瀧本 誠（駒澤大学）

【目的】フランスは柔道大国として知られる国である。2020/2021、2021/2022 のシーズンはコロナ禍の影響で柔道人口は大幅に減少。その後は徐々に回復、2024 年パリ五輪後の 2024/2025 の連盟登録者数は 573,406 人となっている。（全日本柔道連盟登録者数は、2024 年 12 万 3839 人）。フランスのマクロン大統領はスポーツを国民生活の中心に据え直すため、スポーツ実践のハードルを下げる目的で 2024 年までに新たに屋内・屋外スポーツ施設 5,000 カ所を整備することを発表。なかでも柔道を推進し、1000 クラブを新たに増設する予算組みを行い、今後もフランス国内で柔道普及が積極的に行われていくきっかけとなっている。そこで、今後のフランス柔道連盟の柔道普及策を調査し、日本の柔道普及の機会となる調査研究を行った。

【方法】：3 月 14 日～4 月 5 日フランス柔道連盟及び、地方都市の現地調査、視察を行った。

3 月 14 日：IJF 事務局長とフランス滞在中スケジュール等の打ち合わせ

3 月 18 日：フランス柔道連盟教育・普及担当者へのインタビュー

3 月 19-20 日：アミアンの柔道クラブ視察

3 月 21 日：アミアン・フランス柔道連盟エリア担当者へのインタビュー

3 月 25-27 日：オルレアン・柔道クラブ視察、指導者へのインタビュー

4 月 3 日：INSEP にて施設見学、フランス柔道連盟コーチへのインタビュー

【結果および考察】：本調査では、フランスと日本における柔道の制度、教育的役割、ビジネスモデル、指導体制などが比較検討された。フランスでは柔道が教育・福祉と連携した社会的活動として根付き、国家資格制度に基づく指導者養成や、アソシエイティブモデルによるクラブ経営が確立されている。また、学校との連携やカラーベルト・昇段制度による進捗管理により子どもの継続率が高く、柔道がビジネスとして成立する環境が整っている。クラブによっては大人の参加率も増加傾向である。これにより柔道は単なる競技を超えて、教育的・社会的価値を持つ文化的活動として市民に広く受容されている。フランス柔道連盟では積極的に柔道の普及活動を行っている。現在活動の多くは国からの補助金に頼り、継続的支援の有無に対する危機感を持っていた。今後も「柔道」の価値をさらに高め補助金に頼らない、フランス柔道連盟が独自でビジネス的にも柔道に関する活動できるようにしていくことが目標だと確認された。

一方、日本では柔道が副業的に扱われる傾向が強く、柔道指導で生計を立てることが難しい現状がある。全日本柔道連盟は国の補助金に依存しており、地方の都道府県柔道連盟では資金調達の困難さが課題となっている。また連盟登録者数の減少や旧来の指導法の批判といった要因が、柔道の持続的普及を妨げている。これらの点から、日本の柔道界には、教育・地域と柔道を結び付ける仕組みの強化と、運営・制度改革の必要性が示唆された。

【結論】：フランスの柔道運営モデルは、教育・地域・経済と密接に結びついた包括的なシステムであり、日本における柔道振興のための有効な参考事例となる。今後、日本においても柔道を教育・福祉・地域振興の一環として位置づけ、制度的支援の拡充と柔道指導者の専門職化を進める必要がある。また柔道のビジネスモデルの再構築や、IT 活用による運営の効率化も喫緊の課題である。柔道の持続的発展のためには、文化的価値の再評価と、実践・教育・政策を横断する多層的なアプローチが不可欠である。

IA-5

ドイツにおけるライフステージに応じた生涯スポーツとしての柔道の取り組み：
ドイツ柔道連盟の級段位規定及び指導者養成に関するガイドラインの分析を中心に

○マーヤ・ソリドーワル（津田塾大学）

【目的】本研究は科学研究費助成基金事業「ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方：対象者別の指導法を中心に」（若手研究 2020～2024 年）のまとめとしてドイツ柔道連盟のライフステージに応じた生涯スポーツとして柔道の取り組みを考察してみた。

【方法】ドイツ柔道連盟の級段位規定及び指導者養成に関するガイドラインに基づいて一次資料を分析し、ドイツ柔道連盟教育普及委員会の委員を対象にした聞き取り調査も行った。本研究は特に 2022 年から大きく改革されたドイツ柔道連盟の級段位規定の分析に焦点を当てながら初心者（8～4 級）、上級者（3～1 級）、有段者（1～3 段）及び高段者（4～6 段）という四段階に分けて対象者に応じた柔道指導法の観点から考察を行った。さらに、級段位規定と指導者養成の関係を考察した。

【結果および考察】ドイツ柔道連盟の級段位規定において柔道家へと成長する初心者の段階（8～4 級）、柔道コミュニティのメンバーへと成長する上級者の段階（3～1 級）、柔道家として広く活躍できる有段者の段階（1～3 段）及び柔道の専門家へと成長する高段者の段階（4～6 段）という四つの段階が定義されており、柔道の基礎作りから柔道の専門家へと成長させる過程を目標とする。級の段階において投技と固技の基礎作りが重視されているが、段位規定において投技及び固技の基本と応用に加えて、柔道理論（3 段以上）、柔道への貢献（6 段）も評価対象となる。さらに、審判や指導員を含む「資格」、競技成績を評価する「試合」、「形」、「護身術」と「柔道体操」という 5 つから選択された専門領域 1 つも評価対象となる。

【結論】ドイツ柔道連盟の級段位規定はコンピテンシーモデルに基づいて 4 段階に応じた柔道教育を強調している。3 級から専門化が始まり、役員を目指して「資格」を獲得すること、競技者として「試合」に参加すること、或いは「形」、「護身術」または「柔道体操」を習得するという専門領域へ進み、個人の目的、年齢やレベルに応じた昇級昇段ができる。また、B 指導員のレベルから競技柔道と生涯柔道に分けた指導者養成において試合は競技柔道、形、護身術と柔道体操はそれぞれ生涯柔道に位置付けられているため、級段位規定は指導者養成と連携した対象者別の指導法への重要なアプローチであると考えられる。

一般
IA-1
IA-11

IA-6

地方議会における武道に関する議論

○田中宏和（高崎経済大学）、秋山大輔（九州産業大学）

I. はじめに

わが国を取り巻く社会環境は、めまぐるしくかつ大きく変化している。少子高齢化や情報の進展、地域社会における人口の減少と経済の縮小、国際化の進展など、過去に経験したことがない多くの重大な困難にわれわれは直面している。

これらの変化に対応すべく、政治、行財政、経済構造など、社会のさまざまな分野において従来のシステムの見直し、大胆な改革として推し進められてきている。

このような社会の変化の中、20世紀以降、国際的に急速に普及・発展し、わけても1964年のオリンピック東京大会開催を契機として、創造的な文化活動の重要な柱として国民の中に広がっていったスポーツは、2度目のオリンピック東京大会の開催の影響も受け、その存在感をさらに強めようとしている。

そのような中、スポーツ庁では、スポーツの参加や観戦を目的として地域を訪れ、地域資源とスポーツが融合した観光を楽しむ「スポーツツーリズム」を推進している。そして2018年度より「武道ツーリズム」が重点テーマの一つに掲げられた。これを受け、各地方自治体がさまざまな取り組みを実施している。

そこで、本研究では「武道ツーリズム」に関してどのような議論が都道府県議会で展開されてきたのかを明らかにすることを目的とする。そのための方法として、都道府県議会の会議録を中心に議論の視点を明らかにし、その内容の分析を行うこととする。

II. 方法

各都道府県議会が公開している会議録を中心に、「武道ツーリズム」に関する議論の分析を行うこととする。

III. 武道ツーリズムに関する議論

都道府県議会における「武道ツーリズム」に関する議論は、地域振興やインバウンド観光の推進を目的として、さまざまな観点から実施されている。これは上述した国民的関心および政治的関心の高まりの表れといえよう。

そしてその主な論点としては、①武道本来の精神性が希薄化してしまうのではないかとといった伝統文化と観光振興とのバランスについて、②武道場が観光に対応していない点や言語対応などのインバウンド対応の体制整備について、③地域資源としての武道の活用方法（他の観光資源との組み合わせ）について、④指導人材も含めた体験プログラムの質の担保とその持続可能性について、⑤地方自治体、武道関係団体、観光業者との連携および人材予算等による地域間格差について、⑥指導者の海外派遣などに関して国際交流機関（JICA、在外公館、スポーツ庁など）との連携と文化外交の可能性について、があげられる。

このように各都道府県議会において、武道ツーリズムに関する議論は、「武道ツーリズム」が2018年度より重点テーマとなったばかりであることを受け、端を発したばかりの状況であった。しかしながらその内容を見てみると、地域の特色を活かした観光資源の開発や、国際交流の促進などを目的として、さまざまな視点から展開されていた。

今後は、地域の武道資源を活用した体験プログラムの充実や、受け入れ体制の整備、関連組織との連携の強化など質の向上が求められるといえ、その関心の高さからさらなる議論が展開されることが予想される。

柔道場経営に関する一考察

○中村 和裕（福山大学）

【目的】柔道は現代社会に必要とされているのか、また必要とされるならば現在の形でよいのであろうか。1979年に行われた日本武道学会第12回大会のシンポジウムで、大阪大学医療短大の金芳保之氏は、「柔道の乱取は競技化の影響で、技の技術性よりも直接勝敗を目指すものに変化している。故に一度、嘉納治五郎の原点にかえり、柔道修行者の目的と能力に応じた指導体系の構築が必要」と述べている。45年前に、過度な競技化に対する警告を促している。過去に、柔道振興への危惧は、研究者だけでなく柔道に携わる人たちが考えてきたことであろう。その一端を検討する上で着目すべきは、地域で日常的に行われている柔道場経営と考える。東京大学で初めて経営に関する博士号を取得した、岩尾俊兵氏が定義する経営とは、「価値創造（＝他者と自分を同時に幸せにすること）」という究極の目的に向かい、中間目標と手段の本質・意義・有効性を問い直し、究極の目的の実現を妨げる対立を解消して、豊かな共同体を創り上げること」と主張する¹⁾。故に経営とは、社会で誰しもが意識的・無意識的に関わりを持っているのである。この観点から柔道場経営を研究対象として検討すると、道場主催者の供給と道場生の需要がどの程度で一致し、または一致していないか（経営理念）、目的に対する運営計画と手法（練習内容・試合・各種会合等）、組織構造（営利・非営利等）、組織運営（財源の確保・道場生の観察や傾聴・指導者の確保・構成員の明確化等）、指導法等が考えられる。多種多様な柔道場経営があるが、本研究では、組織構造に着目し、各柔道場の類型化を試み、議論の端緒となる遡上を示すことを目的とする。

【方法】分類軸は、“営利・非営利”、“専業指導者・兼業指導者”で各柔道場の類型化を実施する。類型化された各マスについて、全日本柔道連盟HPにある道場ナビの道場形態や月謝について着目し、各マスの傾向を考察する。

【結果および考察】図1は柔道場の類型を示した。営利・専業指導者のマスには、“自前の道場”、“場所がり道場”が入る。このマスは基本的に月謝が高く設定されている傾向にある。特に大都市における“自前の道場”

は、1万円程度の月謝を設定している道場も散見される。また地方においても、“場所がり道場”でも、5千円に設定している道場もある。このマスは、柔道指導を本

職にしている指導者が基本で月謝も高い設定が見受けられる。これに反比例しているのが、非営利・兼業指導者のマスである。特に、“場所がり道場”では、千円や2千円が基本で、月謝を取っていない道場もある。“自前の道場”であっても、従来型の接骨院併設道場では、営利・専業指導者の“自前の道場”よりも低い月謝となっている。またこのマスの、“学校強化道場”や“学校部活道場”では、外部指導者という形で多少の報酬を得ながら兼業指導者が指導する形がある。非営利・専業指導者のマスは、強化が主体となっているため、活動にかかる経費は各所属が受け持っている。また社会貢献活動として少年柔道教室を無料で開催している事例もみられる。以上の類型から議論の俎上としての柔道経営を示した。

【結論】本研究は、柔道場経営の入り口に立ったに過ぎない。今後、各マスの具体的な事例を調査し、我が国において必要とされる柔道場経営を示すことを試みたい。

1) 岩尾俊兵「世界は経営でできている」2024年、株式会社講談社、東京、p8-9.

図1. 柔道場の類型

	営利	非営利
専業指導者	自前の道場 場所借り道場	学校強化道場 起業強化道場 公務員強化道場
兼業指導者		自前の道場 場所借り道場 学校強化道場 学校部活道場

IA-8

運動部活動地域移行に向けた剣道町道場の役割と課題

○北村尚浩（鹿屋体育大学）、林凜香（伊万里市立東陵学園）

【目的】

急速な少子化により、子どもの運動・スポーツ離れが進み、競技人口の減少が危惧されている。野村総合研究所（2023）によれば、2053 年度には中体連加盟人口が 30%以上減少する見込みであり、剣道も例外ではない。全日本剣道道場連盟によると、中学生以下の門下生数（推計）は平成元年の 119,716 人から平成 30 年度には 54,175 人へと半減した（全日本剣道道場連盟, 2019）。また、剣道のスポーツ少年団団員数は平成 14 年度の 75,735 人から令和 5 年度には 34,761 人となり、団体数も約 1,000 減少した（日本スポーツ協会, online）。こうした中、日本中学校体育連盟は 2024 年度から地域団体の大会出場を認め、町道場が中学生の運動部活動の受け皿となる事例も報告されるなど（南日本新聞, 2024）、運動部活動の地域移行は、町道場にとって再起のための好機とも捉えることができる。そこで本研究は、運動部活動地域移行（以下、地域移行）における町道場の役割と課題を明らかにし、地域移行対応のための基礎資料を得ることを目的とする。

【方法】

全国 20 府県の剣道道場連盟に加盟する道場責任者を対象に、Microsoft Forms を用いた Web アンケートまたは質問紙調査を実施した。回答数は 171 件である。調査項目は、道場の現状、運営上の課題、地域移行に関する認知度と受入れ可否、受入れ条件などで構成されている。収集したデータは自由記述回答以外の項目を数量化し、道場規模と地域移行受入れ状況による道場運営上の課題を比較した。また、因子分析（主因子法、プロマックス回転）により地域移行の受入れ条件に関する因子の抽出を行った。さらに、自由記述で得られた部活動の受入れ可否の理由に対する形態素解析を行った。分析には IBM SPSS Statistics バージョン 28、KH Coder バージョン 3.Beta.07f を用いた。

【結果および考察】

町道場運営の最大の課題は「生徒数の確保」であり、次いで「後継者の確保」「指導者の確保」が挙げられた。道場規模によって課題は異なり、小規模道場では生徒数の確保、大規模道場では施設管理・確保が課題であった。地域移行に対しては、83.6%が「知っている」と回答し認知度の高さが窺えた。地域移行に際しての受入れ可否については、約 20%が「既に受け入れている」と回答し、「受入れ検討余地あり」とする道場も 71.9%にのぼり、町道場が受け皿として機能する可能性が示唆された。地域移行の受入れ条件に対する因子分析では、「運営課題」「学校との連携」「負担感」の 3 因子が抽出され、特に「学校との連携」と「負担感」は受入れ可否によって有意な差が見られた。また形態素解析による分析の結果、道場規模により受入れに対する態度が異なることが示唆された。

【結論】

町道場が部活動の地域移行における受け皿として機能するためには、道場規模に応じた課題への対応が必要であることが示唆された。また、学校との連携体制の構築や、運営者の負担軽減に向けた国や地域からの支援が不可欠である。町道場は、剣道界や中学校部活動が抱える課題の解決に寄与する可能性を持ち、地域における剣道文化の担い手として、その役割が期待される。

伝統少林拳の継承状況—現地調査による実証研究

○川島直央（北京体育大学）

【目的】

少林拳は、中国武術の象徴的存在として、数世紀にわたり継承されてきた武術体系である。その技術は、文化的交流や政治的変遷の影響を受けながら発展し、戦闘技術のみならず、哲学的・精神的な修行体系としても確立されてきた。明代後期に徒手拳術の記録が登場し、それ以前は槍術などの武器技法が重視されていたが、戦乱の影響や民間武術家の関与により、徒手武術として発展し、独自の技術体系を築くに至った。嵩山周辺の少林拳は山南系統（登封）と山北系統（鞏義・偃師）に分かれ、それぞれ異なる伝承方法と技術的風格を持つ。本研究では、山南・山北系統の技術的特徴および伝承の流れを比較・分析し、少林拳の技術継承の普遍性と変化の要因を検証する。

【方法】

本研究では、以下の方法を用いて技術継承を分析した：

- (1)文献調査—少林拳の技術伝承に関する古文献を収集・分析し、技術体系の変遷を考察。
- (2)インタビュー調査—王宗仁氏（少林長護心意門）との対話を通じ、登封・磨溝村の技術継承と心意把の吸収過程を分析。胡正生氏（少林寺心意把研究会）との対話を通じ、心意把の技術構造を検証。
- (3)実技研究—伝統的な拳法の継承過程を分析し、山南系統と山北系統の技術的特徴を整理。少林拳の修練場にて参与観察を実施し、修行の進捗段階を記録することで技術の継承過程を明確化。

【結果および考察】

- (1)技術体系—山南系統は、伝統套路が中心となり、剛を重視した技術体系を保持し、武術村単位で継承されている。山北系統は、心意把を核とし、柔を重視した技術体系を維持し、師弟間で限定的に継承されている。
- (2)継承方法—山南系統は体系化された武術教育と武術村での伝統的継承が進んでいる。山北系統は門派内継承が主流であり、技術交流が制限される傾向にある。
- (3)都市化の影響—登封一部地域では、競技武術への転換が進み、演武要素が強調される。鞏義・偃師地域では、伝統的な口述伝承が守られているものの、技術保存の課題が生じている。

【結論】

本研究を通じて、少林拳の継承は単なる技術習得ではなく、精神的鍛錬や文化的背景と密接に結びついていることが明らかとなった。今後の武術教育においては、伝統技法の保存と現代化のバランスを考慮しながら、技術の維持と発展を図ることが重要となる。また、国際的な武術交流を通じ、技術の継承方法をさらに研究し、発展させる必要がある。

IA-10

ガッツポーズの是非を巡る「問いの構造」の再定位： 柔道における勝者と敗者の間柄についての倫理的考察

○佐藤雄哉(国士舘大学)、高橋徹(岡山大学)

【背景と目的】

「武道がガッツポーズをタブー視するのは、武道という文化が他者肯定を前提とし、自己実現を目指す『道』の文化だからである」(中村, 2007)。中村の言葉が示す通り、道の文化は時代が変わろうとも継承され続ける武道の特質であろう。しかしその一方で、非常に稀ではあるが「ガッツポーズをされたことで救われた」(佐藤, 2024)という競技者の語りもある。彼の心情は武道の文化的文脈に於いて、いかなる意味を持ち得るのだろうか。仮に武道の「ガッツポーズをタブー視する理由」を「文化的行動規範の獲得」ではなく「対戦相手への敬意」に焦点化して論じるならば、感情の抑制が目指す「道の文化(自己実現と他者肯定)」を「個人の教育的課題と他者との倫理的課題」という異なる領域から捉える必要がある。よって本研究では、ガッツポーズが生じた対戦における競技者間の倫理的関係性が、人間共同態の中でどう問われ評価されるのか、勝利時の感情表出が黙認されつつある「柔道」を対象に考察することとする。

【方法】

本研究は、和辻哲郎が著した『人間の学としての倫理学』での議論を基盤とした、以下の三つの問いを主軸として考察を展開する。

- ① 柔道における「人間共同態」、また「間柄」とは何か
- ② 柔道のガッツポーズはどのような「行為的連関」を生成するのか
- ③ 柔道のガッツポーズを考察する上で、「問う者」と「問われる者」と「問われている物」と「問われていること」とは何か

【結果および考察】

和辻哲郎の倫理学において、倫理は人間共同態の存在根底に関する。言い換えれば我々は、人間共同態において生じる行為的連関を倫理として把握するのであり、倫理とは人間共同態が成立した後に生じる人間の道にほかならない。そして和辻の述べる通り、人間が単なる人でもなく社会でもない、その両者が弁証法的に統一せられた存在だとすれば、競技者の歓喜も武道の理念も尊重されるべき要素であろう。つまり「ガッツポーズをする勝者(問う者)」と「ガッツポーズをされた敗者(問われる者)」の間柄の考察を経て、「ガッツポーズの文化的・倫理的意味(問われている物)」を人間共同態の視点から再解釈し、特定の間柄において「ガッツポーズはどのような行為的連関を生成するのか(問われていること)」と問う必要があるのである。以上の視点を踏まえると、これまでのガッツポーズに関する是非の議論が「問う者」と「問われている物」に偏重し、「問われる者」と「問われていること」の存在を見落として来たことが指摘できる。武道では「他者へのまなざし」が非常に重要な意味を持つからこそ、本研究の「問いの構造の再定位」には一定の意義が見出されよう。

日本柔道における「強さ」概念の考察:強いとはどういうことか

○竹市大祐（国士舘大学大学院）、鈴木桂治（国士舘大学）
佐藤雄哉（国士舘大学）

【目的】

東京五輪金メダリストである阿部詩選手が、2024年パリ五輪において二回戦敗退を喫した。2020年以降、国内外で無敗を誇っていた彼女は、敗戦後「自分が弱い」と語った。こうした価値観について、川谷は「強いのに負けるなんてありえない」と指摘する（川谷, 2017）。しかし、圧倒的な戦績や存在感を鑑みれば、彼女が「弱い」と評価されることには違和感を覚える。このように、現代スポーツにおいて「勝利＝強さ」とされる傾向がある一方で、それだけでは捉えきれない「強さ」が存在するのではないか。本研究では、「柔道における強さとは何か」という問いを考察をする。

【方法】

本研究は、以下の手順によって考察される。

- ① 近代的競技スポーツの視点から「強さ」概念を考察する
- ② 日本の伝統的な文化の視点から「強さ」概念を考察する

【結果および考察】

関朋昭（2010）は、スポーツを「完結性」「競争性」「規則性」「自主性」「完備情報性」の5要素で定義している。これは、スポーツが勝敗を明確に決し（完結性）、公平なルールのもと競い合い（競争性・規則性）、成果で評価される構造を示す。この構造は成果主義を助長し、勝敗や記録が「強さ」の唯一の指標とされやすい。こうした価値観は、メディアや観衆、選手自身の意識にも浸透している。阿部詩選手の連勝は「強さの象徴」とされたが、2024年パリ五輪での敗北後に「自分が弱い」と語ったことは、「強さ」が結果に過度に依存している実態を示している。これに対し、日本柔道には勝敗を超えた「強さ」の価値観が根づいている。たとえば、シドニー五輪での誤審により敗れた篠原信一選手は、審判を非難せず、敗北を自己の「弱さ」と捉えた。その姿勢には、自己を律する精神的強さが宿っていた。また、大野将平選手のように、勝利してもガッツポーズをせず礼を尽くす態度は、結果よりも振る舞いを重んじる柔道の理念を体現している。これらの姿勢は、禅仏教の「無心」や、武道の所作・精神統一・自己制御の理念と深く関わっている。柔道は単なる競技ではなく、日本文化の倫理観や美学を体現するものであり、「強さ」もまた多面的かつ深層的な構造を持つ。真に強い選手とは、勝利に驕らず、敗北に潔く、内面的成熟と礼節を備えた存在である。この視点は、結果偏重の現代スポーツ観への批判的視座を提供し、柔道の精神的価値の再評価にもつながる。

IB-1

多様な子どもを指導する柔道クラブ指導者が感じる 困難さと成長に関する調査研究

○川戸湧也（三重大学），上水研一朗（東海大学），中矢力（東海大学），
井上康生（東海大学，認定 NPO 法人 JUDOs），鈴木利一（認定 NPO 法人 JUDOs）

【目的】本研究の目的は，日本を除く諸外国の柔道クラブの指導者が感じる困難さについて記述し，説明することであった．特に本研究では，(1) 外国籍の子ども，(2) 障害のある子ども，(3) LGBTQ の子どもという 3 つの観点について，それぞれの子どもを指導する上で，柔道クラブの指導者はどのような経験をしているのか，また多様な子どもと接する経験が指導者の認識にどのような影響を与えたのかを検証することを目指した．この研究を通して，大きな変化の中にある日本社会が抱える問題を解決に導く示唆を得ることを期待する．

【方法】本研究では，日本以外の国で指導を担っている柔道クラブの指導者を対象としたアンケート調査を実施した．対象者の選定にあたり，NPO 法人 JUDOs をとおして，交流のある柔道連盟ならびに柔道クラブの指導者に調査協力を依頼した．その結果，36 名（13 ケ国）から回答を得た．アンケート調査の実施にあたり，日本語母語話者である筆頭研究者が日本語で作成した調査フォームを英訳し，さらに英語を母語とし日本語が流暢な研究協力者 2 名が修正する手続きを経て作成された．調査結果の分析について，対象者の属性に関する設問についてはクロス集計によって整理した．また自由記述については，説文ごとに対象者の回答を抽出し，単純集計によって回答を整理した．なお，本研究では回答を研究者らが日本語訳して示した．

【結果および考察】ここでは，アンケート調査の回答を端的に記す．柔道クラブが所在する国とは異なる国にルーツを持つ（外国籍の）生徒が在籍しているとの回答は 20 件（54.1%）あった．次いで，知的・身体的な障害のある生徒が在籍するとの回答は 17 件（45.9%）であった．さらに LGBTQ（セクシャルマイノリティ）の生徒が在籍するとの回答は 10 件（27.0%）であった．これらのうち，外国籍の生徒に対する指導について，8 名の指導者が「困難さはない」と回答していたが，その他の指導者は「言語」に関する課題を挙げていた．障害のある生徒に対する指導について，6 名の指導者が「指導プログラム」に関する課題を挙げていた．セクシャルマイノリティの生徒に対する指導について，9 名の指導者が「困難さはない」と回答している一方で，1 名の指導者は「本当に難しい問題である」と指摘しており，当該生徒が「何を考えているのか理解できない」と回答していた．

【まとめ】アンケート調査を通して，多様な子どもを指導する上での困難さを集約できた．今後は，この調査内容を補強し深めるために，インタビュー調査を実施したい．後続する調査を通して，どのようにして困難さを克服したのかという点を明らかにしていきたい．

剣道における人間形成に関する一考察

○松本秀夫（東海大学）、馬越千里（聖カタリナ大学・東海大学大学院博士後期）
井上涼（東海大学大学院博士後期）、天野聡・笹木春光（東海大学）

【目的】昨年、「剣道における人間形成とは何か？」について本学会において口頭発表を行った。全日本剣道連盟の剣道の理念（1975）が示す「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」について、体育哲学、スポーツ倫理学、教育学などの先行研究、ポジティブ心理学をもとにするレジヤー関与と Well-being の先行研究の知見から、剣道による幼年期から高齢期まで継続した剣道の実践経過に伴う経験が、人間的成長・人間形成・人格形成に影響を与えていることなどについて考察を行った。

そして、剣道の理念は、「剣道は、道である」であり、人間形成を目的とした活動であると解釈され、長期に渡る「剣の理法の修練」が継続される剣道実践の「道」を経て、人々は人間的成長をし、結果として Well-being の高い状態になることを考察した。しかし、剣道における人間形成においては、「人間形成」という日常語の概念規定が曖昧であるために「剣道をする」と人間形成がされる」という、教育の成果としての人間形成を捉え、それを求めている人も多々存在していると考えられる。

そこで、本研究は、人間を対象とする諸学問領域における人間形成に関する知見と、実際の剣道実践に焦点をあて、より具体的な「剣道における人間形成」に関して考察することを目的とする。

【方法】多様な学問領域の学術論文、書籍等から、人間形成、人間的成長、人格形成等に関する考察を行う。

【結果および考察】マズロー（1971）は自己の内面的な欲求を完全に実現することを「自己実現」としている。また、「至高体験」として人間の最良の状態などを示している。至高体験は、夢中で没頭している他のことを忘れていくという点などで、チクセントミハイのフロー体験（1974）と同様であるが一部異なる点も認められる。

剣道修行は長期がゆえに、そこには至高体験やフロー体験といった成功体験、また、逆のどん底体験も存在する。これは心理学では類語として「自己超越体験」「至高体験」などで示されることが多いが、ここでの「自己超越体験」は、宗教などの厳しい修行や特別な修行などによる一部の人の体験のみではなく、日常の生活を送る人々の生活において容易に起きる現象である（斎藤, 2001）。また、社会哲学者のホネット（1992）が提唱した承認は、感情と承認を結び付けた自己形成を論じている。そして、藤井（2012）は、異なる承認を生み出すことができるのも、承認によって自己が形成され、自らを問い直す契機を含むことによって自己実現に近づくことを指摘している。これらのことから、剣道実践における様々な出来事（剣の理法の修練）から至高体験や自己超越体験が経験され、高段者、高校生、大学生なども同様にその体験が可能であると解釈できる。剣道実践によるこのような体験から感情と承認による自己実現、自己形成を感じ、問い直しの繰り返しを行い、それが修行として一生継続と考えられる。従って体験による自己実現によって必ず人間形成が達成されることではない。つまり、人間形成は目的であり、至高体験、あるいは自己超越体験、どん底体験による問い直しであり、これらの体験がポジティブに働く場合もあれば、ネガティブに働く場合もあり、その都度、人間形成に影響をしていると考えられる。

【結論】本研究は、より具体的な剣道と人間形成についての考察を目的とした。その結果、やはり剣道実践における人間形成は目的であり、「剣の理法の修練」による体験結果の問い直しを繰り返す「道」であると考えられる。本研究は、JSPS 科研費 JP23K10767 の助成を受けたものです。

自己省察プログラムによる学業および競技者アイデンティティの変容

○秋山大輔（九州産業大学）、萩原悟一（九州産業大学）、武井幸二（国士舘大学）、久保優樹（国士舘大学）
岸本卓也（国士舘大学）、安藤翔（国士舘大学）、村富聖気（国士舘大学）、田中宏和（高崎経済大学）

【目的】大学生が高等教育の期間に多面的な経験を通じて自己の成長とアイデンティティの確立を図ることは、学生アスリートにとっても重要である。とりわけ競技スポーツに打ち込む学生は、競技者としての自分と学修者としての自分という二重の役割を担っており、その両面で自己を定位すること（アイデンティティ形成）が健全な発達に不可欠である（Hagiwara et al., 2024）。こうした複数の役割を統合しつつアイデンティティを発達させていく過程においては、自己省察（リフレクション）の働きが重要となる。自己省察とは、自らの経験や行動を振り返り内省するプロセスであり、学生アスリートであれば、競技活動と学業生活の両面を振り返ることで、自身の価値観や目標を再認識し、アイデンティティを成熟させていくことができる。高等教育の現場では、教員が自身の教育活動を振り返り、教育者としての役割や理念を明確にすることが、教育の質を高めるうえで不可欠であるとされてきた（Hunter, Laursen, & Seymour, 2007）。その手法の一つとして、教員が自己省察（リフレクション）を通じて、自身の理念や活動を可視化するティーチング・ポートフォリオ（TP）と呼ばれる取り組みが実践されてきた（Seldin, 2004 ; Peel, 2005 ; 吉田・栗田, 2015）。こうした振り返りを支えるツールとして開発されたのが「TP チャート」であり、これは教育活動の各要素（責任、理念、方法、努力、成果、目標など）を一覧化するワークシートである（栗田・吉田, 2021）。本研究では、TP チャートを学生アスリート向けに応用し、個々の学生アスリートが自らの競技理念（アイデンティティ）・目標・行動を体系的に整理し、学業・競技・将来のキャリアのバランスを見直す支援プログラムとして再構成し、その有用性を明らかにすることを目的とした。なお、本研究では学生アスリートを対象とし、競技・学業に対する理念やアイデンティティを明確化することを目指すため、TP チャートをアスリート・ポートフォリオ（AP）チャートと表現する。

【方法】2025 年 1 月に AP チャート作成研修を実施した。講師は TP チャート作成研修の経験を有するスポーツ科学の専門家が務めた。研修の対象者は、大学剣道部に所属する学生アスリート 140 名（男性 109 名、女性 31 名）であった。平均年齢は 20.19 歳（SD = 1.82）、競技歴は平均 13.54 年（SD = 2.25）である。研修の効果を検証するために、研修の前後で AAIS-J（萩原ほか, 2020）を実施し、学業アイデンティティおよび競技者アイデンティティの変容を検証した。

【結果】対応のある t 検定の結果、学業アイデンティティ因子は研修前の $M=4.63$ ($SD=0.78$) から研修後には $M=4.79$ ($SD=0.92$) へと有意に上昇した ($t=2.58$, $p=0.011$)。また、競技者アイデンティティ因子についても、研修前の $M=4.62$ ($SD=0.93$) から研修後には $M=4.81$ ($SD=0.98$) へと有意な向上が認められた ($t=3.46$, $p=0.001$)。以上のことから、ポートフォリオチャート研修が学生アスリートの学業および競技者アイデンティティの強化に寄与する可能性を示唆した。

【考察】本研究により、ポートフォリオチャート研修が学生アスリートの学業および競技者アイデンティティを有意に高める効果を持つ可能性が明らかとなった。特に、学業アイデンティティの向上が確認された点は、競技活動と学業の両立に困難を感じがちな学生アスリートに対する心理的支援として本研修が有効であることを示唆している。本研究の結果から、ポートフォリオチャートの作成を通じて自身の経験を体系的に振り返り、将来に向けた自己像を再構築する過程が、自己認識の深化を促したと考えられる。競技者アイデンティティの向上においても、自己理解の強化や自己肯定感の向上が影響している可能性が高く、ポートフォリオ研修が単に学業面への意識づけにとどまらず、競技者としての在り方を再確認する機会となったことが示唆された。本研究の特長は、学生アスリートのアイデンティティ（dual career identity）を可視化し、バランスよく醸成する点である。欧州を中心とした先行研究においても、dual career 支援においてはアイデンティティの明確化と自己省察が重要であるとされており（Stambulova et al., 2021）、本研究の結果はその理論的枠組みにおいても整合性を示したといえる。

戦前の学校武道法制に関する新事実

——1919～31 年の高等学校・中等学校における体操科の剣道・柔道——

○坂上康博（元一橋大学）

【目的と方法】

戦前の学校武道法制に関する 2 つの新事実に着目し、それらの確認と若干の考察を通して、近代武道史を再考する手がかりを得ることが本報告の目的である。

【結果および考察】

1) 学校法令上の教材名称「剣道」「柔道」の使用

1919 年 3 月 29 日公布（4 月 1 日施行）の「高等学校規程」（文部省令第 8 号）の第 18 条に「剣道及柔道ヲ加フルコトヲ得」とある。これが学校法令上初となる「剣道」「柔道」の使用、つまり「撃剣」「柔術」からの変更である。同史料は、渡辺融「第一高等（中）学校の体操教員について」（『体育史研究』第 3 号 1986 年, p. 18）ですでに引用されている。

これまで学校法令上初の「剣道」「柔道」の使用は、1926 年 4 月 22 日改正の師範学校規程であり、同年 5 月 27 日改正の学校体操教授要目および中学校令施行規則がそれにつづくとされていたが、実際にはそれよりも 7 年以上前になされていたことになる。文部省による名称変更の方針は、すでに 1919 年 3 月時点で確定しており、1926 年 4 月の名称変更は、この方針の具体化とみるべきではないか。したがってまた、名称変更の直接的な要因も、1919 年 9 月の文部大臣宛建議書や 1924～25 年の学校武道の拡充を求める要請運動といった武徳会の取り組み（坂上 1990）ではなく、それ以前の歴史的な事実の中に求めるべきであろう。

2) 中等学校における武道の準必修化、必修化

1930 年 4 月 8 日交付・施行、「工業学校規程」「農業学校規程」「商業学校規程」「商船学校規程」「水産学校規程」（文部省令第 5～9 号）の第 8 条等が「体操（武道ヲ含ム）」、第 5 条が体操科の教授時間数は制限規定に「依ラサルコトヲ得」と改正される。この規程改正の趣旨について、同年 5 月 7 日公布の文部省訓令第 10 号は、「剣道、柔道等ノ武道ハ質実剛健ナル国民精神ヲ涵養シ心身ヲ錬磨スルニ極メテ適切ニシテ従来ノ例ニ徴スルモ既ニ武道ヲ正課トスルモノ少カラズ其ノ設備等ニ於テモ実施シ易キヲ以テ今回之ヲ体操中ニ含ムコトヲ明示シ成ルベク必須科目トシテ奨励セントス」と説明している。同史料は、古川修「武道教員の資格取得状況—埼玉県にみる武徳会称号（教士、錬士）の取得状況との比較」（体育史学会第 7 回大会発表、2018 年 5 月）への質問を古川氏自身がその後追究し、発見したものである。

翌 1931 年 1 月 10 日公布（4 月 1 日施行）、「師範学校規程」の第 24 条および「中学校令施行規則」第 17 条によって、剣道・柔道が必修化されるが、実業学校においてはそれに先駆けて、剣道・柔道の準必修化がなされていたのである。

『明治以降教育制度発達史』第 7 巻は、中学校令施行規則の改正の直接的な要因を 1929 年 6 月 21 日の文政審議会の答申としているが、上記の実業学校規程の改正も同様であろう。昭和天覧武道大会の直後、1929 年 5 月 29 日に文政審議会諮問 11 号特別委員会は、武徳会副会長の田所善治らが提出した中等学校の剣道・柔道の必修化を求める要望書を「希望事項」として決議し（坂上 1990, p. 50、1998, pp. 104-105）、これが答申に追加されている。

他方、高等学校では武道は必修化されず、たとえば武道教師（1911 年以降は師範）が教員として採用されていた東京商科大学でも、課外のみでの実施にとどまった（坂上 2025）。

IB-5

日本文化としての柔道 ーオリンピックの柔道採用をめぐる嘉納治五郎の思想ー

○永木耕介（法政大学）、小澤雄二（鹿屋体育大学）、小田佳子（法政大学）

【目的】

講道館柔道の創始者である嘉納治五郎（1860－1938、以下「嘉納」）は、1909年に国際オリンピック委員に就き、1940年に開催予定であった第12回オリンピック東京大会の招致に尽力した（ただし当大会は嘉納の没後、戦争の影響で幻に終わった）。嘉納亡き戦後、「嘉納は柔道をオリンピックに入れることを望んでいた」という論調が1950年頃から形成され、結果的に柔道は1964年の第18回オリンピック東京大会で採用された。しかし発表者は、新たに発掘した資料を検討した結果、「嘉納は柔道をオリンピックに入れる意思は無かった」という点を明らかにした。その詳細は「オリンピックの柔道採用をめぐる嘉納治五郎の思想」と題して『武道学研究』に掲載した（2024年、DOI:10.11214/budo.2408）。本発表ではその研究成果を踏まえ、あらためて「嘉納が柔道に求めていたものは何か」について言及してみたい。

【方法】

1. 「嘉納は柔道をオリンピックに入れる意思は無かった」という点について、新たに発掘した以下の資料3点の検討結果を提示する。

資料①：嘉納治五郎「昭和三年を送るに臨んで我が同志に告ぐ」、講道館文化会、『作興』7（12）、pp. 2-4、（1928年12月）

資料②：東京高等師範学校・柔道部出身者へのインタビューの録音データ（嘉納の発言は1931年頃？）

資料③：雑誌『雄弁』（大日本雄弁会講談社発行）の嘉納へのインタビュー記事（1937年2月号）

2. これらの検討結果を踏まえて「嘉納が柔道に求めていたものは何か」に言及する。

【結果・考察】

戦後長らく、「嘉納は柔道をオリンピックに入れることを望んでいた」と信じられてきたが、発表者の研究によって「柔道をオリンピックに入れる意思は無かった」ことが確証された。

「意思は無かった」というその根本的な理由は、まず、「目的－手段」論において「柔道とスポーツは異なる」という点に立脚していた。即ち、柔道の目的は「人生・生活すべてに応用可能な原理（精力善用）」の体得にあり、「競技はそのための一手段にしか過ぎない」という信念によっていたため、単純な優勝劣敗主義（チャンピオンシップ）に傾くオリンピックへの一元化を嫌ったのである。また、「国民の体育」を重視した嘉納は、日本人に適した身体運動文化としての価値を柔道に求めた。そして、「柔よく剛を制す」「小よく大を制す」という日本の特徴を表象する柔道は、国際関係においても欧米列強に伍するためのカウンターカルチャーであったがゆえに、欧米発スポーツとは異次元に置くべきものであった。

嘉納の思想には、異なる身体運動文化に対する相互理解が身体運動文化のグローバルな展には重要だという主張が看取できる。今日でも、欧米発スポーツとの対比の中で世界レベルで競技が推進される“武道”にあっては、その思想は参考になるのではないだろうか。

ライフヒストリーからみる戦後武道史： 島根県の講武館関係者への聞き取り調査

中嶋哲也（茨城大学）

【目的】本研究は戦後武道史の研究課題を立ち上げるための予備調査を目的としている。今年は戦後 80 年（昭和 100 年でもある）であり、明治維新（1868 年）から第 2 次世界大戦終結（1945 年）までの約 78 年間を超える時間が経っているが、本研究では武道の戦後史も正面から検討すべきだと考える。戦後武道はGHQ 占領を経てスポーツ化に向かったとする歴史観で説明されがちである（井上，2004）。しかし、古武道各流や合気道など必ずしも競技を志向しない流派・種目にも目を向けた時、スポーツ化という視点のみで戦後武道史を通観するのは不十分である。また、政府や武道関係団体の動向を扱うに留まり（坂上，2015）、武道を実践する人々の戦後史については着手されていない。

【方法】本研究では、聞き取り調査を行った。戦後の古武道各流の場合、公共の図書館で研究に資する文献資料を入手することは困難である。また、終戦直後など文献資料の入手が難しい時期に活動していた人々は存命していたとしても 80 歳以上であり、彼らの語りを記録することは急務である。本研究では令和 7（2025）年 4 月 19-20 日の 2 日間、島根県の講武館関係者へ聞き取りを行った。対象者は A 氏 83 歳、S 氏 87 歳、K 氏 97 歳の男性である。講武館は昭和 6（1931）年に直信流 15 代松下弘が設立した道場で、直信流 13 代松下栄道が明治 34（1901）年に旧藩武術をまとめた講武会という組織を前身に持つ。同館では講道館柔道が指導されたが、四～五段位で見どころのある稽古者には直信流柔道も教授された。今回聞き取りした中では S 氏が講武館で 16 代松下敬から直信流の指導を受けた人物である。

【結果および考察】S 氏は昭和 12（1937）年 9 月 13 日生。柔道は戦後学校柔道が解禁された昭和 25（1950）年に部活動で始めた。ほぼ同時に講武館にも入門したという。昭和 30（1955）年 11 月 13 日に松江神社奉納武道大会で初めて直信流の居相の演武を見学した。S 氏は昭和 42（1967）年に敬から居相を数本学び演武したという。S 氏によると昭和 45（1970）年に 15 代松下弘死後は子息の敬が伝承にあたった。昭和 57（1982）年の島根国体開催に向けて道路拡張工事がなされた際に講武館は移転を余儀なくされ、さらにしばらくして敬が体調を崩したことで直信流の稽古は一時、休止することになる。平成に入り、直信流の消滅を危惧した S 氏及び故高尾邦雄らが敬を擁立し直信流研究会を発足した。しかし、同研究会発足から 2 年ほどで敬が死去し、相伝は不完全なカタチで終わった。敬の死後、S 氏が稽古の覚書及び記憶を頼りに 50 本ほど技を復元して現在に至るという。直信流は総合武術だが、組討には合戦を想定した実戦的な投げ技が多い。今は安全に配慮した稽古をしているが、柔道の四～五段位でないと受身の観点から指導が難しいという。

K 氏は昭和 3（1928）年生。昭和 16（1941）年に松江商業中で柔道を始めた。戦時下であったが当身技の稽古はしていない。終戦直後は武道禁止だったが、昭和 21～22 年頃、運動場で拳闘対柔道を見たことがあるという。昭和 23（1948）年頃に柔道は解禁され、講武館で稽古を再開したが肩を痛めて翌年柔道を辞めたという。A 氏は昭和 16（1941）年生。昭和 24（1949）年頃に柔道は解禁され、昭和 26（1951）年に講武館に入門したという。ある日、進駐軍の軍人が柔道を習いに来たので先生は受身を教えたが、「それじゃなくて柔道を教えろ」と言ってきたので絞技で落としたのを見たという。それ以来、その軍人は来なかったという。

【結論】占領期及びその直後は治安があまり良くなく娯楽も少ない時代であったが、柔道は護身術や娯楽としての意味を持っていた。今後は聞き取りの事実関係を再検証し、この時期、柔道が地域社会においてどのような役割を果たしていたのかを検討したい。

デジタルアーカイブを活用した武道史研究の可能性と展望： 「邦字新聞デジタル・コレクション」からみる武道史再考

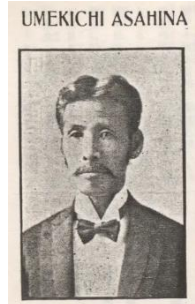
○矢野裕介（愛知淑徳大学）

1. はじめに

デジタルアーカイブは、「社会が持つ知や、文化的・歴史的な資源等の記録を未来へ伝える役割を果たす」とともに、その利活用においては、これまで見過ごされてきた歴史的事実を知ることや、「各所に散在していた情報資源の写しがデジタル空間上にアーカイブされることで、様々な情報資源の関連付けが容易」になることなどから（『デジタルアーカイブ活動』のためのガイドライン、2023）、近年では、これを活用した史料収集や研究も可能になってきている。このような趨勢を踏まえ、本研究では世界中の数あるデジタルアーカイブの中でも、スタンフォード大学フーヴァー研究所が公開する「邦字新聞デジタル・コレクション」に着目し、その活用による武道史研究の可能性と展望について検討していくことを目的としている。従前の武道史研究を振り返ってみても、邦字新聞を本格的に用いた研究は未開の分野であるといえるからである。

2. 「邦字新聞デジタル・コレクション」にみる武道史関連記事

「海外各地に於て日本人の群居するところ、必ずそこに新聞がある」（『五十年間のハワイ回顧』、1953）といわれるように、戦前日本人の主な移民先となったハワイ、アメリカ、ブラジル、朝鮮、満州などの地域では、日系コミュニティの発展とともに多くの邦字新聞が発行されている。「邦字新聞デジタル・コレクション」では、当該地域を中心に、1882年から2023年までに発行された230紙を超える邦字新聞がデジタル化され閲覧可能となっているが、例えば1945年以前に「武道」などのキーワードを含む記事を抽出してみると、その数は決して少なくない（表参照）。そればかりか、これまでの武道史研究の再考を迫る内容を含む記事も散見される。その一部を示せば、「ハワイに於ける剣道仕合の元祖」（『實業之布哇』、1935. 2. 1）は、「明治十八年二月九日官約第一回移民船東京丸に塔じて来布した」（『布哇日本人銘鑑』、1927）朝比奈梅吉（図参照）らが「[同月11日に一引用者注]角力と踊りと撃剣とを、カラカウア王の御覽に供した」（前掲「實業之布哇」）ことに求められるが、この朝比奈こそが「布哇に剣道の普及發達を爲したる人」（『ハワイ報知』、1933. 4. 16）であること、日本統治下朝鮮における剣道普及の契機は、従来の指摘（＝1928年に設置された大日本武徳会朝鮮地方本部による剣道普及事業）よりも早い段階、すなわち、1920年に「剣道柔道弓術の精鋭六百有餘名」（『朝鮮新聞』、1920. 10. 31）が出場した全鮮武道大会（朝鮮新聞社主催）の成功を機に設立された朝鮮武道協会（総裁美濃部俊吉）が、「在住民ノ士氣ヲ作與セシメ武士道ノ眞髓ヲ發舒セシムル」ことを目的として「朝鮮全道ニ於ケル武道〔＝柔道、剣道（軍刀術、銃剣術を含む）、弓道一引用者注〕ヲ獎勵」していることに認められる（『朝鮮新聞』、1921. 1. 5）、などがある。なお、1930年代以降のアメリカでは、「女子剣士六十名の優勝旗爭奪戦」（『日米新聞』、1934. 7. 2）などの見出しにみられるように、二世女子による剣道が積極的に展開されるようになるが、そうした女子剣道の隆盛の中、「野村春子嬢は初段の免許を受け…中略…女子にして初段となつたは同嬢を以て嚆矢とする」（『日米新聞』、1933. 5. 3）といった、女子の昇段について言及する記事が確認されることにも注目しておきたい。



HawaiiShinpo 編『在留知名同胞人物紹介』
HawaiiShinpo, 1913, p. 70 より転載。

3. おわりに

「邦字新聞デジタル・コレクション」に収められている各紙の分析を通して、ハワイ、アメリカ、ブラジル、朝鮮、満州などの日系コミュニティにおける武道史の再考を試みるのが可能になるのみならず、それぞれの地域における武道の受容と展開について、比較史的な視点からも明らかにしていくことができよう。

表. キーワード検索からみる新聞名と記事数（1945年以前）*

キーワード	武道	柔道	剣道	弓道	相撲	薙刀	銃剣道
新聞名 (記事数)	満洲日日新聞(1,451)	羅府新報(2,820)	日布時事(1,715)	満洲日日新聞(401)	日布時事(5,005)	羅府新報(97)	満洲日日新聞(19)
	日布時事(768)	日布時事(2,814)	ハワイ報知(1,466)	日布時事(400)	ハワイ報知(4,904)	日布時事(76)	伯刺西爾時報(5)
	ハワイ報知(506)	ハワイ報知(2,556)	羅府新報(1,407)	羅府新報(321)	日米新聞(3,294)	日米新聞(64)	羅府新報(4)
	羅府新報(333)	日米新聞(1,944)	日米新聞(1,052)	ハワイ報知(257)	羅府新報(2,821)	満洲日日新聞(59)	ハワイ報知(3)
	日米新聞(317)	加州毎日新聞(1,276)	満洲日日新聞(768)	新嘉坡日報(157)	新世界(2,167)	ハワイ報知(58)	日布時事(3)
	伯刺西爾時報(267)	新世界(1,128)	新世界朝日新聞(648)	加州毎日新聞(121)	満洲日日新聞(1,605)	加州毎日新聞(53)	満洲日報(2)
	朝鮮新聞(221)	満洲日日新聞(1,119)	加州毎日新聞(480)	南洋日日新聞(90)	朝鮮新聞(1,395)	朝鮮新聞(43)	秘露報知(2)
	満洲日報(186)	新世界朝日新聞(1,094)	伯刺西爾時報(347)	日米新聞(86)	新世界朝日新聞(1,308)	大北日報(35)	武漢大陸新報(1)
	加州毎日新聞(161)	馬哇新聞(868)	新世界(338)	新世界朝日新聞(72)	馬哇新聞(842)	新世界(26)	日米新聞(1)
	馬哇新聞(153)	満洲日報(410)	満洲日報(221)	満洲日報(57)	加州毎日新聞(759)	伯刺西爾時報(25)	加州毎日新聞(1)

※「邦字新聞デジタル・コレクション」(<https://hojishinbun.hoover.org/?l=ja>)より作成（2025年5月25日閲覧）。ここでは上位10紙を示す。

リバイバル剣道実践者のライフスタイルに関する研究 -高齢・高段位者に着目して-

○井上 涼（東海大学博士課程後期）天野 聡・笹木 春光・松本 秀夫（東海大学）

【目的】

近年、剣道愛好者の中には、剣道活動を中断して期間を空けて活動を再開する「リバイバル剣道」（以下、リバ剣とする）を実施するリバ剣実践者が存在し、自身のライフスタイルを形成しながら剣道活動を行っている。井上（2024）らは、リバ剣後、家庭や職場とは別のコミュニティが発生し、剣道活動や交流から生活の幸福感や剣道活動の満足感が生み出されている可能性を示唆している。

しかし、リバ剣後に子供の自立・定年退職・昇段・加齢の影響などを受けた高齢、高段位のリバ剣実践者を対象とした研究は見当たらない。そこで本研究は、時間経過に伴う子供の自立、加齢、定年退職、余暇、仕事、生活、技能向上、高段位取得などの変化を経験した実践者のライフスタイルに関して、質的に分析することを目的とする。

【方法】

調査対象は、剣道活動を一度中断、期間を空けて再開し剣道六段以上を取得した人、または60代以降のリバ剣実践者を対象として、性別・年代・中断年数・段位・婚姻・子供の有無によって理論的サンプリングを意識し機縁法により選出した。対象者には、半構造化面接（30分～1時間程度）を行い、リバ剣前後のライフストーリーを交えながら剣道活動と生活・仕事・剣道活動などの場面における発話を求めた。面接はICレコーダーで録音し、テキスト化した。分析は、KJ法によるカテゴリー化及び文脈からの考察を行った。

【結果および考察】

KJ法による分析からカテゴリー化を行った。カテゴリーは「余暇」「交流」「技能」の3カテゴリーであった。また、リバ剣実践者は「余暇志向」と「非余暇志向」、「交流志向」と「非交流志向」、「技能向上志向」と「非技能向上志向」の3軸で解釈することができると考えられる。関ら（2023）は、年齢や環境に合わせて複数の側面から新たな特性の発見や価値観の変革が可能であることを指摘し、リバ剣後も稽古継続において、年代、生活、仕事などの変化から価値観も変化することが考えられる。

特徴的な発話としては、「50代過ぎてどこまで跳べるかって、ちょっとでも稽古しないと跳べなくなるっていうのがあって、どうせ剣道やるなら楽しくやりたい」など「非技術志向」が垣間みられる。これは、大石ら（2004）が示唆した、高齢者の剣道継続要因の「年齢適応特性」「リフレッシュ」等に該当していると考えられる。また、リバ剣実践者には、加齢という阻害要因に加えて、ブランクという要因もあり、20代30代の剣士に比べて昇段や技能志向ではなく、「交流志向」が高いことが示唆された。同様に、「恩返し」や「子供への還元」といった他者への働きかけや思いやりが見受けられ、中断前や再開後に受けた指導が活動にも影響し次第に指導者としての意識を持つことが考えられる。このような、次世代への継承や指導が道場の在り方や剣道における道場文化を形成する一因であることが示唆された。

【結論】

リバ剣実践者は「余暇」「交流」「技能」の3カテゴリーで捉えることが可能であり、高齢・高段位者では「交流志向」が高く、指導者として他者へ働きかけを行い、道場コミュニティを支えていることが明らかとなった。

今後の課題として、実際の休止・再開と道場文化について探求するため、道場コミュニティの歴史及び道場文化について調査を進めていく必要性が考えられる。

在日コリアンによる剣道活動の事例から問いかける
「日本文化」と「日本武道」「文化」と「アイデンティティ」の理解

○金 希妍／橋間勝希（東京大学大学院）

【目的】従来、海外における日本剣道の普及に関する研究は数多く研究が進んでおり、そのうち、帝国日本による旧植民地での普及活動についての研究は主に日韓の研究者を中心に行われてきた。しかし、在日コリアンを対象にした武道研究は、まだあまり知られていない。多くの在日コリアンの剣道経験者は在日コリアンとして、というよりかは一個人として剣道の稽古を続ける人が多いが、その一部は在日コリアンの民族団体である「民団」を経由に、在日本大韓剣道会の一員として韓国の「全国体祭（通称、韓国国体）」に出場する事例がここ 48 年間知られた。筆者は彼らの活動経緯を知るために、本研究に着目した。本研究を通じて、筆者は在日コリアンとしてのアイデンティティを持つ彼らが、日本の武道（剣道）を習い始めた経緯や剣道を習った経験が彼らの人生においてどのような影響をもたらしたのかを個々人の事例から分析し、そこから改めて「日本の武道としての剣道」を問いかけたい。

【方法】 筆者は 2014 年から 2023 年まで自ら一員として参加してきた韓国の「全国体祭」での経験から、共に出場した在日コリアン選手を対象にインタビュー調査を行った（合計 5 件）。インタビュー実施期間は 2018 年から 2024 年。在日本韓国団体である「民団」でこれまで蓄積してきた記録や文献から、これらの個々人の事例を照らし合わせ、戦後における在日コリアンによる剣道活動を在日コリアンの歴史の流れから考察し、時代ごとによる彼ら自身の経験をライフヒストリーとしてまとめた。

【結果および考察】 インタビュー調査の結果、従来の「外国人は日本の文化に興味を持ち、柔道や剣道と言った日本武道を習い始めるケースが極めて多い」とされてきた研究に対し、今回の調査では、対象者は、自ら剣道をやりたいという強い意志のもと、幼少年期から剣道を習い始めたという。それは、「剣道が日本の文化であるから」ではなく、日本で生まれ育った彼らからしてみれば、剣道というものは、ごく自然な、身の回りにあったものであり「日本社会について理解する手掛かりや日本文化を知ることによる自己開発的な目的で始めた」とは言い難い。しかし、どの対象者も在日コリアンとしてのアイデンティティが極めて強いと言える家庭で育ったことから、親戚から反対される経験や「本名」で大会に出場することに対する厳しい体験を経てきたことは、彼らの在日コリアンとしてのアイデンティティを自覚させると同時に、剣道の稽古を続けることに対するアイデンティティの葛藤にも繋がったとも言える。

【結論】 現在、日本国内に在住している在日コリアンはすでに 4 世～5 世に至るまで、幅広い世代が日本に定着している状況である。また、日本に永住または帰化する外国人の数は年々増えており、日本も多文化社会を迎えるにつれ、我々はもう一度日本文化と日本武道の意義について問いかけ、若い世代に伝承する方法を工夫する必要がある。

活動後増強が柔道選手の握力に与える影響

○佐々木健志（順天堂大学大学院），竹澤稔裕（順天堂大学），伊藤潔（九州共立大学），
廣瀬伸良（順天堂大学），

【目的】柔道における攻撃防御は、柔道衣を介して互いに組み合うことで競技が展開されるため、柔道衣を「握る」動作は必要不可欠である。先行研究においては、競技レベルが高い選手ほど最大握力が大きく、その持久力も優れているという報告があり、握力は柔道のパフォーマンスに大きな影響を与える要素の一つであると考えられる。競技者は自身の握力を最大もしくは有効に発揮する為に多様な事前運動を実施しているが、その効果や根拠は明らかとなっていないものが多い。事前運動によって筋力発揮を向上させる現象のひとつに活動後増強があり、活動後増強は最大筋力や筋持久力を向上させることが知られている。活動後増強の効果は事前運動の様式が影響するとされており、その効果や運動様式についての報告は散見される。しかしながら、握力に関する活動後増強についての知見は少なく、活動後増強を誘発させる為の適切な事前運動についても明らかとなっていない。本研究では、事前運動の各条件下での活動後増強が柔道選手の握力に与える影響を検討することを目的とする。

【方法】日常的に柔道のトレーニングを行う男子大学生5名を対象（今後、被験者を20名まで増やす）とし、最大握力および筋力発揮率（RFD: rate of force development）の測定を行った。各条件の測定には3日以上の間隔を設けた。まずW-upとして握りの確認を行い、3分後にPre testを行った。その後5分間の休息を設けて各条件（CON条件、30%1RM条件、60%1RM条件、90%1RM条件）の負荷での掌握動作3回2セットを事前運動として実施し、その8分後にPost testを行った。得られた測定結果から平均値および変化率を求め、比較検討した。

【結果および考察】図1に各条件における最大握力の平均値を示す。事前運動の各条件介入（CON条件、30%1RM条件、60%1RM条件、90%1RM条件）前後の変化率は、CON条件では利き手が $0.07 \pm 0.69\%$ 、非利き手が $1.22 \pm 3.49\%$ 、30%条件では利き手が $2.18 \pm 4.88\%$ 、非利き手が $1.55 \pm 3.64\%$ 、60%条件では利き手が $3.35 \pm 4.51\%$ 、非利き手が $5.52 \pm 5.71\%$ 、90%条件では利き手が $1.03 \pm 9.14\%$ 、非利き手が $1.50 \pm 6.71\%$ であった（表1）。結果として60%1RM条件が最も高い変化率を示し、最大握力の増加と関連性が高い可能性が示唆された（n数の関係上、統計的処理は不可）。

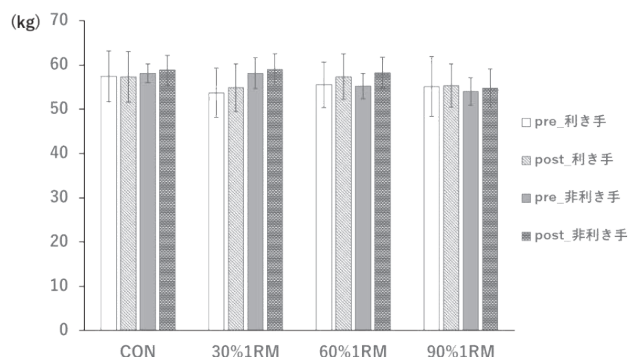


図1. 各条件の最大握力値の平均値

表1. 各条件の平均変化率(%±SD)

	利き手	非利き手
CON	0.07 ± 0.69	1.22 ± 3.49
30%1RM	2.18 ± 4.88	1.55 ± 3.64
60%1RM	3.35 ± 4.51	5.52 ± 5.71
90%1RM	1.03 ± 9.14	1.50 ± 6.71

一流競技者の背負投：上肢の運動パターン分析

○石井孝法（NPO スポーツコーチングアカデミア）、越田専太郎（SBC 東京医療大学）

【目的】本研究は、柔道背負投における取の上肢運動に着目し、一流競技者と学生競技者のキネマティクス特性を多変量的に比較分析することで、熟練技術の動作習得に寄与する技術的要因を抽出することを目的とした。

【方法】対象は、世界柔道選手権大会メダリスト 3 名（一流群:24.3±2.1 歳,身長 1.66±0.05m,体重 72.6±6.9kg）と学生競技者 16 名（学生群:19.7±1.7 歳,身長 1.66±0.04m,体重 69.1±6.5kg）とした。背負投の約束練習において、三次元動作分析装置（VICON）で身体分析点の三次元座標値を収集した。分析区間は、取が軸足を離地させた時点から軸足を中心に回転して両足が接地した時点までとした。取の体幹上部座標系を定義し、グローバル座標系に対する体幹上部座標系の角速度、体幹上部座標系における右上腕ベクトル（肩関節-肘関節）および左上腕ベクトルの角速度を算出した。分析区間で 100%に時間正規化後、滑らかさ（スペクトルアーク長、対数無次元ジャーク、RMS ジャーク）、複雑性（サンプルエントロピー）、同期性（クロス相関）、主要周波数等の指標を算出した。統計分析には Mann-Whitney U 検定（効果量 r 併記）、主成分分析（PCA）、k-means クラスタリングを順次適用した。

【結果】一流群は学生群と比べ、運動パターンに特有の戦略的特徴を示した。動作リズムの完全標準化：右上腕の主周波数は、一流群で完全に 1.953Hz に統一されており（標準偏差=0）、学生群（中央値 2.81; $p=0.181$, $|r|=0.31$ ）の大きなばらつきと対照的であった。

滑らかさと力学最適化：右上腕の対数無次元ジャークにおいて、一流群（中央値-10.61）が学生群（中央値-9.57）より有意に低い値を示した（ $p=0.016$, $|r|=0.55$ ）。右上腕の RMS ジャークも一流群（中央値 3051.5）が学生群（中央値 2258.9）より高い傾向（ $p=0.065$, $|r|=0.42$ ）を示した。このこれらの指標から一流群が従来重視される動作の「滑らかさ」とは異なる運動特性を有していることが示唆された。

協調制御の強化：体幹のスペクトルアーク長では、一流群（中央値-3.77）が学生群（中央値-3.40）より規則的なパターンを示し（ $p=0.105$, $|r|=0.37$ ）、身体各部位間の高度な同期性が確認された。

統合戦略の抽出：主成分分析では、第 1 主成分（46.5%寄与）において一流群の 3 名全員が同一領域に集約された一方、学生群は広範囲に分散しており、一流群が共通の運動戦略を有していることが明確に示された。さらに、一流競技者の個別分析では、右上腕の動作リズムは 3 名とも完全に統一されている一方で、滑らかさや効率性に関する他の指標では競技者間に違いがみられた。これは、一流競技者が基本原則は共有しつつも、それぞれの身体特性に応じた個別の工夫が影響していると考えられる。

【結論】一流競技者の背負投は、動作リズムの完全な統一を中心とした独特な運動戦略によって特徴づけられる。一流競技者は、従来重視される動作の「滑らかさ」よりも、実際の競技での効果を最大化するための運動パターンを選択していることが明らかになった。具体的には、①すべての競技者が同一リズムを採用することで動作実行時の迷い（不安定さ）を排除、②技の威力と正確性を両立する身体の使い方、③体幹と上肢の高度な連携、④各競技者の身体的特徴に合わせた個別の調整を同時に実現している。本研究は、柔道指導において「複雑な動作をそのまま真似させる」方法から、「基本原則を理解した上で個人に適した技術を身につけさせる」新しい指導法への転換が有効であることを支持する。

投の形動作を対象とした骨格検出精度の評価

○横山喬之（摂南大学）、坂本道人（福岡大学）、
大橋秀輝（摂南大学）、久保田誠也（摂南大学）

【目的】

スポーツ技術の客観的評価を可能にする手段として骨格推定 AI 技術が注目されている。これまで我々研究チームでは柔道の形種目の中でも、「投の形」の「浮落」を対象として OpenPose を活用した動作評価の研究を行っている。OpenPose を活用した背景には、骨格推定 AI 技術として代表的な分析方法であったことやオープンソースとして公開され研究で活用するのに適していたことなどが挙げられるが、同様な骨格推定 AI 技術は OpenPose 以外にも存在する。そこで本研究では、骨格推定 AI 技術の中でも OpenPose と MediaPipe を用い「投の形」の分析を行い、それぞれの分析による動作の検出精度を比較・検証することを目的とする。

【方法】

本研究の実験では、投の形の全施技を対象とし分析・検証の対象とした。対象とした動画データは、世界柔道形選手権大会・投の形で優勝経験がある競技者 1 組のデータとした。分析の手順としては、まず取と受の領域を抽出する際には、物体検出アルゴリズムである YOLO (You Only Look Once) を用いた。また分析対象区間のフレームでの取と受の各領域の抽出には、Ravi et al. (2024) によって開発された画像や動画像に対して指定した物体の領域のセグメンテーションを行う手法である SAM2 (Segmentation Anything Model 2) を用いた。その後、抽出された取と受のそれぞれの領域に対して骨格推定 AI 技術を用いキーポイントの検出を行った。本研究では OpenPose (カーネギーメロン大学) と Mediapipe (Google 社) の骨格推定 AI 技術をキーポイントを検出として用い、それぞれの技術における動作の検出精度を比較し検証した。OpenPose と MediaPipe それぞれの特徴として、OpenPose は高精度かつ細部まで検出、複数人同時検出に強く学術研究や映像分析に多用されているツールである。一方、MediaPipe は軽量・高速・クロスプラットフォーム対応し、モバイルアプリやウェブアプリへの組み込みが容易なことや導入が簡単で開発しやすいという特徴を持つツールである。

【結果および考察】

OpenPose における取と受の検出率を見ると、取の方が検出率が高く受はやや低いことがわかった。この要因としては、投の動作の際に投げられる受の動きが早く、素早い動作に対してキーポイントの検出が正確に行われないことが推察される。また取と受の動作が重なる部分に関しては、検出が難しくなるため、そのような箇所があることも検出率に影響していると推察される。部位ごとの結果では、鼻、首、肩など中央部位の検出率が高く、信頼度も比較的安定しているが、一方で手首や足首などの末端部位になるにつれて、検出率や信頼度が下がる傾向であった。末端部位の検出率が低いのは、OpenPose の仕様上、関節の重なりや遮蔽、速い動きにより検出が難しくなるということが要因として考えられる。

【結論】

OpenPose は投の形の動作分析において十分な基礎性能を持っており、定量的な動作評価に有用である。ただし、受の動作に関して検出率が下がる傾向にあるため、検出精度を高める工夫や映像品質の改善が必要である。また末端部位は、関節が重なることや速い動きにより検出率が低くなるので、今後の研究の中で、学習用データを収集し、より多くのデータを学習させ検出精度を高めることやカメラアングルを調整すること、隠れてしまう部位を補完するための処理を行うことなどで改善していくことが必要である。

IC-4

柔道初級者と経験者における頭部衝撃曝露の探索的検討：投げられる機会の違いに着目して

○越田専太郎（SBC 東京医療大学）、石井孝法（SBC 東京医療大学）、久保田浩史（東京学芸大学）、長谷川龍成（SBC 東京医療大学）、中禮宏（東京科学大学）

【目的】柔道においては、特に初級者における頭部外傷リスクの高さが指摘されている。我々の先行研究では、大学から柔道を始めた初級者において、相手の投技に起因する 10g 以上の頭部加速度を伴う衝撃の発生頻度が、経験者と比較して有意に高いことを報告した。この知見は、受身技術の未熟さが衝撃の増大に関与するという従来の指摘を部分的に支持するものである。一方で、初級者は稽古中に投げられる機会自体が多い可能性があり、相手の投技に起因する頭部衝撃頻度の高さは、受身動作の技術的未熟さに加え、曝露機会の多さに起因する可能性も否定できない。そこで本研究では、「投げられる機会」の頻度に着目し、柔道初級者と経験者における頭部衝撃曝露のリスク構造について探索的に検討することを目的とした。

【方法】本研究の対象は、大学柔道部に所属し、大学入学後に柔道を開始した初級者 8 名（男性 7 名、女性 1 名）および柔道経験者 10 名（男性 8 名、女性 2 名）であった。対象者には、カスタムメイドのマウスガード型慣性センサを自由練習時に装着させ、頭部直線加速度が 10g 以上となる頭部衝撃の頻度、各衝撃時の頭部直線加速度（PLA : g）および角加速度（PAA : rad/s^2 ）を測定した。また、同時に撮影した映像データを基に、相手の投技により対象の体側または背中が畳に衝撃を伴って接触した局面（＝「投げられた機会」）を、研究者 1 名（柔道歴 30 年以上）が判定・カウントした。評価指標として、① 自由練習 1 時間あたりの投げられた機会、② 投げられた機会に対する頭部衝撃発生割合、③ 投技による頭部衝撃時の PLA および PAA の 3 項目を算出した。これらの各指標について、初級者群と経験者群の 2 群間でノンパラメトリック統計手法により比較を行った。統計学的有意水準は 5% ($\alpha = 0.05$) とした。

【結果および考察】自由練習 60 分あたりの「投げられた機会」の中央値（IQR）は、初級者群で 33.1 (35.0)、経験者群で 9.18 (7.30) であった。この差は統計的に有意であり ($U = 4.5$, $p = 0.003$, $r = 0.89$)、初級者群の方が有意に多く投げられていることが示された。一方、1 回の「投げられた機会」あたりに発生した頭部衝撃（10g 超）の頻度は、初級者群で 0.07 (0.08)、経験者群で 0.10 (0.06) であり、この差は統計的に有意ではなかった ($U = 46.0$, $p = 0.16$)。ただし、効果量 ($r = 0.75$) は大きく、むしろ経験者において投げられた際の頭部衝撃頻度が高い可能性が示唆された。さらに、各衝撃時の直線加速度（PLA）および角加速度（PAA）については、両群間に有意な差は認められなかった。先行研究において、初級者では「相手に投げられた」状況における頭部衝撃の頻度が高いことが報告されているが、本研究の結果は、その背景として、初級者が練習中に投げられる機会が多いという曝露頻度の違いが大きく関与している可能性を示唆している。すなわち、頭部衝撃リスクの増加は受身技術の未熟さだけでなく、チーム内での個人の相対的な競技力といった環境的要因にも影響される可能性がある。今後、初級者の頭部外傷リスクを低減するためには、受身技術指導の充実に加え、練習における被投機会の調整や練習構成の工夫といった包括的な安全対策の検討が求められる。

【結論】柔道初級者は、経験者と比較して自由練習中に投げられる機会が多いことが明らかとなった。しかし、投げられた機会における頭部衝撃の発生頻度および頭部衝撃の大きさに関しては、両群間に有意な差は認められなかった。

高機能な衝撃低減性能を有する面防具の試作と評価

○濱西伸治（東北学院大学工学部），鍋山隆弘（筑波大学）

【目的】剣道・アメリカンフットボールなどのコンタクトスポーツにおいて，難聴患者が多数いることが報告されている．近年，頭部に繰り返し衝撃や過大な骨導が耳や脳へ伝わることで聴覚器官に進行性の神経変性を引き起こしていることが指摘されており，これらの疾患を筆者は「コンタクトスポーツ難聴」として提唱している．

本研究室で試作した蜘蛛の巣形状のサポーター(※)は用いて優れた衝撃低減効果を確認したものの，面防具の外側に装着するという見た目の問題点が課題として挙げられた．そこで本研究では，より良い外観と衝撃低減性能の両方を具有するサポーターを作製し，打撃実験を行い評価した．

【方法】厚さ 15 mm の蜘蛛の巣サポーターの形状を，面防具内側の頭頂部にフィットするように湾曲させた．材料による性能を検討するため，ポリウレタン製とゴム製の 2 種類のサポーターを，3D プリンタを用いて作成した．また，120 mm×125 mm の袋状にした帆布にサポーターを挿入し，面防具内側の頭頂部（打突部）付近にマジックテープで固定した．打撃実験では，加速度センサが埋め込まれた石膏製のヒト頭模型頭頂部に，試作したサポーターを組み込んだ面防具を装着し，打撃装置を用いて小型竹刀を振りおろした際の頭部の加速度を音響振動解析システムで計測した．

【結果および考察】打突実験の結果，サポーターなしの面防具を打突した場合と比較して，衝撃加速度の低減率は，ポリウレタン製が 30%，ゴム製が 72% となりゴム製のフィット型サポーターが最も衝撃を低減した．サポーターを面防具の外側に取付けた場合の打撃実験では，ゴム製のサポーターの変形が大きすぎて衝撃を十分に低減できなかったが，本研究で提案するように，面防具の内側にサポーターを装着する場合は，打突部に伝わった衝撃をサポーターの表面全体が変形して吸収するため，ポリウレタン製より柔らかいゴム製の素材の衝撃吸収性がより適していたと考えられる．また，面防具の内側に取付けたことにより，装着時の見た目の問題を改善することができる．

【結論】

サポーターを面防具の内側に装着することにより，打撃実験においては大きな衝撃吸収効果が得られた．特に剣道指導者などが，打ち込みなどの稽古の元立ちの際に本研究で提案するサポーターを使用すれば，元立ち自身の頭部へのダメージを大幅に低減できると期待される．今後は，実際の試装によるフィードバックをもとに，より快適な性能の高いサポーターの開発を目指す．

※ 特願 2023-215194

※ 科学研究費補助金（基盤研究 C）研究課題 21K11416

日本剣道形における視線と脳活動に関する研究

○中島 有健（東海大学大学院）、天野 聡・笹木 春光・松本 秀夫（東海大学）

【目的】剣道は、日本剣道形による修練も稽古法の一つである。全日本剣道連盟発刊の『日本剣道形解説書』には、形の修練を行うことで、目付け、呼吸法、理合、太刀さばきなどの体得につながるとしている。しかし、現状、日本剣道形は竹刀稽古と比べて昇段を目的とした実践が中心であり、本質的な魅力を引き出せてはいないと考えられる。

これまで日本剣道形における実証的研究は数多くされている。脳活動に着目した川口・高橋（2017）は、脳波と筋電位から日本の動作において高段者と中段者の判別を試み、特定の区間の α 波、 β 波、および γ 波において段位を識別できることを示唆している。また、神崎ら（1995、1996）は、日本剣道形稽古が心身に及ぼす効果について、特に心の面から、追求体験場面では α 波が見られず、イメージ想起時には α 波の顕著な出現が見られたことを示唆している。また、日本剣道形において重要とされる目付けに関する研究は数多く行われているが、脳活動との関係に着目した研究は見当たらない。

そこで本研究では、日本剣道形動作中での視線と前頭前野の脳血流を計測し、日本剣道形における「目付け」「攻め」「合気」「残心」に着目し特徴を明らかにすることを目的とした。尚、昨年は3名の被験者による計測を実施したがノイズの除去等を行った多重解像度分析はされていない。今年は10名の被験者による多重解像度分析結果から検討を行った。

【方法】脳血流（酸素化ヘモグロビンと非酸素化ヘモグロビンの濃度変化）の測定にはOctaMon(Artinis)を使用し、データの解析には専用解析ツールOxySoftとMATLAB(MathWorks)を使用した。被験者10名は剣道着を着装した状態で、脳血流と接触型視線計測器（トークアイ）を装着し、木刀を使用して日本剣道形（太刀の形計五本）を行った。試技は30秒構えを解いた安静状態の後、立会から日本剣道形を開始した。五本目終了後は、立会の間合いに戻り立礼を行うように指示をした。30秒構えを解いた安静状態を再びとらせた後、役割を入れ替えて実施した。試技の様子を左右から動画で撮影し、試技終了後、直ちに日本剣道形実践中の内観について面接調査を行った。得られたデータに多重解像度分析を行い、「目付け」「攻め」「合気」「残心」などに着目して認知と視線・脳活動の関連性について分析を行った。

【結果および考察】分析の結果、一本目の立会の間合から技が終了し相中段となり、元の位置へ剣先を下げて戻るまでの間、酸素化ヘモグロビンが上昇し、非酸素化ヘモグロビンが減少する傾向が見られた。これは一本目ということもあり、相手との間合や機会、互いの動作に注視する緊張状態であったと推察される。また、三本目・四本目に共通して、相手と接近した近・中間距離において酸素化ヘモグロビンが上昇し、非酸素化ヘモグロビンが減少する傾向が見られた。三本目は、打太刀が仕太刀の水月を突いた際、仕太刀がそれに応じて入れ突きに萎やす場面で変化が見られた。四本目は、互いに正面に打ち込み、切結んで相打ちになる場面で見られた。三本目・四本目に共通して相手と接近した際に攻めに転じる、またはそれに応じる機会に集中状態だったことが関係すると考えられる。このことから、合気・機会を意識している場面で脳血流に変化が見られた。視線に関しては相手の顔を注視している傾向高く、総じて酸素化ヘモグロビンが上昇していた。

【結論】今回の実験から緊張・集中状態に脳血流の変化が見られたとともに、視線と脳血流の関連性が示唆された。しかし、脳血流は個人内の相対変化の値であり、被験者間の比較を行うことが難しいことと、レスポンスの問題があげられる。今後は、相対的な変化に着目し、脳血流と同時に脳波を計測し、日本剣道形における更なる脳活動の特性を追求することが課題である。

文献検索による研究の発想と独創性の検討

○橋爪和夫（アール医療専門職大学）、横山直也（横浜国立大学名誉教授）

【目的】最近は学術情報検索サービスが充実している。これらの検索機能を用いて自分の研究履歴をキーワードで検索すると同類の研究が検索できる。研究では、学術的背景や研究の着想に至った経緯、研究課題の核心をなす学術的問い、学術的独自性と創造性、関連分野の研究動向と研究の位置づけ、研究の目的を達成するための準備状況、研究の国際性、そして、我が国独自の研究としての高い価値を創出する等が求められている。本研究は、発表者の研究履歴において文献検討が不十分であった内容を再検討して、研究の倫理上の問題点と研究の独自性を確認することである。

【方法】文献検索はCiNii Research「CiNii（サイニィ、NII 学術情報ナビゲータ、Citation Information by NII）は、国立情報学研究所（NII、National institute of informatics）が運営するデータベース」を用いた。本研究は発表者・橋爪和夫らの研究履歴である剣道の発声について検討した。CiNii で検索された類似文献について、発表者らの研究が文献検討において不十分であった内容を主観的に探索し研究倫理面の立場から省察した。

【結果および考察】CiNii Researchで「剣道&発声」の検索結果は「田淵知好ら=1, 1969年」、続いて「橋爪和夫ら=14件, 1987年から」、「その他の著者=16件」であり、「田淵ら」の研究は「橋爪ら」の研究の17年前に発表されていた。「田淵知好」を検索すると7件あり、発声に関する内容の論文は2件（田淵知好・安東三次, 剣道の動作における反応時間の研究, 津山工業高等専門学校紀要, 1巻, 5号, 1967年と田淵知好・安東三次, 反応時間の研究（その二）剣道の発声運動について, 津山工業高等専門学校紀要, 2巻, 1号, 1968年）であった。本研究は「田淵知好」の2件の論文と「橋爪&剣道=30件」の内の27件の発声に関する論文を対象とした。

田淵知好・安東三次の「剣道の動作における反応時間の研究」は「懸声の有無に関する実験, 1966年」と「反応時間の実験, 1967年」をまとめたものである。ロボットに対する面・小手・胴打撃であり、単純反応時間と選択反応時間(ms)、打撃力(kg)について4群(全日本選手権大会優勝者2名を含む)の差を比較している。「懸声」の用語を用いているが剣道の歴史に関する記述と文献記載はない。「懸声」が反応時間を速めると要約している。光刺激を用いた点は、橋爪らの10編の発表や論文の文献となるものである。

田淵知好・安東三次の「反応時間の研究（その二）剣道の発声運動について」は発声を「掛声」と著しているが、「懸声」から「掛声」に変更した理由は記述されていない。有声の実験では、「自ら練習時の「掛声」を発声させたのち、2～3秒を経過して光刺激を提示して面であれば「メーン」と打撃部位名を呼称させて面・小手・胴の選択反応打撃」を行わせている。この研究では、発声の測定として周波数（ホン）を測定している。これは、橋爪らの剣道の声の大きさに関する4論文の文献となるものである。また、本論文の文献にある発声の周波数分析、血圧、脈拍数、血糖値などの運動生理学的項目は、橋爪らの着想と類似している。特に、本論文に引用されている「Steinhausと猪飼」の文献は橋爪らの発声の着想や研究の発展に関わる主要な文献であり、橋爪らは引用すべきであったと考えられる。

【結論】学術情報検索サービスを用いて、先行研究論文との着想、創造性、独創性の分別を確認することができた。橋爪らが認知していなかった田淵知好・安東三次の2論文は文献として記載する必要性が確認された。本研究の省察のプロセスは今後は研究倫理のそれぞれの段階において確認すべきことである。

IP-1

柔道ゴールデンスコアの戦略に関する調査 その1 -GSを意識する時間帯と狙うポイント-

○越野忠則, 熊代佑輔 (国際武道大学),
恩田哲也, 佐藤宣践, 中矢 力 (東海大学)
廣川充志 (桐蔭横浜大学), 畑山元政 (帝京科学大学)

【目的】2002年、国際柔道連盟(IJF)理事会において、IJF主催の柔道大会にゴールデンスコア(GS)方式の導入が決定され、翌年より実施された。GS方式とは、柔道の試合において規定時間終了時に両者が同じポイントだった場合、どちらかがポイントで優位に立つまで延長戦を行う方式である。GS導入当初は延長時間にも制限があり、決着がつかない場合は旗判定で勝敗を決めていたが、現在では時間無制限で明確な勝敗が決まるまで試合が続けられる。2020年東京五輪代表決定戦男子66kg級決勝では、総試合時間が24分に及んだ例も記憶に新しい。柔道のルール改正に伴い、施技や技の効果、試合時間帯など競技内容に関する研究は多数行われてきたが、戦術的観点からの分析は十分とは言えない。そこで本調査では、GS方式導入後の選手の戦略的対応に焦点を当てて考察を行い、日本柔道のさらなる強化と発展に資することを目的とする。

【方法】調査はGoogle Formsによるオンラインアンケートで実施し、全日本学生柔道Winter Challenge Tournament出場経験を有する14大学の部員を対象とした。有効回答は139名(男子86名、女子53名)である。

調査依頼は各大学監督に協力を依頼し、同意書を取得した上で、監督またはマネージャーを通じて回答を募った。質問項目は、性別・学年・階級・試合時間等の基礎項目に加え、GS延長時間やGSを意識する時間帯など計11項目とした。階級は男女各7階級を軽量級・中量級・重量級の3郡に区分し、単純集計、クロス集計、カイ二乗検定を用いて分析を行った。

【結果および考察】現在の試合時間に関する質問では、男女ともに8割以上が「良い」と回答した。GSに時間制限を設けるとした場合の理想的な時間については、「3分」と「無制限」が男女ともに3割以上を占め、他の選択肢よりも多かった。規定試合時間中にGSを意識し始めるタイミングについては、「3分以降」と回答した者が男女ともに半数を超えていたが、女子では「試合開始から」GSを意識する傾向も一部に見られた。GS中における「指導」ポイントの有無と攻撃姿勢の関係では、有利または同点の状況下では「相手に指導を取らせる」ことを狙う傾向が多く、不利な状況では「技有」以上の技による逆転を狙う傾向が強く認められた。また、男女別および階級別での統計的比較では、すべての項目において有意な差は見られなかった。この結果から、GS時の戦略においては性別や階級による違いは少なく、共通した戦術的対応がなされている可能性が示唆された。

【結論】本調査では、柔道におけるゴールデンスコア(GS)方式に関して、選手自身の戦略的対応に着目し、大学一流柔道部所属選手を対象としたオンラインアンケートにより考察を行った。その結果、本戦中にGSを意識し始める時間帯は「3分以降」が多い。GS突入後は、ポイント状況が有利または同点の場合に「指導」を狙う戦術が多く、不利な場合には「技有」以上の得点を狙う傾向が示された。さらに、男女間および階級別において統計的な差は認められず、GSにおける戦略は性別や階級を問わず共通している可能性が示唆された。

柔道ゴールデンスコアの戦略に関する調査 その2
-GS 時の戦術と組手の意識について-

○中矢 力, 恩田哲也, 佐藤宣践 (東海大学),
熊代佑輔, 越野忠則 (国際武道大学),
廣川充志 (桐蔭横浜大学), 畑山元政 (帝京科学大学)

【目的】2003 年 9 月の大阪世界柔道選手権を機に、国際柔道連盟主催大会においてゴールデンスコア (以下 GS) 方式が導入された。導入以降、GS の運用には見直しが重ねられ、当初は 5 分間の延長戦で決着がつかない場合は旗判定により勝敗が決していたが、現在では本戦終了後、ポイントが同点の場合、時間無制限で勝敗が決するまで延長戦が行われる。GS 導入により、選手は本戦に続いて高強度の運動を求められることから、身体的には持久力を含む体力的要素の重要性が高まると推測できる。また、優劣の差が少ない状況で試合を継続することにおいて、戦術的要素も勝敗を左右する可能性がある。そこで本研究では、同学会にて越野らが発表している「柔道ゴールデンスコアの戦略に関する調査 その1-GS を意識する時間帯と狙うポイント」の関連研究として、GS 中の戦術と組手に焦点を当て、同様の目的で考察を行った。

【方法】調査は Google Forms によるオンラインアンケートを用い、全日本学生柔道 Winter Challenge Tournament 出場経験のある 14 大学の部員を対象とした。得られた有効回答は 139 名 (男子 86 名、女子 53 名) である。質問項目は、性別、学年、階級などの基礎情報と、GS 時の「指導」取得方法、組手の傾向 (相四つ・喧嘩四つ)、技あり以上を狙う際の組手など、計 10 項目を設定した。分析は、柔道の男女各 7 階級を軽量級・中量級・重量級に分類し、単純集計、クロス集計、カイニ乗検定を用いて実施した。

【結果および考察】試合中に相手に「指導」を与える方法 (複数回答可) として、「足技を使って相手より先に攻める」が全体の約 3 割と最多であった。GS 時の「指導」狙いに関する組手では、相四つ・喧嘩四つともに「引手・釣手の両方を持つ」との回答が最多だったが、相四つにおいては男子で「引手のみを持つ」との回答も多く、男女間で有意な差が認められた。また、技あり以上を狙う際は、相四つ・喧嘩四つのいずれにおいても 8 割以上が「引手・釣手の両方を持つ」と回答した。GS 時の「指導」 (対相四つ) を狙う場面では男女間で傾向の違いがみられたが、その他では男女および階級間における顕著な差は見られなかった。GS 時の攻めにおける寝技又は立技に関しては、男女、階級問わず殆どで立技中心との回答であった。これにより、現在の多くの選手は、階級を問わず類似した戦術・戦略で GS に臨んでいると推察されるが、今後勝ち続けるためには、現行ルールに即した新たな戦略の構築が求められると考えられる。

【結論】本研究では、柔道における GS 方式の戦術面に着目し、大学柔道強豪校の選手を対象に調査・考察を行った。その結果、男女間や階級間で一部に差異は認められたものの、全体として大きな傾向の違いは見られなかった。このことから、対象者の多くは共通した戦術・戦略で GS に臨んでいると考えられる。今後は、さらなる勝利を目指す上で、柔道ルールに即した新たな発想に基づく戦略の導入が重要となるであろう。

IP-3

柔道競技の組手の攻防における攻撃切替技能の練習法の検討

○高野綺海（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科），奥村基生（東京学芸大学）

【目的】柔道は、ベースボール型やネット型競技とは異なり、直接の身体接触がある攻防一体型の対人競技である。自分と相手の運動が直接影響し合い、それに応じて攻防を展開し続けなければならない。また、選手は予めプログラムした運動を実行するだけでなく、状況の変化に対応し遂行中の運動を調整したり切り替えたりする必要がある。

本研究の目的は、柔道において状況の変化に素早く正確に対応するために有効な対人技能の特性を明らかにすることであった。まず、①相手が動かずに防御してこないとわかっている状況で、参加者が釣手を持ちに行く課題と、②相手が防御することがわかっている状況で、参加者が相手の防御を避けて釣手を持ちに行く課題の2つの単純課題を行った。次に、③相手が反撃してくるかどうかわからない状況で、相手が動かずに防御してこないときには参加者が釣手を持ちに行く、相手が防御してきたときには参加者が相手の防御を避けて釣手を持ちに行く動作に切り替える切替課題を行った。個人・基本技能の練習の状況に近い単純課題と対人技能を含み試合の状況に近い選択課題を比較することで、試合で必要な知覚―運動技能を発見する試みである。そこで、単純課題と選択課題における攻撃のキネマティクス・データを分析し相違を検討する。

【方法】

参加者：大学女子柔道部に所属する14名を参加者とし、全国大会ベスト8以上になった経験がある選手を上級群、それ未満を中級群とした。

実験方法：実験では、参加者の攻撃の課題として、実戦で頻繁に見られる組手場面における、釣手を取る動作を攻撃課題として設定した。組み合い方は右組対左組のケンカ四つで行い、参加者を右組、実験者を左組1名に設定した。実験者の防御には実験者の釣手（左手）で参加者が持ちに来た釣手（右手）を上から叩く動作に設定した。この時の参加者の動作は、持ちに行く釣手を実験者が上から叩いてくるため、それを避けて持つ動作とした。

単純課題（各10回行った）

- ①相手が動かないとわかっている状況で、参加者が釣手を持ちに行く課題
- ②相手が防御するとわかっている状況で、参加者が防御を避けて釣手を持ちに行く課題
- 切替課題（各10回になるようにランダムな順序で行った）
- ③相手が動かないときには参加者が釣手を持ちに行く

または、相手が防御してきたときには参加者が防御を避けて釣手を持ちに行く課題
参加者の動作を試行間や参加者間で可能な限り同じようにするため、そしてまた、参加者の動作に応じて実験者が反撃を行うため、スタート位置は固定し、動作開始タイミングも統一した。

分析項目：分析では、単純課題と切替課題において、参加者の釣手の動き出しから実験者の襟を握るまでを運動時間とした。また、握った襟の位置を参加者の正確性とした。さらに、切替課題において、参加者の動作の成功・失敗を回答させ、切替の成功率を算出した。

【結果および考察】および【結論】

まず、相手の動きがわかった状況で攻撃を行う単純課題よりも相手の動きがわからない状況で行う切替課題で運動時間が長くなり、正確性が低下することが考えられ、さらに熟練度による運動時間と正確性、成功率の相違も見られると考えている。

中央と地方における旧制高校剣道部の活動状況

○佐藤皓也（新潟医療福祉大学）、小林勝法（文教大学）、太田順康（大阪教育大学）、
劉暢（国際武道大学）

【目的】日本の教育制度は1886年の学校令によって確立され、身分や性別にかかわらず、国民に公教育の機会が開かれた。この制度は学生が剣道を工夫し、普及する基盤をつくった。剣道の普及を担った代表的な学校としては、東京の第一高等学校（以下、一高のように略す）と京都の三高といった旧制高校が挙げられる。二つの学校は1886年に設立され、一高では1886年に、三高では1892年に剣道部が誕生した。本研究では一高や三高を中央の学校と位置づける。東京と京都は、武道における普及と振興の中心地だったと考えられるからである。東京には武道に関する制度などを所管する文部省があり、京都には近代日本最大の武道団体である大日本武徳会があった。

本研究では中央だけではなく、地方の旧制高校にも着目する。その理由は地方が中央に影響を与える可能性を有しているからである（大久保英哲, 2023）。ここでいう地方の学校とは、金沢の四高と熊本の五高を指す。二つの学校は1887年に設立され、四高では1892年に、五高では1891年に剣道部が誕生した。大正期に始まった学生剣道界初の全国大会（京都）において、四高と五高は決勝の常連校であり、特に五高は際立った競技成績を残した。全国大会は1913年から1940年まで28回実施され、五高は10回の決勝進出で5回優勝、四高は7回の進出で4回優勝を果たしている。なぜ地方の学校が全国大会決勝の常連校になれたのか、本研究ではこうした問いに導かれ、一高と三高に加えて四高と五高を対象とした。

以上を踏まえ、本研究の目的は明治期から大正期における学生剣道界の実態を解明するために、中央と地方の旧制高校における剣道活動の異同を明らかにする。

【対象と方法】**対象**：一高『校友会雑誌』、三高『嶽水会雑誌』、四高『北辰会雑誌』、五高『龍南会雑誌』。データ化した総文字数：約70万字（1886年-1926年まで、258冊分）。

方法①資料のデータ化：光学文字認識ソフト「FROG AI-OCR」。

方法②資料の分析：「KH Coder」による共起ネットワークとコーディング。

【結果】各校における簡略化した共起ネットワーク（○）とコーディング（●）の結果

○一高：学内試合、勝敗、指導者、大会、武士道、寒稽古。

○三高：勝敗、大会、打突、審判、味方の敗退、選手、競技スポーツとしての剣道、相手の攻撃、ポジション。

○四高：打突、勝負への意気込み、指導者、勝敗、選手、複数の部活による合同遠征、武士道、名誉、大会。

○五高：学内試合、地元、選手やOB、剣道部の遠征、勝敗、打突、優勝校、個人の名誉、稽古。

※下線部は他校に見られない話題

●各校のコーディング：大正期以降は伝統性よりも競技性に関連する語の出現率が高い。

【考察】一高は〈寒稽古〉という話題があり、身心の鍛錬を重視していた。三高は早くから〈競技スポーツとしての剣道〉を意識していた。四高は〈複数の部活による合同遠征〉によって大会などでの〈勝負への意気込み〉を高めた。五高が所在する熊本は、積極的に武道を振興した土地である。そうした環境（〈地元〉）で常に〈優勝校〉を意識し、〈剣道部の遠征〉を実施した。各校は大正期になると全国大会が始まり、身心の鍛錬を重視する〈伝統性〉よりも勝敗や順位を重視する〈競技性〉が高まった。

※〈〉は分析で使用した語

原馬室獅子舞棒術に伝承される武術的要素（第一報）

○渡邊峰雄（日本薬科大学，双月会）

【背景および目的】埼玉県鴻巣市原馬室には、獅子舞および棒術が伝承されており、いずれも埼玉県の無形文化財に指定されている。原馬室獅子舞棒術保存会の資料によると、獅子舞の由来は古く、天正2年（1574年）に当地を訪れた田楽師・山田右京助、橋本市左衛門により伝授されたとされ、450年以上にわたり継承されてきた。一方、棒術については、「棒の始之事解」「棒の解」といった縁起が記された古文書が現存しておらず詳細は不明であるが、宮本武蔵（1584- 1645）の二刀流、佐々木巖流（?- 1612）の「龍高流（原文ママ）」、柳生十兵衛（1607- 1650）の新陰流の三法を模したとの伝承があったという。芸能としての棒術・太刀術が伝承されている地域は、武蔵国の荒川中流から下流域に集中しており、かつて多様な武術流派が興った地域と重なっている。明治以降、これらの武術流派は次第に失伝していったが、その技術の一部が地域芸能に取り込まれ、「動き」として保存されている可能性がある。本研究は、木太刀、六尺棒、真剣を使用して多彩な演目を伝承している原馬室の棒術を、武術的視点から分析することを目的とする。本報告では、演目のうち「一箇（いっか）」から「七箇（ななか、しちか）」までの4演目について、現時点での考察を示す。

【方法】原馬室獅子舞棒術保存会の稽古見学、聞き取り調査、ならびに映像資料の解析を通じて、身体操作を観察・検討した。その際、必要に応じて周辺地域に伝わる武術流派の技術も参考とした。抽出した武術的身体操作については、原馬室獅子舞棒術保存会の皆様に意見を伺い、伝承内容との乖離を避けるよう努めた。

【結果および考察】本報告では、「一箇」「三箇」「五箇」「七箇」の4演目を対象とした。これらはいずれも二人一組で行われ、長さ約3尺（約90cm）の櫓製の木太刀が用いられる。木太刀には鍔をつけず、鍔の位置に色紙が巻かれて刃部と柄部を視覚的に表現している。演者が子供であっても、木太刀の長さは変えずに用いる。「一箇」では、刀を差しした状態で向かい合い、すれ違いざまに互いの右肩がぶつかることで演目が開始される。このようなすれ違いを起点とする構えは、群馬県伊勢崎市に伝わる荒木流拳法などにも見られ、他流派からの影響や技術の移入が示唆される。その後、両者は腕を伸ばして間合いを計り、正面から向かい合って木太刀を袈裟斬り方向に振り下ろし、物打ちで強く打ち合う。演目の最後には、木太刀を背中に隠して終了となる。この演目には、刀の差し方、適切な間合い、しのぎの使用法、刀の長さを判別しにくくする工夫など、対人稽古における基本的な教示が含まれており、子供向け演目でありながらも実践的な内容を有している。「三箇」以降では、「一箇」同様に向かい合った後、木太刀を上下で打ち合う動作や真っ向斬りが加わり、演目の難易度が段階的に高くなるよう構成されている。特に、打ち合いにおける「手の内」の柔軟性が求められており、その操作には一般的な剣術とは異なる特徴も認められた。

【結論】原馬室に伝承される棒術は、芸能的な演目として奉納の場において継承されてきたが、その中には多くの武術的要素が含まれていると考えられる。今後も継続的に調査・研究を進める予定である。

【謝辞】本研究にご協力いただいた原馬室獅子舞棒術保存会の大杉正行会長、中島輝雄副会長、中野義春副会長をはじめ、会員の皆様に心より感謝申し上げます。また、検証にご協力いただいた双月会、二刀流クラブ、日本薬科大学剣術部の皆様に深謝いたします。

計量テキスト分析を活用した武芸伝書分析の試み

○太田順康（大阪教育大学）、小林勝法（文教大学）、
佐藤皓也（新潟医療福祉大学）、劉暢（国際武道大学）

【研究背景および目的】

武芸伝書の研究はこれまで主に定性的分析が中心であった。定性的分析では、文献の背景や時代性、著者の意図、語彙や表現の意味、構造などに注目し、文脈に即した深い解釈が可能である。しかし主観に依存する部分が多く、再現性や客観性に課題があるうえ、分析には時間と専門知識を要するため、専門家による研究が中心となっている。

これに対して、計量テキスト分析は文献をテキスト化し、語彙の頻度や共起関係を統計的に処理することで、再現性のある客観的分析が可能であり、専門外の人でも一定の解釈ができる利点がある。ただし、深い意味や文脈の理解には限界もある。小林（2023）は、武道歌に計量テキスト分析を適用し、武術理念の抽出が可能であると報告している。

本研究では、全国的に著名な『五輪書』と、鳥取藩に伝わる『井蛙語海』に計量テキスト分析を適用し、頻出語や共起関係の可視化を通じて文献構造の把握を試みる。『井蛙語海』は深尾角馬が興した雖井蛙流平法の口伝書で、宝永年間に上野忠親が著した。一方『五輪書』は、宮本武蔵による「地・水・火・風・空」の五巻構成の伝書である。『井蛙語海』は「総説」と3巻の口伝部（夢想万勝之巻・利集之巻・夢想秘極之巻）の4巻構成となっている。

本研究は、各伝書全体および巻ごとの分析結果を専門的知見と比較し、計量テキスト分析の有効性を検証することで、武道伝書への理解促進を図ることを目的とする。

【方法】

分析対象：『五輪書』（宮本武蔵、岩波文庫版）・『井蛙語海』（尚徳会叢書版）

分析手法：全文をテキスト化し、KH Coder を用いて計量テキスト分析を実施し、巻ごとの語彙傾向や構造の違いも比較した。

【結果および考察】

『五輪書』は30,145語（抽出語数20,996語）、『井蛙語海』は53,104語（抽出語数35,380語）であった。分析の結果、両文献および各巻の頻出語と共起関係が可視化され、構造的な特徴が明らかとなった。たとえば、『井蛙語海』の「総説」では「角馬・深尾・石河・白井」などの人名が多く、他の巻では「錫杖・三曲・埋木・稲妻」など技名や「先師・口伝」などの語が多く現れ、巻ごとに性格の違いが明瞭になった。これらの結果は従来の専門的解釈とも整合的である。

【結論】

計量テキスト分析により、武芸伝書の主題や構造を客観的に把握することができた。分析結果は従来の解釈と大きな差異はなく、今後の研究や理解促進に有用な方法であることが示された。

IP-7

『紀効新書』の武術記述分析 ― 戚繼光の武術観を探る

○劉暢（国際武道大学）、佐藤皓也（新潟医療福祉大学）、
小林勝法（文教大学）、太田順康（大阪教育大学）

【目的】

『紀効新書』は16世紀後半の倭寇討伐を背景に編まれ、練兵法や戦術、武器操作、陣形、身体技法などを体系化した実戦的兵書として高く評価されてきた。この書は中国国内のみならず、18世紀にすでに日本にも伝わり、江戸時代において繰り返し翻刻・注解されてきた。その結果、『兵法秘伝書』や『武術早学』などの武士階級の軍事教養や武芸修練を目的とした和書にも大きな影響を与えた。しかし、従来の研究は『紀効新書』の一部章節に限った定性研究が主であり、文献全体を俯瞰した研究は限られていた。そこで本研究では、全文テキストをもとに計量テキスト分析（KH Coder）を用い、語彙の出現頻度や構造を明らかにすることで、戚繼光の武術観を包括的に捉えるとともに、その思想が日中の武術文化に与えた影響を再考する一助とする。

【対象と方法】

対象：中国哲学書電子化計画（Chinese Text Project, 略称：CTP）に収録されている『紀効新書』十八巻本のテキストデータを使用した。これは、清代に編纂された『欽定四庫全書』を底本とし、原本は浙江大学図書館に所蔵されている（子部二・兵家類）。全18巻構成は、影印版では5冊に分冊されている。このほか、本研究では「紀効新書」、「戚繼光」に関する日本国内外の研究、70篇を整理し、分析の補助資料として活用した。

方法：『紀効新書』十八巻本に関しては、いくつかの代表的な写本・刊本を比較検討した既存研究を参照し、それをもとにCTPに収録されているテキストデータの一部表記を校訂した。その上で、計量テキスト分析ソフト（KH Coder）を使用し、書籍全体、および各巻における語彙の出現頻度、共起関係、特徴語の抽出などを行った。

【結果】

『紀効新書』十八巻本を対象に、KH Coderを用いた語彙分析を実施した。そのもととなる影印データはすでに全文テキスト化されており、総漢字数は80,053字、総抽出語数は58,225語である。この中で、頻出語として「兵」「賊」「旗」「中軍」「船」「法」「号令」「隊」「營」などが確認された。これらの語彙からは、戚繼光の武術記述が単なる個人の身体技法にとどまらず、集団戦闘や部隊編成、命令伝達といった組織的・軍事的実践と密接に結びついていたことを確認した。

【考察】

これまで断片的に扱われてきた戚繼光の武術観を、全文テキストに基づく構造的かつ包括的な視点から再考した結果、『紀効新書』は個人の技法や身体操作にとどまらず、兵士集団を効率的に統率・運用するための訓練および統制の手段として武術を記述していたことが明らかとなった。一方で、抽出語の多くが単音節語に集中しており、語彙の意味単位や文脈的機能を適切に把握するうえでの限界も確認された。確かに、単音節語を機械的に排除する方法も存在するが、中国古典文献においては一字が重層的な意味を担うことも多く、重要語の除外を招く可能性がある。今後は、中国語の文脈に応じた分かち書きや分詞処理が可能な専用ツールの導入を視野に入れ、より精緻な語彙単位の抽出や文脈構造の分析を進めていくことが期待される。

大学柔道選手が指導者から受ける非言語的行動の印象と頻度に関する調査 (その3)

○熊代佑輔（国際武道大学）、前川直也（国際武道大学）、
廣瀬伸良（順天堂大学大学院）、伊藤潔（九州共立大学）

【目的】コミュニケーションには、言語によるものと言語を伴わない非言語（顔の表情や顔色、視線、身振り、体の姿勢、相手との物理的な距離、声のトーンや声質など）に分類される。情報の伝達経路の手段として言語を補う役割が強調されているが、微妙な感情を表現するには非言語のほうが有効であり、メッセージの3分の2は非言語的変数によって構成されている（遠藤ら、2004）。このことから、選手は指導者の非言語的な行動の影響を少なからず受けているものと推察できる。そこで、本研究は、大学柔道選手が指導者から受ける非言語的な行動の印象と頻度についての実態を明らかにすることである。

第56回大会での発表では、大学柔道選手が指導者から受けた非言語的行動において、選手が抱く印象、選手が体験した頻度に有意差が認められた項目について発表した。加えて、それらの印象や体験頻度の男女差についても発表した。第57回大会では、第2報として、因子分析および重回帰分析の結果を発表した。今大会においては、学年、経験年数、最高の競技歴、階級による属性で有意差の認められた項目について発表することとする。

【方法】2023年4月～6月に全日本学生柔道連盟に所属する大学柔道選手を対象に郵送法にて調査を行った。そのなかで調査用紙の記載項目に不備のない383名（男268名、女115名）のデータを分析対象とした。調査内容については、石塚ら（2017）の先行研究をもとに①基本属性（学年、性別、競技経験年数、最高競技実績）、②指導者（1名の指導者を選出）との心理的関係を示す「親密さ」、「信頼」、「やる気」の3項目を5件法（「ない」、「ややない」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばある」、「ある」）で調査した。

調査項目では、石塚ら（2017）の先行研究で用いたノンバーバルコミュニケーション36項目に対する印象と体験頻度の評価を求めた。指導者が各項目についての行動をとった場合の印象について、「悪い」、「やや悪い」、「どちらでもない」、「やや良い」、「良い」の5件法で評価を求めた。体験頻度については、これまで実際にどのくらい体験したかを、「少ない」、「やや少ない」、「どちらでもない」、「やや多い」、「多い」の5件法で評価を求めた。

学年は、1・2年を下級生、3・4年生を上級生に分類した。経験年数は、10年以下、11-15年、16年以上の3群に分類した。最高の競技歴は、国際大会入賞、国際大会出場、全国大会入賞を「実績高位群」、全国大会出場を「実績中位群」、ブロック大会入賞、ブロック大会出場、その他を「実績低位群」として3群に分類した。階級は、男子については、60 kg級、66 kg級、73 kg級を「男子軽量」、81 kg級、90 kg級、100 kg級、100 kg超級を「男子重量」、女子については、48 kg級、52 kg級、57 kg級を「女子軽量」、63 kg級、70 kg級、78 kg級、78 kg超級を「女子重量」の4群に分類した。それぞれ χ^2 検定によって有意差を求めた。有意水準は5%未満($p < 0.05$)とした。

なお、本研究は国際武道大学研究倫理規則に基づき、研究倫理部会で承認された研究である（承認番号22021）。

倫理的配慮として、対象者には研究趣旨およびプライバシーの保護、回答拒否および回答の中断が可能であることを調査用紙に明記し、同意できる者のみに回答依頼を行った。

【結果および考察】学年の上級生と下級生の比較において、印象では、「身を乗り出して説明する」は下級生よりも上級生の方が好印象であり、「向き合いながら話す」、「選手の顔に触れる」は下級生の方が好印象であった。頻度では、「身を乗り出して説明する」は上級生の方が高い頻度で体験していた。

IP-9

跳込み流し突きの創出についての考察

江川 玫成（東京学芸大学）

I はじめに

和道流空手道には、基本技の一つとして「跳込み突き」があり、その発展的技として「跳込み流し突き」がある。この技の創出については、流派の創始者である大塚博紀師範の著書『空手道 第一巻』と『空手道 第二巻』に記載はない。したがって、今回の発表において、上記の技の成立について考察してみることにする。

II 跳込み流し突きを行う状況

跳込み流し突きは、対戦相手の上段（顔面）を攻撃する跳込み突きがベースとなっている。

対戦相手の上段を攻撃しようとして跳込み突きを行ったところに、対戦相手が同様にこちらの上段を狙って攻撃してきた状況、あるいは中段前蹴りか中段回し蹴りをしてきた状況を想定しての対処技である。

このように、わが方としては、対戦相手の攻撃を躲しながら上段突きを行うという防御と攻撃の両方を狙った技である。つまり、跳込み流し突きは、攻防一体の技なのである。

III 跳込み流し突きの成立について

江戸初期の剣客として名高い宮本武蔵の著『五輪書』の「水の巻に＜三つの受けのこと＞という項がある。「三つの受け」とは、次のようなものである。

第一は、敵に入り込むとき、敵の打ち出す太刀を受けるのに、我が太刀で敵の目玉を突くようにして、敵の太刀を我が右肩の方に引き流して受けるのである。

第二は、突き受けといって、敵の打ってくる太刀を、敵の右目を突くようにして、ちょうど敵の首を挟むような心持ちで突きかかるようにして受ける。

第三は、敵が打ってくる時、小刀で入る際、受ける太刀はそれほど気にせず、左手で敵の顔面を突くようにして入り込むのである。

いずれも、左の手を握って拳にして、敵の顔面を突くように思うがよい。よくよく鍛練すべきことである。

IV おわりに

以上のように、跳込み流し突きのルーツは、①宮本武蔵の『五輪書』にあるとも考えられる。あるいは、②空手道以前に柔術当身拳法、神道楊心流柔術を行っていたことが影響したかもしれない。③和道流の創始者である大塚博紀師範のアイデアかもしれない。①か②であったとしても、世間でいう盗作でないことは間違いない。その訳は、剣術や柔術は空手術とは別であるからである。ヒント的転用か、それとも個人のアイデアかのいずれかであるのは間違いない。現在のところ、これらのいずれであるかは分からない。

なお、参考までに言えば、他の理論を援用してとても貴重な研究成果をあげ、ノーベル化学賞を得た事例がある。

柔道競技を始める契機に関する研究

○塚田真希（東海大学）、宮崎誠司（東海大学）、
吉田岳（ジャパンエレベーター・サービス会社）、
今井優子（東海大学）、中矢力（東海大学）

【目的】柔道競技は2024年のパリ五輪において計17個のメダルを獲得しており、世界で活躍が期待されるスポーツの一つとして高い競技力を有していることが窺える。世界での活躍が目立つ一方で日本国内では競技人口の減少が課題とされている。現在、競技人口を増やすために柔道界では様々な取り組みがされているものの柔道普及についての検討はわずかである。特に柔道を始める契機についての知見が少ないため本研究では、学生に焦点を当てて柔道をはじめた契機とその詳細について調査を行った。

【方法】対象者は大学柔道選手446名（男子287名、女子159名）、他競技を実施している大学生180（男子117名、女子63名）とした。

アンケートを用いて以下の調査を行い柔道と他競技の比較を行なった。

- ・競技をはじめた時の契機と当時のモチベーション
- ・指導方法や指導者の印象について（柔道のみ）

【結果および考察】柔道競技を始める契機は他競技と比較して親や兄弟・姉妹の影響が強いということが明らかとなった。女子選手の場合、兄弟・姉妹の影響（48.4%）が多く、次いで親の影響（29.3%）が強いという結果であった。このことから、柔道は自発的に始めるよりも家族の影響が大きいということが示唆された。柔道の場合、親族に柔道の関係者がおりその影響で柔道をはじめた可能性が大きい。

柔道も他競技においても自らの意思で続けている場合が最も多く、次いで人から勧められて続けている場合、人から強制されて続けている場合という結果であった。また、競技をはじめた当時のモチベーションとして楽しんでいたという回答が最も多かったものの次いで嫌々だったという結果であった。

大学柔道選手の多くは、小中学生時に厳しい指導をされており練習時と試合時両面において厳しく指導されていたことが明らかになった。次いで褒められる指導がされていたという結果であった。

【結論】

柔道競技をはじめた契機は他競技に比べ親や兄弟・姉妹などの親族の影響が大きいということがいえる。また、小中学校時の指導された印象については厳しく指導された印象が大学生になっても残っていることが考えられる。

IIA-1

居敷の可能性について ～新陰流と制剛流との関わりから～

○佐竹彬（石田・佐竹稽古塾 塾長）

【目的】

多くの古流武術に、居敷（折敷）と呼ばれる座法がある。正座から両爪先を立て、さらに右足を起こした姿勢である。いわゆる片膝立ちとは、踵の上に座っている点で異なる。柔術や居合術ではよく見られる一方、剣術には比較的少ない。また、武術において立ち方や歩き方に言及される割合と比べ、座り方にはフォーカスされにくいように思われる。そこで、古武術ならではの座法である居敷について、新陰流（剣術）と制剛流（居合）の関連から考察する。

【方法】

新陰流（剣術）と制剛流（居合）との関わりから、考察を加える。その際、制剛流居合の伝書について、時代順に ①梶原家に伝わるもの、②長岡家に伝わるもの、③②に長岡房成が手を加えたもの、④③に柳生厳長が手を加えたもの の4種類を比較・検討した。特に、①から②、②から③で大幅な変化が見られたため、その点を中心に掘り下げる。

【結果および考察】

制剛流はもともと柔術を中心とした流派で、居合もその一部であったことが伝書①に残っている。江戸時代後期、尾張柳生家の兵法補佐役であった長岡家が新陰流の稽古体系を整備した際、制剛流の居合も手が加えられた上で採り入れられた。①で「居合膝」と書かれているのはいわゆる片胡座であるのに対し、②以降は「居合腰」という表記に変わり、詳細は記されていない。名前が違っただけで同じものである可能性も否定できないが、後述する理由から、遅くとも③の時点で、冒頭に述べた居敷＝居合腰となったと推測される。

また、制剛流居合で最初に教習される表七本において、伝書①では後ろの爪先を90度横に向けること、「飛違」が多用されることが特徴である。一方、②以降はそれが全くなり、最後に切るところで「居敷く」という表現が頻出する。

こうした変化の原因は、制剛流（居合）が新陰流（剣術）に組み込まれたという経緯を考えると、そうすることで新陰流に利するためであったと考えるのが合理的である。伝書をもとにいくつかの業を分析した結果、我々はそれを「立-座の瞬時変換」にあると仮定している。すなわち、姿勢変化を素早く行うため、座法を改めたのではないかという推論である。他流派の居合においても、最初の座り方、あるいは業の途中で居敷を行う場合、同様のメリットが見られる（夢想神伝流「逆刀」など）。

特に、長岡房成は彼が考案した試合勢法の組み立て方から、実質的に同じ技法を違うやり方で教授する考え方を持っていたと推察される。そこから、立った姿勢で行う業を座った姿勢で、あるいはその逆を行えるように制剛流居合を編纂したとも考えられよう。先程、遅くとも③の時点で居敷＝居合腰となったという推測を述べたのはそのためである。もともと、新陰流兵法において、剣術のみならず杖術や槍術でも居敷く動作が少なからず見られることも、無関係ではあるまい。

【結論】

剣術は、立った姿勢を基本とする。他方、居合では多くの業が座った姿勢から始まる。そのため、居合と剣術の接続という観点では、座った姿勢から素早く立つことの利は大きい。その姿勢変化の速度は、正座や片胡座、立膝などと比べると、居敷が際立っている。ここに、居敷という座り方の可能性が見えてくる。すなわち、居敷を介して「剣居一体」を実現する可能性である。

後期水戸学における「文武」に関する研究 —藤田幽谷に着目して—

○鈴木謙心（筑波大学大学院）、酒井利信（筑波大学）、大石純子（筑波大学）、

【目的】

現代における武道の教育的な要素に関連する重要な概念としては、「文武両道」・「文武不岐」など「文武」に関わる思想が上げられる。「文武」の兼修に関しては、中世以来、武士の間で長らく重視されていたことが先学で明らかになっており、現在でも様々な場面で「文武」の兼修に関する言葉は使用されている。「文武」の思想が醸成されたのは近世期であり、各藩の藩政や武士教育における重要な概念として取り上げられていた。特に水戸藩における弘道館では「文武不岐」が理念として掲げられ、「文武」を重視した武士教育が行われていた。ここで発展した後期水戸学において「文武」思想が重要視されたことは先学でも指摘されている。しかし、後期水戸学で指摘されている「文武」思想については、徳川斉昭（1800-1860）が著した『弘道館記』（1838）や、その解説書として藤田東湖（1806-1855）が著した『弘道館記述義』（1846）を中心とした「文武」を指摘するのみに留まり、後期水戸学の思想形成に影響を与えたとされる藤田東湖の父藤田幽谷（1774-1836）の「文武」の考え方にに関して検討は行われていない。そこで本研究では、藤田幽谷の「文」と「武」についての記述を考察し、「文武」の考え方について詳細を明らかにするとともに、藤田幽谷の「文武」の思想が、後期水戸学の中心人物とされる藤田東湖にいかなる影響を与えたかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究では、藤田幽谷の『正名論』（1791）や『丁巳封事』（1807）、藤田東湖の『弘道館記述義』を取り上げる。これらの資料から「文」と「武」の意味内容に該当する記述を抽出し、それらを正確に読み込み解釈することで、藤田幽谷の「文」と「武」の思想の詳細や藤田東湖への影響について考察を行っていく。

【結果および考察】

藤田幽谷『正名論』の記述では、室町幕府の政治、足利将軍家が官位につくことで、摂政や関白の実態がなくなり政治の実権を全て握っているとして、これを粗暴で明識がない「武人」が行う政治であると批判していた。一方で、徳川家康については、武器をもって天下を平定した後も皇室に仕えるような政治を行ったとして称賛していた。また『丁巳封事』では、ロシアの南進に対して備えをするべきだと語られ、実際には防具を整え、武器を修練するような時間も無く、名前だけのものになっている「武人兵士」たちに警鐘を鳴らしていた。ここから、藤田幽谷が政治について「武」に偏るものを批判しながらも皇室を敬う尊皇的な政治を肯定した姿を読み取ることができた。また、積極的な攘夷というよりは、外国の侵攻に対する国内の危機感を喚起させ、国防の意識を高める考えがみられた。

次に、藤田東湖『弘道館記述義』の記述については先学の指摘を踏まえつつ考察を行った結果、藤田東湖は「文」と「武」にはそれぞれ大小があるとして、「文」の大は、天地を治め全体を整えること、「文」の小は、書物を読み、蔵書することであることが把握される。また「武」の大は、大乱を耐えぬいてしずめること、「武」の小は、剣を撃ち、矛を奮うことであると述べていた。同じく他の記述では、「文」については、「尊皇」という言葉が出てきており、天を敬うことを述べていた。さらに政治を行い統治することについても「文」であると述べていた。「武」については、「攘夷」という言葉が出てきており、敵を威圧することや国防の必要性を説いていたことを読み取ることができた。

【結論】

以上を踏まえ、藤田幽谷が藤田東湖に与えた「文武」に関する考え方の影響を捉えると、「文」において、実権を握る上で皇室を敬う姿勢を大事にする「尊皇」の考えをもった政治を重要視していた点が確認された。また「武」においては、外国からの脅威に対して予備をし、国防を強化することを目的とする「攘夷」を重要視した点で影響を与えていたことが窺えた。ここから、藤田幽谷は、藤田東湖へ「文武」の双方で影響を与えていたことが結論付けられる。

ⅡA-3

新当流伝書にみられるわざに関する比喩表現についての一考察 —『兵法自観照』を中心に—

○軽米克尊（天理大学体育学部）

【緒言】武道は現在、競技として行われる側面も持っているが、その淵源は命を賭けた戦場で用いられた武術である。自身の駆使するわざに生死が常に直結する世界であったため、武術においてはわざの基となる心のあり方や身体の遣い方、そしてそれらの関係性すなわち心身関係は解決すべき中心的な課題であり、これらに関する高度な理論が展開されてきたとされている。これらはいわゆる「身体知」と呼ばれる事柄であり、そもそも言語化し、表現することが難しいものである。さらに、自身のわざを敵に知られることは危険を招くため、武術流派では徹底した秘密主義を敷いており、そのわざは「口伝」という言葉によって伝える方法が主であったとされる。その反面、口伝のみでは失伝する可能性も多分に考えられたため、流儀を継承できるほどの優れた弟子に対しては、伝えるべき内容を様々な表現で記述した「伝書」を与えた。本研究はこのような武術伝書にみられる記述表現の中でも比喩表現に着目する。

身体運動文化の伝承に関わる比喩表現の研究としては、生田久美子による「わざ言語」の研究が挙げられる。生田は伝統芸能などの分野において、指導者が学習者に直接語りかける比喩的な言語を「わざ言語」とし、説明の難しい微妙なニュアンスを簡単に表現できること、あるいは指導者と学習者の身体感覚の共有を促すものであることを指摘している（生田, 1987）。一方で、直接的指導ではなくても、スポーツの指導書に示されたわざ言語がこのような効果を発揮する可能性も示唆されている（倉島, 2007）。

武術伝書にみられる比喩表現については、近年、筆者らが研究を行っている。これまでに近代剣道や新陰流、直心影流を中心に研究を行っており、その中で、武術伝書にみられる比喩表現について、例外はあるものの、基本的には自らのわざを後世に分かりやすく伝承するための表現であることを論じている。

これらの先行研究における知見を踏まえ、本研究では近世剣術の中でも新当流という流派に着目する。新当流とは剣道史上最強の剣豪として名高い塚原ト伝から生まれた剣術流派である。流派成立の条件は、天才的な人物の出現、技法そのものが非常に高度であること、技法の体系と教習課程の整備の3つとされるが（中林, 1987）、塚原ト伝という突出した実力を有していた剣豪が創始し、現代にまで脈々と受け継がれている流派であることから、当流に高度なわざが伝承されていたことは疑いようがない。この新当流について余すことなく記した大部の書が天保13年（1842）に大月関平なる人物が著した『兵法自観照』である。本研究では、この『兵法自観照』を取り扱い、わざに関する比喩表現を抽出・考察することを目的とする。

【方法】『兵法自観照』にみられる比喩表現を抽出し、①何（の技）について書かれているのか、②何に譬えられているのか、③どのような性質を説明しているのかを Excel ファイルに打ち込んでいき、データを蓄積していく。そして、蓄積したデータについて考察を行い、新当流のわざに関する比喩表現の特徴を明らかにする。

【結果および考察】

現時点では、特に構えに関する比喩表現が多くみられた。また、声についても比喩表現が多くみられ、この点はこれまで研究を進めてきた他流派とは異なる点である。

なお、本研究は科学研究費 22K11692 の助成を得て行ったものである。

弓と鍼～日置流弓目録「当拳の事」について～

発表者 三保 翔平（仙台赤門医療専門学校）、
共同研究者 黒須 憲（東北学院大学）

【目的】身体を酷使用する武道において体調の維持管理は重要課題だったと考える。近代医学のない時代、武道修行者達は何の様に自己の身体を管理・調整していたのだろうか。1550年頃に成立したとされる『日置流弓目録』の項目に「当拳の事」とあり、鍼医師により教えを受けたという内容がある。このことから、日常的に鍼医師と密接に関わっていた事が推察される。武道と鍼術についての研究論文は現在見当たらない。資料としては馬術関係で馬の鍼灸治療やツボに関する古文書は比較的多い（『武田家伝五駄』等）。今回は『日置流弓目録』第四十七条「当拳の事」で述べられている内容から鍼術と弓術の関係について考察を行った。

【方法】「日置流六十ヶ条目録弁書」、「日置流弓印可目録」『日置の源流』（太陽書房刊）にある「当拳の事」の項を取り上げ、内容をまとめる。『中医臨床』第15巻第1号（1994年3月発刊）にある稲垣源四郎先生の記事も参考にする。それを踏まえて、中医学の観点、鍼灸臨床の観点を通して弓術と鍼術に通じる理合いを考察する。

【結果および考察】「日置流六十ヶ条目録弁書」、「日置流弓印可目録」によると、「当拳の事」は以下の特徴がある。①的にほどよく押手をあてがう為に当拳と呼ばれる。②的中が安定している射手を指す。③足踏によって狙いを調整する事を指すが、上半身の射術が安定している事が前提とされる。④鍼医師が患者の腹の虚実を見定めて鍼を刺す事と、矢通間（矢飛び）を考えて足踏みを定める事は同じである。⑤この理合いは師匠から教わるものではなく、自ら自得するものであり、身につけたものでなくてはどのようなものか理解できない、顕し難い技である。

鍼術において「患者の腹の虚実をみる」とは、腹部の硬さや柔らかさをみる事である。中医学における腹診は現代医学の腹診とは違い、腹部の緊張度や軟弱さのアンバランスを捉える事である。鍼術は捉えた緊張度や軟弱さのアンバランスを踏まえ、的確な深度・部位を定めて行われる。それはその状況、その患者によって千差万別であるため、状態を的確に捉える感度が求められる。鍼術最古の原典である『黄帝内経』九鍼十二原篇第一にも「小鍼の要、陳べ易く入り難し。」とあり、理論は単純だがそれを身に付け、実行する事は難しいとされる。弓術も鍼術も、極意はまさしく「陳べ易く入り難い」ものである。

【結論】「当拳の事」は狙いの教えて、戦場で距離も形も不定な敵に対して一度で狙いを定め（當拳）、しかも的中させなければならない（中拳）。これは鍼を打つ時に手で触り（當拳）、的確にツボを判断しなければならない（中拳）という理合いに通じるものである。この技は普段の稽古が重要で、正しく狙い、狙った所に矢を飛ばす訓練をしていなければ叶わないものである。鍼術の学習は訓練法を重ねるよりも、古今の医学書を研究し、多くの患者を診て実践を重ねるべきであるとされ（『養生訓』巻第六 扱医）、実際の加減は本物の患者を診なくては磨かれないものである。今回は技に関する内容だったか、今後は武道修行における体調管理と鍼術の関係について調査していきたい。

IIA-5

ハワイの超禅寺弓道の概念と歴史に関する一考察

○ Makoto Inouye (国際武道大学大学院), 大保木 輝雄 (国際武道大学),
Alexander Bennett (関西大学)

【背景および目的】オイゲン・ヘリゲルの『弓と禅』(1948)が出版されて以降、弓道が持つ宗教性(主に禅)という一面に魅力を感じる海外の人々が増えた一方で、弓道が技術から切り離されているものだと思う人も多くなった。武道の国際普及を考える上で、この両面的な影響を理解しなければならない。戦後日本を占領統治したGHQの指示により、戦争の要因と思われた武道と国体思想の関係を分離させるため、武道は体育スポーツとして位置づけられた。その結果、軍国主義的な要素を排除して競技化を進行させた。米国で戦時下の反日の勢いおよび日系人の強制収容と徴兵によって武道の実践は断絶したが、禁止令はなかった。故に戦後帰国した軍人、日系人と渡米した日本人が、日本とはかなり異なる条件と環境で武道を復活させた。それらの交流の場となったハワイ州で1980年に禅の修行を目的とした弓道を稽古する団体が出現した。それは本稿が取り上げる超禅寺弓道である。現在、競技成績につながる自然科学の研究はあるが、思想的な構造と英語圏の弓道実態についての研究は少ない。五賀友継が戦前ロサンゼルスでの弓道発展および弓道とアーチェリーの異種試合についての研究を発表しているが、戦後米国の弓道復活についての研究は極めて少ない。さらに、禅の修行として武道を実践している団体についての研究も少ない。そこで、ハワイの超禅寺弓道の概念と歴史を探ることで米国の武道と宗教の関係・捉え方をより明確にする必要がある。それを踏まえて、本研究ではハワイの超禅寺弓道の概念と歴史を探り、米国の武道と宗教の関係・捉え方をより明確にすることを目的としたい。この研究を踏まえて、武道の国際普及に貢献している指導者のために信頼性を保つための留意点などの情報提供が期待され、同時に瞑想のために弓道を普及し始めた米国の別の団体の比較点になる。

【方法】超禅寺弓道の発展およびその関係者に関する資料調査を行った。第一資料として須原耕雲の『出なおせ見なおせ』(1981)、ジャクソン・森澤の『The Secret of the Target』(1984)、および大森曹玄の『参禅入門』(1986)を参考にして、当団体の弓道概念を把握した。また、ケネス・クシュナーの『One Arrow, One Life』(2000)およびサヤマ・ダイアン『Ten Shin Myo』(2018)等を第二資料として用いて、指導を受けた側にも考慮した。そして、超禅寺系統の流れを明確にするため、全日本弓道連盟の弓道教本、安澤平次郎の『大射道』(1970)および阿波研造についての弓道書籍と比較して、その特徴と他の流れとの相違点を見いだした。

【結果および考察】大本山超禅寺は大森曹玄と天心・タノウエによって1972年に創立された。臨済宗の寺院として坐禅と接心を実施しながら、日本の伝統武道と工芸の稽古も実施していた。弓道は、1980年から須原耕雲とジャクソン・森澤の下で実施していた。クシュナーによると、当初の人数は20人程度だった。日系人は寺院での通常稽古の指導を担当し、定期的に日本人老師と因地の訪問を受けていた。森澤の『The Secret of the Target』(1984)では、ヘリゲルの『弓と禅』(1948)で紹介された禅の手段としての弓道を称賛し、大森の人間を形成する心身学道としての「剣と禅」(剣術の法定形)を媒介にして「禅と弓道」との関係を強調している。また、弓の実践については、須原耕雲の影響で全日本弓道連盟の射法と基本姿勢・動作との類似性が高いことが認識できる。しかし、現代弓道で見られない構えと行射中の所作も見受けられる。阿波研造の大射道教の「一射絶命」などの教えも記載されているが、須原の師匠であった安澤平次郎(阿波の高弟)との関係については明記されていない。超禅寺弓道は流れとして師弟関係で阿波とヘリゲルが実践していた弓道とつながっていると示唆される。また、出版による弓道に関する情報提供だけでなく、超禅寺の別院の設立などから米国での弓道普及に貢献していることも判明した。しかし、その特徴的な所作の由来および他の禅として弓道を実践している団体との関係や交流の有無は不明であるため、今後の課題としたい。さらなる研究が必要である。

日置流雪荷派弓術家太田雪應について

○松尾牧則（筑波大学）、小川貴子（筑波大学大学院）、萩原秀匡（筑波大学大学院）

【目的】日置流雪荷派の弓術家太田雪應の石碑が茨城県桜川市に残されていることがわかった。そこで本研究では、①日置流雪荷派が太田雪應まで伝えられた経緯を明らかにする、②太田雪應およびその周辺の人物について調査する、③太田雪應の所属した弓道団体について調査する、以上3点を中心に調査研究を進め、太田雪應に関連する弓道史を明らかにして今後の研究の一助とすることを目的とする。

【方法】太田雪應の石碑について現地調査を行い、碑文確認・解読とその情報を整理する。石碑・文献資料等による情報から太田雪應とそれに関わる人物や団体等を明らかにするとともに、太田雪應に至るまでの日置流雪荷派の伝系と、その後の伝系を確認する。それらにより、太田雪應とその周辺の史実を明らかにする。そして、太田雪應が弓道を通じて果たした役割を考察する。

【結果および考察】太田雪應の石碑は、桜川市岩瀬の太田歯科医院敷地内に残されている。太田雪應の石碑のほか、安達彦三郎の石碑（2基）、三原義彦の石碑が存在したことが明らかになった。太田雪應（本名：太田應輔）の子孫宅には、雪應に関する資料は残されていない。

「日置流雪荷派太田雪應先生碑」と刻まれた石碑の測定と碑文の解読を行った結果、昭和11年5月の建立とその寄附者・発起人、当時の岩瀬弓道会の役員等が明らかとなった。会長仙波宮内、副会長廣田三郎平、理事堀川辰之助ほか6名、顧問友常藤太、顧問堀川治平らの名が刻まれている。伝系は「吉田重勝（雪荷）→森直儀→森往直→森直平→森直忠→森直賢→森直雖→森歳直→栗原久左衛門直救→西郷十郎右衛門英親→栗原六郎右衛門直綏→富田儀助伯教→栗原矢柄直恭→栗原本蔵直義→種村深右衛門高德→安達彦三郎（高彦・雪楽）→太田應輔（雪應）」である。安達彦三郎（雪楽）の子孫宅に「安達先生之碑」（大正7年）が確認でき、桜川市消防第17分団車庫脇には「安達彦三郎翁頌徳碑」（昭和28年）が確認できた。「日置流雪荷派三原義彦先生碑」が桜川市犬田にあったことが判明したが、現存せず撤去済みであった。

【結論】太田應輔は、明治13（1880）年生まれで雪應と号した。茨城県岩瀬町に住み、安達彦三郎に日置流雪荷派弓道を学び、大正12年4月免許を得た。「安達先生之碑」には門人として太田應輔の名も刻まれている。大日本弓道会教師兼岩瀬支部長をつとめ、昭和20（1945）年、64歳にて没した。現在の太田歯科医院前庭に「日置流雪荷派太田雪應先生碑」（胡桃方載書）が現存する。その子孫宅には弓術資料等は残されていない。安達彦三郎は安達弥五郎門の子で、弘化元（1844）年に生まれ、高彦といい雪楽と号した。茨城県北那珂村（岩瀬町）の名主で二所神社氏子。笠間藩日置流雪荷派師範種村高德に学び、明治27年1月指南免許を受けた。大日本弓道会岩瀬支部顧問。大正14（1925）年没、法名は武徳院弓道雪楽清居士。安達弥太郎（彦三郎長男）、太田雪應ほか、200名以上の門人名が確認できた。大日本弓道会岩瀬支部は、大正12年4月24日に設立され、岩瀬支部長兼教師に太田應輔（雪應）、支部顧問に安達彦三郎、石川才三郎、支部理事に仙波宮内、仁平保次郎、廣田三郎平、三原彦一郎、堀川辰之輔、支部評議員に田山安之助、上野豊造、小池福次郎、倉品愛之助、軽部周吉、石渡與三郎が確認された。太田應輔は、同日付で大日本弓道会の「特別会員推薦」となっている。大正12年5月23日、岩瀬支部発会式が行われている。

ⅡA-7

【古流柔術】竹内三統流と本覚克己流の比較 — 類似する型・技法の存在について —

○発表者（新風館武藝研究所）河野敏博

【目的】

私は竹内流系統の伝統武藝を稽古する一人として、自身の修行の一環として過去に熊本の竹内三統流について調査・考察を行い、ある程度の成果を得た。現在は、やはり竹内流に縁があると言われる弘前の本覚克己流を調査・考察しているが、その過程で竹内三統流と本覚克己流には類似する型が存在することに気付いた。そして、斯かる視点で型の執行手順を比較したところ、取り口や効かせ方といった技法レベルでは、その類似点が幾つも存在していることが判った。

今回の発表では、日本列島の西端・熊本と本州最北端の弘前の古流柔術、いずれも型の数は100本に満たない中で、類似する型や技法が複数存在するという事実を報告する。

【方法】

竹内三統流と本覚克己流について、以下の方法で「型の執行手順」を明確化し、その類似点を抽出した。

1. 型の執行手順を示した古文書を精読する。
2. 精読した結果から個々の型についてその内容を考察する。＜机上検証＞
3. 考察した結果を実際に動作することで不自然な点を検出し、再考する。＜実地検証＞
4. 実地検証し、不自然な点を最大限除去した結果を流儀の「型」（復元型）と仮定する。
5. 復元型の中から類似する型や技法を抽出する。

【結果および考察】

1. 竹内三統流と本覚克己流の概要比較
2. 比較する対象範囲（2025年5月時点で解明できている型）
 - (1) 竹内三統流：全傳（約100本の型）
 - (2) 本覚克己流：初巻部分26本（全傳約80本の型の3割強に相当）
3. 類似性が顕著な型（例）
 - (1) 竹内三統流「腰返」と本覚克己流「腰車」（琢磨）・・・型の全体が類似
 - (2) 竹内三統流「小手返」と本覚克己流「朽木倒」（表組）・・・投げ技法の効かせ方が類似
 - (3) 竹内三統流「後返」と本覚克己流「三条手留」（裏組）・・・投げ技法の効かせ方が類似※ここに例示した型の他にも、型を構成する「技法」レベルが類似するものはある。
※ここに例示した型の、類似すると判断した技法は、現代の竹内流では確認できていない。

【結論】

熊本と弘前、遠く離れた二つの地域に伝承された柔術流儀。その二つの流儀には直接的な関連性は薄いと考えられるが、その流儀が伝承する型の中には類似するものが含まれている。

それぞれの流儀におけるこれらの型は流儀創設時点では既に流儀の体系に組み込まれていたことが概ね確認できるが、その起源については現時点では特定できていない。

本覚克己流は17世紀中盤に成立し、弘前藩とその支藩である黒石藩以外には流出されなかった流儀であるが、遙か九州の竹内三統流に類似の型や技法が存在している事実が何を物語るのか、現時点では判断に役立つ材料が発見できていない為、将来の課題である。

以上

ⅡA-8

琉球王朝時代の武技(唐手・那覇手)の源流探求

○早坂義文（古武道研究会）

【要旨】

琉球王朝時代に行われていた武技(唐手・那覇手)は、いつ、どこから伝わったのか、不明な点がある。それは、尚泰王の冊封の祝賀後に久米村で行われた芸能の奉祝があり、その後の祝賀会のプログラム「三六九(さんるうちゅう)並諸芸番組」に那覇手の原型の唐手、他に武器術の型が演武されたことが記載されている。これが現存する唐手・那覇手の型を示した唯一の資料である。そこで、この型の源流を探求するため調査をした。以下考察する。

【久米村に伝来した武技】

久米村は、安里川、久茂地川、国場川と海に囲まれた浮島で、14世紀後半に中国大陸などからの移民が住み着いて集落を作り、那覇の久米村と呼ばれた。その地区は、中国・日本・東南アジア諸国との貿易を行い、琉球国の大交易時代を支えた。久米村に福州館があり、福州柔遠に琉球館がある。相互に文化交流が生れ、唐手(福州少林武術)が伝来し、那覇手の源流が生れる。それが公の記録に現れたのが、慶応3年(1867)3月24日の久米村で行われた芸能の奉祝である。

そこで唐手、鉄尺、車棒、藤牌等の武技が演武された。

【久米村で行われていた唐手・那覇手の源流】

1 中国福州で行われていた南派少林派鶴拳

大正元年に来沖した呉賢貴(帰化し吉川姓)が、持ち込んだ鶴拳の極意書「武備志」の拳法四十八組合図の中に那覇手の技が画かれている。また、呉賢貴が伝えた白鶴拳の型に那覇手の型と同様の技法が散見される。

2 中国福州で行われていた南派少林羅漢拳

武備志に記載されている羅漢拳の型(套路)に猫洗面、砍竹、双月月、左右鉞、双禁槌、双付掌、風爐手など那覇手の型と同種の技法が散見される。

【久米村に伝来した唐手・那覇手の型】

型は、空手道の生命と言っても過言ではない。

1 三六九(さんるうちゅう)並諸芸番組に表記された唐手・那覇手の型

十三歩(セイサン)、ちしゃうきん(シンソーチン)、壺百〇八歩(スーパリンペイ)である。

2 久米村に伝わった唐手の共通型

剛柔流の十三(セイサン)、上地流の十三(セイサン)、金硬流の十三(セイサン)が三六九(さんるうちゅう)並諸芸番組に現れた共通の型である。

その他にも三戦(サンチン)は、上記流派の基本型である。

【結論】

以上のことから現在行われている剛柔流空手(那覇手)を中心とした空手道の型は中国大陸福建省で行われていた白鶴拳などの影響を受けた拳法である。

更に、明治期に東恩納寛量翁が改変し、その高弟、宮城長順が更に大陸で研鑽を積み完成された。そして、比嘉世幸らによって、今も多くの空手愛好家に行われ、日本の空手道として世界にひろまっている。

IIA-9

棚倉藩 伊原勝司の槍術修行について

○森本邦生（貫汪館）

【目的】棚倉藩の伊原勝司は明治元年の分限帳によれば槍術師役 中井半五郎の手助で十人扶持であった。伊原は嘉永7年（1854）に秋月藩士 間角彌に大嶋流槍術『大嶋流鎗鑑乾巻』と『大嶋流數目録』を授かっており、間の師である柳河藩の加藤善右衛門にも入門し安政5年正月に『大嶋流鎗鑑乾巻』を授かっている。

島田貞一は『槍と槍術』（島田貞一：槍と槍術，月間武道，113号：66-67，1976）に「柳河藩は早くから仕合剣術、仕合槍術の発達した土地であった。先に記した剣術の大石進もそこに出現した名手であった。そして槍術では幕末の槍術界にもっとも大きな影響を及ぼしたのが同藩大嶋流の師加藤善右衛門清房である。天保のころから清房の道場へは諸国からの訪問が絶えず、いずれもその仕合の精妙に舌を巻いた。」と記している。

伊原は安政2年（1855）5月から安政5年11月にわたる廻国修行の英名録である『金蘭簿』を残している。この『金蘭簿』を分析することによって、当時どの藩でどういう流派が他流試合を行っており、また加藤善右衛門の槍術界に対する影響がどの程度及んでいたのかを明らかにしたい。

【方法】『金蘭簿』に記されている試合の年月日、藩名、師範名、門人数を表にまとめ、各藩でどの程度槍術の他流試合が行われていたかを明らかにする。また日本武道学会第41回大会で発表した「大嶋流槍術師範 加藤善右衛門 『旅弟子姓名録』についての考察」で扱った加藤の他藩の門人を記した『旅弟子姓名録』によって『金蘭簿』に記された者の内、加藤善右衛門に教えを受けた者を明らかにする。

【結果および考察】

1. 廻国修行の行程

『金蘭簿』によれば伊原勝司は以下の行程で廻国修行をしている。

安政2.5.15～7月秋月藩→7.18-19久留米藩→7.22蓮池藩→7.24-25柳河藩→8.2熊本藩八代領→8.5-6島原藩→8.8佐賀藩諫早領→9.22久留米藩→10.4秋月藩→11月森藩→11.8臼杵藩→11月-安政3年2月土佐藩→3.18宇和島藩→3.22臼杵藩→3.25岡藩→（柳河藩で稽古）→5.8-12熊本藩→（柳河藩で稽古）→安政4.1.13-14京都→2月-6月（柳河藩で稽古）→7.18中津藩→7.24秋月藩→（柳河藩で稽古）→安政5.1.23：秋月藩→2.6長府藩→2.9-11長州藩→2.14-20津和野藩→2.24浜田藩→2.29-3.2広島藩→3.6-11福山藩→3.14-16：岡山藩→3.19丸亀藩→3.23龍野藩→3.29浪花玉造騎士→4.6-17京都所司代与力→11.13-15白川藩

訪れた藩・領・浪花玉造騎士・京都所司代与力は柳河藩を除き、さらに重複を除く実数で26になり、記された師範は重複を除く91名である。

2. 柳河藩槍術師範加藤善右衛門の影響

伊原勝司が廻国修行で試合した藩・領・浪花玉造騎士・京都所司代与力の内、流派の師範は91名であり、その師範のうち加藤善右衛門の『旅弟子姓名録』によれば加藤の門人は11名である。数としては多くはないが、訪れた26か所の内8つの藩・領で加藤善右衛門の門人が師範となっている。全体の約3割の地域で加藤の門人が師範となっている。

【結論】

棚倉藩の伊原勝司が廻国した地域の内、加藤善右衛門に教えを受けた師範がいる地域は約3割であり加藤善右衛門が西日本の槍術界に及ぼした影響が少なくなかったことが確認できた。

松浦静山の剣術論に関する一考察：易の思想との関連に着目して

○堀川 峻（環太平洋大学）

【背景及び目的】

平戸藩第9代藩主であった松浦静山(1760-1841)は、心形刀流の名手として知られており、彼の著作は近世後期を代表する剣術論の1つとして注目されてきた。先行研究では、それらの著作から静山の剣術観や平戸藩の武芸教育等の詳細が明らかにされているが、富永好松が少々触れているように、静山の剣術論にみられる内容は「平戸新流」と称されるほど、本家である伊庭家に伝承されてきた心形刀流とは異なる部分が存在したことも知られている。しかし、静山の剣術論が伊庭家に伝わる心形刀流と比して、どのような特徴を有しているのかを解明した研究は管見の限りなく、この点を明らかにすることは静山並びに心形刀流に関する研究を更に進展させることにつながる。そして静山の論には、古代中国に成立し、その後ト占の書や儒学の「五経」として継承された『易経』からの影響が多々みられ、これは静山の剣術論の特徴を解明する上でも非常に重要な点であると考えられる。以上から、本研究では特に『易経』との関連に着目して、静山の剣術論が有する特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

【方法及び史料】

本研究では静山の著作の中でも、先行研究で多く取り上げられてきた『剣攷』『心形刀流目録序辨解』『剣談』のみならず、これまで内容の分析が詳細に行われてこなかった『四剣問答并或問』を取り扱う。『四剣問答并或問』は心形刀流の技術の中でも「一子不伝(例え実子でもふさわしくない限り伝承されない)」とされた「四剣(雷心刀・風心刀・無一剣・平心刀)」について、静山が問答形式で解説したものである。上記の史料を考察の中心として扱うことで、静山の剣術論にみられる特徴を改めて解明し、加えて『本心形刀目録』や『心形刀流目録集成』等、伊庭家の流祖や先師が残した伝書との比較を併せて行うことで、その特徴が静山特有のものであるのかについて明らかにしていく。

【結果および考察】

静山は『四剣問答并或問』において、「四剣」のうち「雷心刀」と「風心刀」に関する解説を、『易経』『説卦伝』の「天地定位、山澤通氣、雷風相薄り」という文章に依拠して行っていた。具体的には、立ち合いの場における自身と敵の関係を「天地」に例えて、山から沢へ、沢から山へ氣が通るように、自身と敵の間でも「雷心」と「風心」が互いに迫り合うようにすることが重要であると説いていた。その後も、静山は「四剣」に関わる解説に『易経』の内容を多く引用しており、易の思想がそれらを説明する際の理論的な基盤となっていた。さらに静山は、上記『易経』からの引用は、これまで剣術の師伝では聞いたことがないと明記しており、この解釈が静山独自のものであることも明らかになった。

また『四剣問答并或問』の中では、流祖の是水軒より伝わる「平心刀・八満」の図に関する解説も行われており、そこでは「八満」を『易経』の中心的な概念である「八卦」に例えて説明していた。具体的には、「八卦」が東西南北、四方八方にあるように、「平心」もあらゆる方面に満ちていることを理想とし、それを「八満」と表現していると解説していた。

『目録集成』等にみられる流祖・先師が残した伝書の中では、「八満」に関してこのような解説はみられず、この点も是水軒から伝わる「平心刀・八満」の図を、静山が『易経』に依拠して独自の解釈を行っていた可能性が示唆された。

ⅡA-11

幕末期の武芸観と武芸教育に関する研究

○大澤誠（皇學館大学大学院博士後期課程）

【背景及び目的】

近世の武芸流派に関する研究は、個々の流派の詳解を始め、多方面から論考が行われている。近年、こうした研究の多くは心法論を対象としており、とりわけ諸藩での武芸教育の実態解明などにおいて十分な研究成果を見ることができる。その一方で、幕府の武芸教育に関する事蹟について取り上げた事例は少なく、武芸鍛錬の実相と、そこに内在する武芸思想との関連性については、ほとんど触れられていない。

現段階において、近世における武芸鍛錬の実施については、従来の精神修養を基軸とした「儒教的な武芸観」から、幕末期では対外的な危機感に伴い、次第に「実践的な武芸観」へと転換したとされる。しかし、この儒教的な「武」が幕末期において如何に受容され、以後の武芸鍛錬に影響を与えていたのかについては判然とせず、「武」の認識については、幕府、諸藩、それぞれの観点から詳細な整理が求められる。本研究では、幕末期の武芸に対する認識と幕府を始めとした武芸教育に着目し、近世の武芸観の変遷と、実際に修練された武芸鍛錬との相互関係について明らかにすることを目的としている。

【研究方法】

本研究では、江戸幕府における武事に関する記録と、幕末兵学者における武芸観の事例として窪田清音に関する著書を主な研究対象とする。一連の検討の中で明らかにするべきは、(1)近世における「武」の趣意と武士教育、(2)幕府の武芸政策における教育方針と在来武芸（剣・弓など）の認識、(3)幕末兵学者の武芸観と修行態度、以上3点をそれぞれ踏まえる必要がある。まず(1)については、先行研究の整理の中で生じた「武」への認識に関して、幕府、世相の双方から解釈を試み、近世の「文武」に対する理解について、先行研究、諸史料などから検討していく。その上で、(2)では幕府の武事に関する事蹟を挙げ、近世を通じた履行状況と、それら諸武芸に対する認識などから整理を行い、幕末期での武芸教育の方針について確認していく。そして(3)では、実際に幕閣の武芸者が、どのようにして武芸を捉え、武芸教育に従事したのかを明らかにするため、幕末兵学者であり講武所役人でもあった窪田清音を事例の対象とし、従来の修養論の解釈、及び幕府の武芸観との整合性について総合的に見ていきたいと考える。

【結果及び考察】

幕末期における「武」の認識について、幕府は文武奨励に基づいた儒教的な観念を護持し、旧来の武芸は「武士身分における素養」として認識し、その上で海防や操練などの実戦的な武備に向き合っていたといえる。これに対して、武芸者は旧来の武芸を含め、武芸を「対外危機における実戦・実用的な活用」として、より実利の追求に専念し、その上で実戦的な武備に向き合っていた。双方ともに武芸の実践化という方針に相違はないが、認識としては、幕府は旧来の「尚武」としての素養から逸脱するものではなく、反対に武芸者は「尚武」を前提とした上での「軍拡」という視点において、それぞれ重要視する点が異なっていたものと考えられよう。

夕雲流剣術に関する研究 —真理谷円四郎の剣術論に着目して—

○柴田 直生（筑波大学大学院）、酒井 利信（筑波大学）、大石 純子（筑波大学）、

【背景と目的】夕雲流は十七世紀中頃に針谷夕雲（1592-1662）によって創始され、技の狡智性を否定し「心」の問題を重視した流派として知られている。夕雲流にはその代表的な人物として、初代の針谷夕雲や、二代目の小出切一雲（1633-1706）、そして小出切一雲の高弟として印可状を授与され、時には一万人の門弟を抱えたとされる真理谷円四郎義旭（1660-1742）がいる。これまでの研究では、文盲であった夕雲に代わってその思想を著した一雲の伝書に注目し、「畜生心」や「相討」・「相ぬけ」といった思想や、一雲がこれらを説明する枠組みとして儒教・老荘思想を用いていたことが指摘され、夕雲流の思想の主要な側面が明らかにされてきた。しかし、夕雲から円四郎に至るまで、夕雲流が興隆した時代を通してこれを捉えようとした場合には、一雲自身の考えやそこから夕雲の思想を読み解こうとした知見は確認されるものの、これらの思想が円四郎へどのように受け継がれていったのかという思想の継承・展開については、十分に分析が進められてこなかったといえる。

また武道学研究においては、ある特定の流派の思想を把握しようとする際には、心法と並んで技法的な側面からも考察が進められてきたが、こと夕雲流に関しては、その特徴を心法の側面からのみによって検討がなされ、技法的な観点からこれを検証したものはみられない。本論における問題の所在はこの辺りにあるといえ、これらの背景を鑑み本研究では、真理谷円四郎の剣術論について技法と心法の両側面から検討を行い、その特徴や夕雲・一雲との思想的関連や相違について明らかにすることを目的とする。

【史料と方法】本研究では川村弥五兵衛秀東著『夕雲流剣術書 前集』（1723）『中集』（1728）を収録した富山県立図書館蔵『無住心剣術三代之伝法辞足為経法』（1834）を取り上げる。当書は円四郎の弟子である川村弥五兵衛ら四名がその教えを綴ったものである。

研究方法としては、「先生云」として語られる円四郎の思想の内、心法と技法に係る内容について抽出し、その詳細を読み解きつつ、夕雲・一雲との関連が示唆される内容については両者との相違を踏まえて考察を行っていく。

【結果および考察】当書では夕雲の言葉を引用しつつ、それに対する円四郎自身の考えや解釈が加えられる形で思想が展開されており、「我等ハ夕雲をつぎ申べし」と語ったように、円四郎が一雲よりも夕雲から影響を受けていたことが確認された。また円四郎は、他流によく見られる儀礼化した立居振る舞いや十分な装いを以て勝負に臨む在り方について、歴史的な背景を踏まえて批判を加え、日常の延長として戦いに臨む心構えを説いていた。ここには円四郎が勝負の本質を真に捉えようとする姿勢や、実戦的かつ即応的な態度を一貫して重視していた姿が確認された。また、刀法（技法）に関する記述に注目すると、相手を倒すためには敵の一毛も斬らぬような静かで柔らかな太刀使いを用いるべきだとし、具体的には、片手で刀を引き上げ、その重みを利用して振り下ろすことを宗旨とした。ここには、円四郎が刀に意識を向けることなく、剣術の本質や勝負の道理を修得することを第一義としていた点に注目でき、これまでに夕雲流で語られてきた「静重」で「柔和」な内面の在り方を望む思想が実際の技法に落とし込んで展開されていた点が明らかとなった。

そして、これを従来の近世剣術思想の研究の動向と照らし合わせてみると、円四郎の技法は他流にて多く見られる刀捌きや身体運びといった動作的側面に主眼を置いたものとは一線を画しており、内面の在り方と不可分に結びついた独自の剣術観を示していると推察された。

ⅡB-1

生成 AI を用いた中学校剣道授業の動向分析 —2017 年以降の指導法に着目して—

○加藤純一（皇學館大学）

【目的】現行の中学校学習指導要領下、学校教育における ICT 導入は進展し、一人一台端末による多様な学習指導が実践されている。保健体育の武道（剣道）においても、指導の工夫が重ねられてきた。しかし、体育授業における ICT 活用は限定的な傾向にあり、その先の教育的活動の模索が課題である。一方、初等中等教育段階での生成 AI の利活用が始まり、体育授業への導入も必至である。筆者は、将来的な生成 AI の体育（剣道）授業への効果的な導入に資するため、2017 年以降の中学校剣道授業における指導法を分析・明確化し、これにより映像分析を超える ICT 活用の可能性と、新たな剣道指導法構築への示唆を得ることを目指している。そこで、本発表では 2017 年以降の指導法の動向を同定することを目的とした。なお、2017 年以降とは、現行の学習指導要領告示以降を指す。

【方法】本研究では、中学校剣道授業における指導法を、2017 年を境として比較を行った。具体的には、2017 年以前と 2017 年以降について、中学校の剣道授業に関連する学会発表抄録（主に日本武道学会）、原著論文（主に『武道学研究』）、雑誌掲載の剣道授業実践報告（月刊『武道』）より関係の資料を収集し、生成 AI（Gemini Advanced 2.5Pro）を用いて剣道指導法に関する記述内容を精査した。これにより 2017 年以前と 2017 年以降（現行学習指導要領告示以降）の指導状況を比較検討し、2017 年以降の剣道指導法に見られる特徴を抽出した。

【結果および考察】分析の結果、「目標設定の違い」「学習プロセスにおける生徒の役割の変容」「指導法・教材の多様化」が抽出された。「目標設定の違い」では、2017 年より前では剣道の伝統的な技術や基本動作の習得、戦術的な理解の向上に目的が置かれる傾向があり、思考力や判断力も結果として養われることは期待されていたが、それ自体が授業の中心的な目標として意識される傾向にはなかった。一方、2017 年以降では学習指導要領で明確に示された「思考力・判断力・表現力」などの資質・能力の育成が授業の中心的な目標として位置づけられ、剣道の技術指導はこれらの能力を育むための手段として捉え直される傾向にある。

「学習プロセスにおける生徒の役割の変容」では、2017 年より前では教師が専門的な知識や技能を生徒に伝達し、生徒はそれを受け入れるという比較的教師主導型の学習プロセスが中心で、教師から与えられた課題に取り組む傾向にあった。一方、2017 年以降では生徒が「自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫する」という主体的な学習者としての役割が強調され、教師は生徒の思考を促すファシリテーターとしての役割を担う傾向にある。「指導法・教材の多様化」では、2017 年より前では基本稽古、タスクゲーム、限定的な試合などを主とする、技能の効率的な習得や戦術理解を目指す傾向にあった。一方、2017 年以降では「知識の構造化」を促す問いかけ、「形」の学習による伝統文化の理解と身体知の深化、「アダプテーションマッチ」等による共生的な学びと主体性の育成、ICT 活用による客観的な自己分析と表現力の向上など、より多様な指導法や教材が導入される傾向にある。

【結論】現行の学習指導要領以前では、「何を教えるか」と「どう効率的に教えるか」に主眼が置かれていた傾向にあり、それ以降では、それらに加えて「生徒が何を学び、どのような力を身につけるか」、「生徒自身がどのように学ぶか」という点への意識が剣道授業においても高まり、それが指導法全体の設計思想に決定的な影響を与えていると考えられる。

高校生の武道授業への関心低下の要因分析 -体育授業との比較から-

○杉田菜摘（大阪教育大学大学院）、石川美久（大阪教育大学）、松井高光（帝京科学大学）

【目的】本研究の目的は、高校生が武道授業及び体育授業に対して抱いているコミュニケーションの充実度、不安度の心理的指標を測定し、両者の違いを明らかにすることである。

【方法】本研究では、柔道部を有する高等学校に在籍する1年生160名を対象に、質問紙法による量的調査を実施し、データを収集した。質問紙は研究目的に即して①コミュニケーションの質、②授業に対する不安度を独自に作成し、5件法で回答させた。160名のうち、有効回答が得られたのは145名であった（有効回答率90.6%）。分析手法には、二元配置分散分析を用いて授業種別と性別の主効果および交互作用を検討した。また、質問項目の内的一貫性を確認するためにCronbach's α 係数を算出し、いずれの下位尺度も0.80以上の信頼性が得られた。加えて、自由記述欄を設け、定性的データの内容分析も補助的に実施した。なお、分析にはエクセル統計を使用し、有意水準は5%とした。

【結果および考察】コミュニケーションの質の比較では体育と武道では、有意な差が認められた（ $F=53.191$, $p<0.01$, $\eta^2=0.160$ ）。効果量から授業種別（体育か武道か）はコミュニケーション度に与える影響が大きいことが明らかとなった。単純主効果の検定および多重比較検定の結果、被験者間因子（男子/女子）の影響は有意でなかった（武道： $p=0.156$, 体育： $p=0.590$ ）。一方、被験者内因子（体育/武道）の主効果は男子・女子ともに有意であった（男子： $p<0.01$, 女子： $p<0.01$ ）。Bonferroni補正を用いた多重比較の結果、授業種別に関して、武道では女子の方が男子に比較して有意に高い値を示した（ $p<0.05$ ）。性差に関しては、男子では体育のスコアが武道のスコアよりも有意に高かった（ $p<0.01$ ）。女子でも同様に、体育が武道よりも有意に高かった（ $p<0.01$ ）。武道は比較してコミュニケーションが抑制されやすいが、女子は男子よりもその中でも積極的に関わろうとする傾向が見られる。よって、武道授業における男子の「対話的な学び」を意識的に引き出す工夫が必要であり、女子にはその良好な傾向を活かした展開が期待できる。

授業に対する不安度では体育と武道では、有意な差が認められた（ $F=41.660$, $p<0.01$, $\eta^2=0.130$ ）。効果量から授業種別（体育か武道か）は不安度に与える影響が大きいことが明らかとなった。単純主効果の検定、および多重比較検定の結果、被験者間因子（男子/女子）の影響は武道のみ有意であった（武道： $p<0.01$, 体育： $p=0.211$ ）。一方、被験者内因子（体育/武道）の主効果は男子・女子ともに有意であった（男子： $p<0.01$, 女子： $p<0.01$ ）。「体育」が「武道」よりも対話的学びがしやすく、不安が少ないことが明らかになった。Bonferroni補正を用いた多重比較の結果、授業種別に関して、武道では女子の方が男子に比較して有意に高い値を示した（ $p<0.01$ ）。このことから、女子の方が武道授業に不安感をもっていることが分かる。性差に関しては、男子では武道のスコアが体育のスコアよりも有意に高かった（ $p<0.01$ ）。女子でも同様に、武道が体育よりも有意に高かった（ $p<0.01$ ）。武道授業は、生徒にとって「不安を感じやすい環境」であるとともに、女子にとって、武道はより高い心理的ハードルを伴う活動であることが考えられる。

【結論】本研究では武道授業は体育授業に比べてコミュニケーションが抑制されやすく、不安度が高い傾向にあることが確認された。これらは武道授業における身体的・精神的ハードルの存在、成功体験の不足、対話的要素の希薄さ、そして評価構造の硬直性など、複数の要因が関心低下に寄与していることを示している。また性別や経験の違いにも一定の影響が認められ、特に女子生徒が身体接触や対戦構造に対して不安を抱きやすい点が明らかになった。

ⅡB-3

障害者への剣道指導を通して見える武道の可能性 ～競争社会から共創社会へ～ その8 注意力の変化に焦点をあてて

○三苫保久（滋賀県立大津清陵高等学校），東山明子（大阪商業大学）

【目的】発表者らは，障害者，留学生，不登校生，通信制高校生等への武道指導を通して共生・共創社会の実現を目指す「びわこバリアフリー剣道クラブ」（以下クラブとする）を主宰し10年目を迎える。本研究では，剣道の指導前後における，注意力の変化に焦点をあてて，障害者クラブ員と健常者クラブ員との比較を通して，武道の可能性を検討する。

【方法】健常者と障害者からなるクラブ員に対し，稽古前(Pre)と談話後(Post1)と稽古後(Post2)の3つのタイミングで測定した。注意力の測定は，注意力計（稲葉人間工学研究所製）を用いた。テスト時間は20秒間で，ランダムに提示される0から9の数字から，指定数字2，5，8にのみ反応して鍵を押す。数字提示速度は2.0Hzとした。ただし，視覚障害者は20秒間，1.4Hzで行い，補助者が読み上げる数字を聴いて反応して鍵を押すこととした。指定数字の提示回数…S，指定数字を見逃した回数…P，指定数字以外への反応回数…Mとして正答率を求めた。正答率＝ $\{[2S - (P + M)] / 2S\} \times 100$

【結果】健常者の注意力成績は，稽古前(Pre)と比べて，談話後(Post1)，稽古後(Post2)ともに上昇した。障害者は，有意な差はみられなかったが，数値的には稽古前と比べて，談話後は下降し，稽古後上昇していた。全体では，有意な差はみられなかった。

表 注意力成績（正答率）

集団（n）平均年齢±SD	稽古前	談話後	稽古後
健常者(10名) 57.5±13.3歳	67.6±28.6	72.0±15.9 †	81.9±14.3 †
障害者(9名) 68.2±3.2歳	49.3±33.8	46.3±21.6	57.3±20.7
全体(19名) 62.7±11.1歳	58.9±31.7	60.3±22.8	70.2±21.3

稽古前 対 談話後，稽古後 0.05<†<0.1

【考察】健常者は，稽古前と比較して，談話後，稽古後ともに注意力成績が漸増する傾向がみられたことから，談話や武道の稽古が適度な覚醒刺激となり，注意力が向上する傾向にある。一方，障害者は，稽古以前の日常生活の中に常に転倒や衝突や人間関係の困難さなどがあり，いわば日常生活そのものが緊張の連続であるといえるが，いつものクラブに集い，理解し合い受け入れてもらえる仲間との談話により，それらの不安や緊張が解かれて若干弛緩し，その後の剣道等の武道稽古で，注意力が上昇するきざしが伺える。障害者にとっては，日常の不安や緊張から一旦弛緩し，日常とは異なる武道稽古による活動的な刺激を受けることが，閉鎖的になりがちな生活に良いリズムを生み出しているのではないかとと思われる。以上から，本クラブの活動（談話と武道稽古）が，健常者にとっても障害者にとっても，負荷を与えるものではなく，むしろポジティブな影響を与えている可能性があることが推察される。

【謝辞】クラブ会長山上良子様，同師範瀧上博昭様に協力いただきました。感謝します。

空手組手競技における指導者と競技者の作戦意識の関係

○大徳紘也（日本体育大学）、西山哲成（日本体育大学）、
大石健二（日本体育大学）。

【目的】空手組手競技は相対する2名の選手が突き、蹴り、受けといった攻撃並びに防御技術により試合を展開し、有効な技に与えられる得点数によって勝敗を決する競技である。試合を有利に展開し勝利に導くためには、各技術を活用する具体的な局面を想定するとともに、複数の技術を組み合わせた作戦の立案が重要であると考えられる。作戦の立案に関する情報として、指導者並びに競技者の作戦に対する意識の特徴を明らかにすることは、作戦立案及びコーチング実践において有効であることが考えられる。本研究では空手組手競技における作戦意識について、同じ所属である指導者と競技者間における作戦意識の一致または不一致の様態を明らかにするための情報分析を行い、作戦に関するコーチング実践に有効な知見獲得を目的とした。

【方法】分析対象は一般社団法人全日本学生空手道連盟（以下学空連）に所属する大学空手道部指導者1名（指導歴10年）及び組手競技者15名（競技歴12.9±2.0年）とし、学空連公式大会前日に空手競技に関する意識調査を実施した。意識調査はオンラインアンケート（Google フォーム）を用いて行い、試合局面別の作戦意識について選択回答問題47問、自由記述回答問題3問を設定した。指導者と競技者の作戦意識に関する情報を分析するために、選択回答問題は5件法を用いて実施し、自由記述による回答はKH Coder3を用いた計量テキストマイニングによる分析を実施した。

【結果および考察】試合局面別の作戦意識に関する選択回答問題について、試合終盤における「試合時間を意識するか」という質問に対し指導者と同じ意識度5（とても意識している）の回答を示した競技者は93.3%（14名）と高い結果であった。試合終盤の作戦意識は、「失点を防ぐ」、「同点・逆転をする又は防ぐ」という質問について指導者と競技者の回答内容が80.0%以上一致する結果であった。試合終盤の作戦意識は、守備に関する項目に絞られやすい特徴があると考えられた。一方、試合序盤及び中盤の回答内容は、先取点獲得及び得点獲得に関する項目や、相手との位置関係に関する項目が一致したが、試合終盤に比較し少ない件数であった。自由記述問題の回答内容について、試合序盤・中盤に確認された競技者の回答における頻出語は、「相手」の出現回数が最も多い結果を示した。一方、試合終盤では「自分」の出現回数が最も多い結果を示した。指導者の回答における頻出語は試合序盤及び終盤に、「相手」の出現が確認されたが、「自分」を含む自チームを直接示す単語は確認されなかった。以上の結果、試合終盤ほど指導者と競技者が意識する作戦項目は類似した様態を示す特徴が確認され、意思疎通がしやすい局面であることが考えられた。競技者は相手の状態だけではなく、自身との攻防の関係性を考えた作戦を意識する特徴があることから、作戦意識に関する客観的情報を収集、活用することで競技者の作戦の考え方に関する詳細な情報を知ることができると考えられた。

ⅡB-5

異なる素振り動作が剣道初心者の打突動作に及ぼす影響

○椿 武（神戸親和大学）

【目的】

これまでに、剣道熟練者と剣道初心者の打突動作を比較検討した研究は数多く行われている。筆者もこれまでに剣道初心者を対象に、気剣体の一致した打突動作習得を目的とした研究に取り組んでいるものの、効果的な練習方法の考案には至っていない。剣道熟練者と剣道初心者の打突動作においては、剣道熟練者は打突（竹刀で打突部を捉える）後に右足の踏み込み動作を行うのに対して、剣道初心者は右足の踏み込み動作後に打突を行う。この動作順序のズレについては、筆者の研究において竹刀の長さの工夫によって、踏み込みから打突までの時間差の短縮は認められたものの、熟練者のような打突動作の順序（打突→踏み込み）には至っていない。特に、大きく振りかぶりすり足で打突動作を行う条件の際に打突と踏み込みの時間差が顕著に大きくなることがこれまでの実験で散見された。また、大きく振りかぶった打突動作と実践的な小さく振りかぶった打突動作では、上肢（肩関節、肘関節、手関節）の使い方、特に肩関節と肘関節の動作に大きな違いが見られた。

剣道初心者を研究対象とする場合、直前の練習内容がその後の活動に大きな影響を与えるものと考えられる。そこで本研究では、打突動作の実験を実施する直前に、剣道の練習で一般的に行われる素振りを2種類実施し、素振りの方法を変えた際のその後の打突動作への影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象者は、剣道経験のない男子大学生3名とした。本研究で行った素振りは、①3拍子での素振り（前方への素振りのみ）：「中段の構え→その場で振りかぶり→振り下しと同時に前方移動→後方に下がり中段の構えに戻る」を繰り返す素振り、②2拍子の素振り（前進後退素振り）：「振りかぶりと同時に前方に移動→振り下しと同時に左足の引き付け→振りかぶりと同時に後方に移動→振り下しと同時に右足を引き付け」を繰り返す素振りとした。

打突動作の測定は、①任意のタイミングで大きく振りかぶった面打突、②任意のタイミングで小さい面打突、③光刺激提示後に素早く小さい面打突の3条件とした。測定には、モーショキャプチャシステム Miquis M1（アーカイブティップス社製）及びフォースプレートを用いて計測を行った。

【結果および考察】

その結果、打突と踏み込みの時間差が大きくなった要因として、剣道初心者はすり足動作の初期に左右の股関節の屈曲動作が生じ、腰が後ろ側に下がる様相が見られた。また、上肢において、初心者は肘関節の屈曲伸展動作で竹刀を前方に送り出すことで打突動作を行っていた。この上肢の動作によって、一時的にテイクバックしたような状況が起こり、それによって打突時間の延長と気剣体の不一致（打突と踏み込みの時間差）が増大したと考えられた。

※本研究は、JSPS 科研費（課題番号：21K11535）の助成を受けたものです。

中学校柔道授業における「柔道演武」の実践

川染拓海（大阪教育大学大学院），由留木俊之（岸和田市立山直中学校），
堀田孝起（大阪教育大学大学院），石川美久（大阪教育大学）

【目的】平成 29 年 3 月に告示された新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。柔道は対人的な身体接触を伴う運動であり，その動作は複雑であることから，安全性の確保が重視される一方で，技能の習得や内面的な学びの深まりに課題があるとされてきた。そこで本研究の目的は，「主体的・対話的で深い学び」の観点から開発した「柔道演武」を授業に導入し，その実践が学習者にどのような影響を与えるかを明らかにすることとした。

【方法】本研究では，中学校の柔道授業において，自由練習（試合形式）の前に「柔道演武」を導入したグループ（A 群）と，導入していないグループ（B 群）の学習成果を比較し，教材の有用性を検証した。被験者は研究協力校に在籍する中学 1 年生 66 名とし，柔道の受け身技術を十分に身につけ，安全に授業が行えると判断された者とした。授業の流れとしては，1 回目にオリエンテーションを実施，2～6 回目で受け身と基本的な投げ技，防御姿勢の作り方について指導した。その後 A 群では，7・8 回目に「柔道演武」，9 回目に自由練習を行った。B 群では，7 回目に技と防御姿勢の復習，8 回目に自由練習を行った。単元終了後，24 項目のアンケート（4 段階評価）を実施し，調査項目は技能，態度，安全意識など多面的な観点から学習成果を調査した。分析には得られたデータに対して SPSS を用いた独立サンプル t 検定を行った。

本研究で実践した「柔道演武」は，3 人 1 組で試合形式の演武台本を作成・実演することで，生徒らの「思考力・判断力・表現力」の育成や，協働的な学びを深めることを期待した活動である。「柔道演武」の授業では，選手役 2 人審判役 1 人の 3 人グループで話し合いを行い，グループ内で技を試しながら台本を作成させた。成果発表を生徒同士で見て，評価し合う流れで授業を展開していく。演武内容は，既習した投げ技に限定し，あらかじめ決められた技で投げられるため安全性にも配慮されている。

【結果および考察】24 項目のうち，「危険な状況で自分の身を守れた」「相手の技に落ち着いて対処できた」の 2 項目において有意な差が確認された（ $p<0.05$ ）。さらに

「柔道演武」の実施により，特に安全に対する意識の向上や，実践的状況での冷静な対応力に効果がみられた。これは事前に台本を作成し，あらかじめ投げられることへ恐怖感の軽減や試合形式により他者と共に演じるという構造の中で，投げ技に対する受け方の「思考・判断」や受け身の動作における身体の使い方への理解が深まったと考えられる。

【結論】対人的な技能に対する不安感や事故への配慮が必要とされる中学校柔道授業において，「柔道演武」の導入は，投げ技に対する「受け」の技術が身につく，安全性の向上につながる教材であることがいえる。

今後は「主体的・対話的で深い学び」に向けて，本教材のさらなる改善や，他学年・他校での実践を通じた再検証を行い，より汎用性の高い指導モデルの構築を目指したい。

ⅡC-1

投げ込みを用いたタバタ式トレーニングにおけるトレーニング法の探索

○ 長谷 晃希 (中京大学)・深澤 由杜 (中京大学大学院)
三宅 恵介 (中京大学)・大家 利之 (中京大学)

【目的】

本研究では、Tabata et al., (1997) の研究を基にして、様々な運動様式で 20 秒間の全力運動を 10 秒間の休息を挟み 8 セット程度実施するものをタバタ式トレーニングと定義する。我々は、柔道に特異的な投げ込みを用いたタバタ式トレーニングにおいて、受の人数を 2 人にした場合、施技数が増加し、有酸素性および無酸素性エネルギー供給機構に負荷をかけることができることを明らかにした。しかし、実施には十分な人数を確保する必要があることや、受と取を交代しながら行う際の時間的効率が悪いという課題があることが考えられる。そこで、本研究は、投げ込みを用いたタバタ式トレーニングにおいて、時間的効率を高めつつ、有酸素性および無酸素性エネルギー供給機構に負荷をかける方法を検討することを目的とする。具体的には、取と受を 1 セットずつ交互に実施する方法を検証した。

【方法】

研究対象者は成人男子軽量級選手 (60kg 級, 66kg 級, 73kg 級) 12 名であった。対象者は、20 秒間の全力運動を 10 秒間の休息を挟んで 8 回行う、投げ込みを用いたタバタ式トレーニングを、① 交互条件、② 受 1 人条件の 2 条件で実施した。測定項目は施技数、最高心拍数、平均心拍数、最高血中乳酸濃度であった。測定した項目の比較には対応のある t 検定を行った。有意水準は危険率 5%未満とした。

【結果および考察】

タバタ式トレーニング中の最高心拍数は、交互条件は受 1 人条件と比較して有意に高かった ($p < 0.001$)。タバタ式トレーニング終了後の最高血中乳酸濃度は、交互条件は受 1 人条件と比較して有意に高かった ($p < 0.05$)。これらの結果から、交互条件は時間的効率を高めつつ、有酸素性および無酸素性エネルギー供給機構に負荷をかけることができる方法であると考えられる。

【結論】

取と受を 1 セットずつ交互に実施する方法は有酸素性および無酸素性エネルギー供給機構に負荷をかけることができ、時間的効率にも優れていることが示唆された。

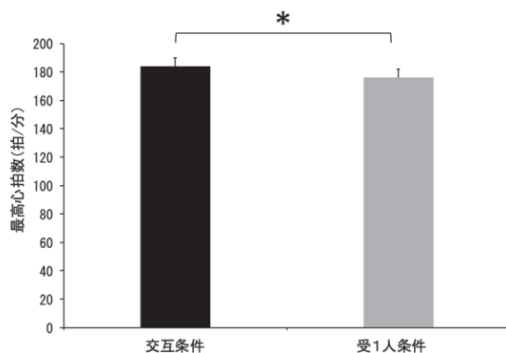


図1 タバタ式トレーニング中の最高心拍数 (* $p < 0.05$)

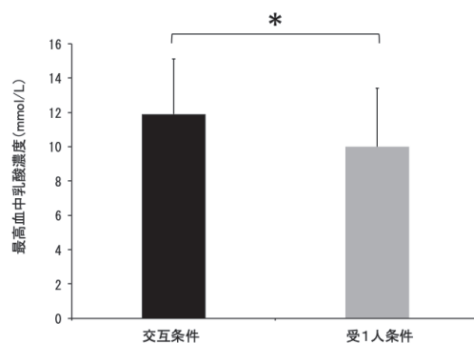


図2 タバタ式トレーニング終了後の最高血中乳酸濃度 (* $p < 0.05$)

内股の跳ね上げにおける運動連鎖のバイオメカニクス的研究

The Kinematic Chain in the Uchimata Sweep from a Biomechanical Approach

○池田希 (いけだ接骨院), 上水研一朗, 井上康生, 中矢力, 宮崎誠司 (東海大学)
Kii Ikeda (Ikeda Judo Therapy), Kenichiro Agemizu, Kosei Inoue, Riki Nakaya, Seiji Miyazaki (Tokai University)

【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

In this study, we analyzed the basic movements of the Uchimata in judo players and compared the results between the groups of skilled and unskilled Uchimata players. It was speculated that the kinematic chain from each lower extremity joint may allow the Uchimata to make a sweep. In addition, the unskilled Uchimata players performed the technique with a large flexion of the knee joint of the sweeping leg. The results of this study suggest that it is important to clarify and teach the kinematic chain in the Uchimata sweep.

【はじめに】

現代柔道の主流な技である「内股」についてはこれまで様々な研究がなされてきた。羽賀は内股における取の動作解析を行い、軸脚の離地から刈脚離地までの体幹回旋と体幹傾斜、刈脚の股関節伸展動作という一連の前に出ていく動作を制御していくことが、頸部外傷予防になるはずだとしている。内股は「掛け」局面に行く跳ね上げ動作が特徴的な足技であるが、「作り」・「掛け」局面の下肢各関節の運動連鎖に着目し、これらをキネマティクスの観点から検討した研究はみられない。そこで本研究では内股における下肢各関節運動を解析し、柔道技術指導の一助とすることを目的とした。

【方法】

被験者は柔道経験 10 年以上の柔道熟練者 8 名とした。また、受の身体的特徴や柔道経験が取の動作にも影響することを考慮し、被験者間で受の違いによる動作への影響を最小限にするために重量級 (81kg 級以上) と軽量級 (73kg 級以下) でそれぞれ受は一人とした。試技は柔道の「内股」の投げ込みを受が静止した状態から行った。動作解析用の衣類を着用させて、カメラ 10 台を用いた光学式モーションキャプチャシステムを用いて記録した。なお、カメラのシャッタースピードおよびフレームレートは、それぞれ 1/500sec および 250fps とした。なお分析範囲は取の刈足離地から受身接地までとした。得られたデータより、股関節屈曲角度・膝関節屈曲角度・足関節背屈角度を算出し、下記二点の検討を行った。①内股の跳ね上げについての解説を目的とし、柔道熟練者が行う下肢各関節の単純動作解析をおこなった。②内股が相手に掛かる要因を検討するために、内股を得意とする選手 4 名および内股を得意としない選手 4 名の 2 つの群に分けて、各運動学的変数の平均値の違いを Welch の検定で比較検討した。統計学的有意水準は 5%未満とした。

【結果および考察】

①軸脚接地時の軸脚膝関節を屈曲させた後に伸展できる準備、いわゆる「タメ」動作をしてから、軸脚膝関節の伸展動作・軸脚足関節の底屈動作、それに伴う軸脚股関節の屈曲動作・刈脚股関節の屈曲位からの伸展動作、そして相手に技を施す刈脚膝関節の角度維持・刈脚足関節の底屈動作という運動連鎖が、内股の跳ね上げ動作を可能にしているのではないかと推察された。

②刈脚膝関節「最大屈曲角度」と「跳ね上げ時の屈曲開始角度と最大屈曲角度の角度差」の二項目において非得意選手の方が有意に大きな値を示した ($P>0.05$)。内股得意選手は相手を跳ね上げる際 (受の離地) に刈脚膝関節を伸展もしくは角度を維持して技を施しているのに対し、内股非得意選手は刈脚膝関節を大きく屈曲して技を施していたといえる。

本研究結果から、内股は跳ね上げ時の運動連鎖を基に指導することで安全で効果的な技術指導ができると考えられる。

重心動揺から見る柔道経験者の姿勢制御の特徴について

○曾我部晋哉（甲南大学）

【目的】近年、先進国の高齢化とともに転倒による死亡事故が増加傾向にあり、各国と転倒予防に対する取り組みを行っている。中でも柔道の「倒れない」倒れたとしても「受け身により身を守ることができる」といった特性を利用した転倒予防・転倒マネジメント法の開発が行われている。しかしながら、実際のところ柔道経験者と一般の成人との静止立位姿勢制御戦略について具体的な特徴について明らかにされていない。静止立位姿勢の保持には、安静状態での立位保持と、立位中の重心動揺に意識を向け随意的に姿勢を保持する随意的制御と、敢えて重心動揺から意識を逸らせた状態で姿勢を制御する自動的制御がある。安静立位時と比較して随意的制御と自動的制御は、いずれも重心動揺は減少することは分かっている。しかし、柔道経験が非柔道経験者と比較して、どのような姿勢制御に特徴があるのかは分かっていない。そこで、本研究では柔道経験者と一般成人の安静立位時と自動的制御時の重心動揺特性から姿勢制御戦略を比較し、それぞれの特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】立位姿勢保持に影響を及ぼすような傷害や手術歴のない一般健康男性9名（年齢：22.1±2.0歳、身長：167.6±2.8cm、体重：57.0±6.5kg）、柔道経験男性7名（年齢：20.3±1.0歳、身長：165.3±6.3cm、体重：70.2±7.8kg、柔道歴：15.2±0.8年）を対象とした。重心動揺の測定には、システムグラフィコーダ G-5500（アニマ社製）を使用した。被験者には、両足をそろえた状態で上肢は下垂し、開眼状態でプラットフォーム上に静止立位させた。第1条件（コントロール）は、床から160cm、プラットフォーム中央から2m先に設置した目印を凝視させ30秒間静止立位を保持させた。第2条件（自動的制御）は、2m先のモニターに5秒ごとに表示される計算問題を解答しながらプラットフォーム上で30秒間静止立位を保持させた。この2条件において前後左右の重心動揺振幅、速度、平均速度パワー周波数、平均位置パワー周波数を2群間で比較した。統計には対応のないT検定を行い有意水準は0.05とした。

【結果および考察】第1条件における前後方向の速度パワーの面積比において中周波域（0.2-2.0Hz）：柔道経験群（67.24±1.84%）一般成人群（61.18±1.61%）、および高周波域（2.0-10.0Hz）：柔道経験群（27.36±2.98%）一般成人群（33.55±5.47%）間に有意差が認められた。同様に第1条件における左右方向の速度パワー面積比において中周波域：柔道経験群（70.82±4.60%）一般成人群（66.64±3.58%）および高周波域：柔道経験群（25.18±4.89%）一般成人群（29.77±4.28%）間に有意差が認められた。第2条件においては、前後方向の速度パワーの面積比において低周波域（0.04-0.20Hz）：柔道経験群（6.26±2.35%）一般成人群（4.19±1.44%）間において有意差が認められたが、中周波および高周波域には有意差がみられなかった。また、左右方向においてはいずれの周波数領域においても有意差は認められなかった。安静立位における矢状面における動揺は、足関節の構造からも動揺性が大きく、抗重力筋の伸張反射によって常にコントロールされている。一般成人群では、安静時における前後方向の速度パワーの高周波領域での割合が大きいことから、より感覚情報（視覚、前庭、体性感覚、固有受容器）に依存していることを示唆している。

【結論】柔道経験者と一般成人の姿勢制御戦略を重心動揺の周波数領域分析を行った結果、柔道経験者は安静時の姿勢制御において、一般成人と比較して感覚情報による急速な姿勢制御ではなく、より低速の余裕のある姿勢制御戦略を行っているのではないかと考えられた。

弓道における「離れ」局面での上肢関節角度と狙い・射出角度の関係

○原田隆次（国際武道大学）、相澤岳（早稲田大学大学院）

【目的】

弓道において、「離れ（発射）」の瞬間に的を正確に狙うことは、的を射抜くために重要な要因である。弓道では「ゆるみ」と呼ばれる射癖があり、「離れ」局面の「矢束（引き込んだ矢の長さ）」や狙いの変化の原因とされている。これまで「離れ」の運動については、「肘がゆるむというのは、肩関節角度が減少する事でおこると考えられる」（三觜 1986）ことや「左肩関節の角度変位と「狙い」の左右方向には強い相関関係が見られた」（原田 2018）ことが報告されている。しかしこれらは関節の屈曲伸展や2次元に投影された関節の運動しか捉えていないため、より詳細な分析が必要である。そこで本研究では、「離れ」局面における狙い、射出角度、弓を支持する左上肢、弦を磔により支持する右上肢と胸部の関係について詳細な分析を行うことを目的とする。

【方法】

被験者は健康な大学弓道選手の男性9名で、実験矢（アルミ矢）以外は通常時と同じ弓具を使用し、20射試技を実施した。実験環境は、屋内において近的競技距離28mとし、測定には3次元モーションキャプチャシステム（VICON）を用いた。磔と弦が分離し始めた時点を開始点、磔と弦が完全に分離した時点を終点とし、「離れ」局面と定義した。算出項目は矢の角度、矢の発射角、上肢の各関節角度、胸部のマーカー座標とし、それぞれの関係について、ピアソンまたはスピアマンの相関分析を行った。また、共通性を見出すために、k-means法により、クラスタ分析を行った。

【結果および考察】

射出角度は、全ての被験者において矢の角度変位と有意な強い正の相関がみられた。

矢の角度変位と関節角度変位については、鉛直方向において有意な相関（ $p < 0.05$ かつ $|r| > 0.5$ ）がみられたのは、左肩内転外転（2名）・左肩内旋外旋（2名）・右肩内転外転（5名）・右肩屈曲伸展（4名）であった。また、水平方向において、有意な相関が複数被験者みられたのは、左肘伸屈（2名）・左肘回内回外（2名）・左肩内転外転（3名）・左肩屈曲伸展（2名）・右肩屈曲伸展（3名）であった。

次に矢の角度変位（鉛直・水平方向）と関節角度との相関係数の結果についてクラスタ分析を行った結果、2つのクラスタに分類され、3名は、矢の左右・上下方向いずれにおいても、比較的一貫した関節相関パターンを示しており、特に肩・肘の複合的な運動制御によって矢の角度を安定させていると考えられる。一方、6名は、相関パターンにおいて個人差が大きく、矢の角度の制御における上肢の角度変位に個人差がある可能性が示唆された。

【結論】

本研究の結果、被験者によっては関節角度変位と矢の角度変位には有意な相関がみられたが、すべての被験者に共通する傾向は見られなかった。しかし、鉛直方向の矢の角度変位には右肩の角度変位が影響している被験者が多く、水平方向の矢の角度変位には左肘・肩角度変位との相関関係が多くみられた。

また、相関分析についてクラスタ分析を行った結果、2つのクラスタに分類することができ、射手の体の使い方には、パターンが見られる可能性が示唆された。

ⅡC-5

個人競技の選手が集団で練習する意義について -空手道を題材として-

○花田光(国土舘大学大学院)

【目的】空手道をはじめとする個人競技の選手がチームに所属することは、練習環境の制限や指導の機会減少などの弊害に見舞われる恐れがある。そのような制限が課され得る状況で、個人競技の選手がチームに所属するメリットはあるのだろうか。先行研究では、集団目標や情動知能が選手の意欲や集団効力感に影響することが示されており、個人競技においてもチームの存在が重要であると考えられている。しかし、個人競技の選手が集団で練習する意義について調査した研究は少ない。よって、本研究では個人競技の選手が集団で練習する時の練習の仕方(質)について検討し、今後その意義を明らかにするための手がかりとすることを目的とした。

【方法】対象者:K大学空手道部に所属する選手と現役で活動しているK大学空手道部の卒業生を対象とした。36名(男性15名、女性21名)から回答が得られ、そのうち形選手が19名、組手選手が17名であった。

調査方法:空手道における「練習の仕方」について調査するため、幾留ら(2017)が開発したスポーツ版自己調整尺度を用いた。この尺度は、練習場面を予見段階(計画、自己効力感)、遂行のコントロール段階(セルフモニタリング、エフォート)、自己省察段階(評価及び内省)の3つの学習段階に区分している。その内、計画、自己効力感、セルフモニタリング、エフォートの4因子については4件法(1:大抵そうではない-4:大抵そうだ)、評価及び内省の2因子については5件法(1:大抵そうではない-5:大抵そうだ)で回答を求めた。また、集団で練習する効果について調査するために、集団で練習するメリット・デメリットについて自由記述のアンケート調査と5件法(1:大抵そうではない-5:大抵そうだ)を用いたアンケート調査で回答を求めた。各項目について、男女別、種目別(形・組手)、競技力別に平均値と標準偏差を分析した。

【結果および考察】男女別、種目別、競技力別に各数値の平均値と標準偏差を分析した結果、男女別に見ると、個人特性(自己効力感、セルフモニタリング、エフォート、評価内省)の平均値は男性の方が高かったが、集団特性(集団計画、集団自己効力感など)の平均値は女性の方が高くなった。標準偏差は自己効力感、セルフモニタリング、集団計画、集団セルフモニタリング、集団評価内省は男性の方がばらつきが大きく、エフォート、評価内省、集団自己効力感、集団エフォートは女性の方がばらつきが大きかった。種目別に見ると、組手選手の方が平均値の高い項目が多い結果となった。標準偏差を見ると形選手の方が多くの項目で数値のばらつきが大きかった。競技力別で比較すると、競技力の高い選手の方が全ての項目において平均値が高かったが、標準偏差ではそのような結果は得られなかった。自由記述による回答をメリットとデメリットに分けて分析した結果、メリットとしては、集団練習におけるモチベーションの向上と、多様なアドバイスや技術の共有が主な利点として認識されていることが分かった。一方、デメリットとしては、悪い雰囲気の影響や、集団であるが故の個々のニーズへの対応の難しさ、練習への集中阻害などが課題として挙げられた。

【結論】今回の結果から個人競技の選手が集団で練習することで生じるデメリットも再確認されたが、同時に多くのメリットも明らかになった。今後は個人競技の選手が集団で練習する意義を明らかにしていきたい。

口呼吸改善を目的とした鼻呼吸訓練の効果 -空手道選手を対象として-

○鈴木浩司（日本大学），谷木龍男（東海大学），玉田一敬（東京都立小児総合医療センター），工藤裕仁（目白大学），水田洋平（伊藤整形外科），麓正樹（東京国際大学），田井健太郎（群馬大学），末次美樹（駒澤大学），三村由紀（防衛大学校）

【目的】口呼吸は酸素摂取量の低下や歯周病，睡眠障害の発生と関連しているため根本的な対応が求められる。そこで本研究では、成人空手道男子選手を対象とする鼻呼吸訓練（NBT）の有効性を検討したので報告する。

【方法】被験者は耳鼻科への受診がない空手道組手選手男子 31 名（平均年齢 26.3 ± 1.9 歳）とした。鼻閉の自覚や起床時の口渇等について Visual Analog Scale (VAS) で主観的評価を行い，客観的状态は鼻腔通気流量（PNIF）で評価した。NBT はヨーガの呼吸法を参考に最低週 4 回，2 週間実施した。測定は初回，8 日目，最終訓練前後の計 6 回実施した。統計解析は，NBT 前後の VAS 評価は対応のある t 検定，自覚的鼻閉と PNIF の評価は対応の無い t 検定，NBT 前後の PNIF の変化は反復測定分散分析及び Bonferroni 法による多重比較法を実施した。有意水準は 5%とした。日本大学松戸歯学部倫理審査委員会承認（EC-20-013 号）。

【結果および考察】被験者 12 名（38.7%）に鼻閉の自覚を認めた。また鼻閉の自覚がある者全員が起床時の口渇を自覚しており，自覚が無い者と比較して PNIF の平均値が有意に低かった。睡眠に満足していない 7 名全員に起床時の口渇の自覚がある一方で，鼻閉と起床時の口渇に自覚がない者は全て自身の睡眠に満足していた。全被験者において NBT 開始前と訓練最終日に実施した VAS は全て有意に向上し，PNIF の平均値も有意に高い値を示した。以上より，NBT を短期間（2 週間）実施することによって，PNIF だけでなく，鼻閉，起床時の口渇および睡眠の満足度を改善することが示唆された。

【結論】スポーツ選手に対する鼻呼吸訓練の有効性を検討した結果、鼻閉の有無に関わらず，鼻呼吸訓練の有効性が示唆された。

ⅡP-1

柔道授業におけるフィードバックの認知が学習成果および スポーツ参加に及ぼす影響

○山本浩二（関西福祉大学）、島本好平（法政大学）、尼子尚公（関西福祉大学）

【目的】

中学校保健体育科の目標は「生涯にわたって豊かなスポーツライフを営む資質や能力の育成」（文部科学省，2017）であり，体育では各運動領域の教育活動を通じて，生涯スポーツに向けた運動やスポーツの意識の向上が求められ，今後もますます指導内容や方法の充実が図られている．その体育授業の充実には，生徒の学習成果や授業評価に影響する（山本ほか，2022）とされている教師や生徒同士のフィードバックを用いることが重要であると考えられる．このフィードバックを生徒がどのように捉えているか，それらが学習成果や運動・スポーツ参加意識との関連を検討した研究はこれまでみられていない．

そこで本研究では，中学校体育において学習成果や教科目標の貢献に資する有効なフィードバックについて明らかにするため，各変数間の影響関係について検討する．なお，本研究では，相手との距離（間合い）が極めて近い状態で攻防を展開するため，生徒間でフィードバックが発生しやすいことが想定される「柔道」に着目した．

【方法】

1. 調査対象者および時期

調査は，2023年2月に公立中学校2校に所属し，柔道授業を受講した377名（男子201名，女子176名；1年生179名，2年生198名）に実施した．

2. 調査内容

（1）フェイスシート：調査票冒頭のフェイスシートには性や学年について回答を求めた．

（2）フィードバック認知測定尺度：山本ほか（2022）が開発した尺度で，体育授業中の教師や生徒同士のフィードバックをどの程度認知しているかを「称賛」「助言」「授業態度に対する注意」「運動技能に対する指摘」の4側面で評価できる（16項目）．

（3）学習成果を評価する項目群：小野ほか（2018）の体育学習観尺度を参考に，学習成果を評価する22項目（運動技術の習得，コミュニケーション能力の涵養，身体と運動に関する知識の修得，運動の魅力の感受，身体能力の向上）を作成した．

（4）現在の運動参加尺度：西田（2004）によって開発された，体育授業以外の日常的な運動実施に対する主観的な評価を行う5項目である．

3. 主な統計処理

調査を通じて得られたデータは基本統計量の算出を行った後に，性と学年の要因から二要因分散分析を用いた．また，フィードバックの認知を独立変数，学習成果を媒介変数，運動参加を従属変数とした構造方程式モデリングによる多母集団同時分析によって実施した．なお，有意水準は5%未満とした．

【結果および考察】

性を要因とする多母集団同時分析の結果，男女に共通して肯定的フィードバックおよび否定的フィードバックは運動参加に直接的な影響が示されなかったが，前者は学習成果を媒介して有意な正の影響を，後者は学習成果を媒介して運動参加に有意な負の影響をそれぞれ示した．次いで，学年を要因とする分析の結果，学年に共通して学習成果を媒介とする影響関係は男女と同様の結果が得られたが，肯定的フィードバックが運動参加に有意な負の影響が1年生にのみ示された．したがって，柔道が初習の1年生に対する肯定的フィードバックは，運動技能の習熟度等に応じて適切に実施していくことが必要であると考えられた．

ⅡP-2

柔道授業が柔道整復術ノンテクニカル(精神面)に及ぼす影響 (第2報)

— 養成学校生に対する認識調査を基にして —

○福井悠紀子（環太平洋大学），久保山和彦（日本体育大学）

【目的】

近年、柔道整復師養成施設を取り巻く環境が変化したことにより、柔道整復師養成における柔道授業の意義が薄れてきている可能性がある。こうした状況を受けて我々はこれまで、柔道を学ぶことでノンテクニカル効果・向上に寄与することや、柔道授業が理論科目の学習に有効作用して学生の学習意欲の高まりについて報告した。そこで今回は対象者を変え、柔道指導者による精神修養的意義の伝達を意図した柔道授業を通じて、ノンテクニカル(精神面)への影響を調査することで、柔道整復教育における柔道教育の重要性と位置づけについて検討したので報告する。

【対象と方法】

調査対象者として東京都内の柔道整復師養成学校 S 専門学校の J 学科に在籍する学生を選び無記名によるアンケート調査を横断的に実施した。調査年度および人数は1年生(2024年 37名)、2年生(2024年 31名)、3年生(2024年 36名)とした。質問内容は柔道授業によって向上すると考えられる精神に関する項目を10項目設けた。また、回答形式を[感じている]、[どちらともいえない]、[感じていない]とし、調査期間中に全質問に回答したものを有効とした。

【結果】

アンケート結果は、単純集計を用い分析した。1年生では柔道授業がノンテクニカル(精神面)に影響があったと感じられたと回答した学生は、全項目の平均 37.0%であり、2年生は 47.1%、また3年生は 51.7%などとなり、学年が進むにつれて[感じている]と答える者が増加し、柔道授業によるノンテクニカルへの影響を認識する学生が上昇していた。

【考察】

柔道整復養成施設における柔道授業がノンテクニカル(精神面)への有益な影響をもたらすことが示唆された。これらのことから、柔道指導者による精神修養的意義の伝達によって柔道整復師の学生達の柔道観は大きく左右されるものと考えられる。

ⅡP-3

柔道競技における国内大会と国際大会の技術特性： 2022～2024 年の講道館杯と世界選手権の比較

○三宅 恵介（中京大学），早川 太啓（中京大学），長谷 晃希（中京大学）
佐藤 武尊（皇學館大学），横山 喬之（摂南大学）

【目的】本研究では，記述的ゲームパフォーマンス分析（以下，ゲーム分析）の手法を用いて，柔道競技における国内大会と国際大会の技術特性を明らかにし，コーチングの実践現場に有用な知見を提供することを目的とした．

【方法】分析対象とした国内大会は，2022 年から 2024 年に開催された講道館杯全日本柔道体重別選手権大会（以下，講道館杯）の 3 大会（計 1430 試合），国際大会は世界柔道選手権大会（以下，世界選手権）の 3 大会（計 1944 試合）とした．分析項目は，勝利スコア獲得技とし，「技あり，合わせて一本」の場合は，2 つ目の「技あり」を獲得した技を対象とした．勝利スコア獲得技のデータは，公益財団法人全日本柔道連盟（以下，全柔連）のウェブサイトに公開されている講道館杯の公式結果と，全柔連強化委員会科学研究部の試合映像分析システム「D21-JUDO」の分析結果をもとに，筆者が作成したゲーム分析用の Excel ファイルに入力し，その数と割合を集計した．その後，勝利スコア獲得技を 2 分類（投技，固技）と 8 分類（手技，腰技，足技，真捨身技，横捨身技，抑込技，絞技，関節技）に整理して分析した．分析結果の処理方法は， χ^2 検定と残差分析を用いて，男女に分けて国内・国際大会と勝利スコア獲得技との関係を明らかにした．統計処理の有意水準は，5%未満とした．

【結果および考察】女子では，国内・国際大会と 2 分類の勝利スコア獲得技との間に有意な関係が認められ（ $\chi^2=5.325$, $df=2$, $p<0.05$ ），講道館杯の固技（42.4%）と世界選手権の投技（64.3%）が有意に高く，講道館杯の投技（57.6%）と世界選手権の固技（35.7%）が有意に低かった．また，8 分類の勝利スコア獲得技との間にも有意な関係が認められ（ $\chi^2=32.483$, $df=7$, $p<0.01$ ），講道館杯の足技（32.1%）と抑込技（35.3%），世界選手権の手技（16.4%）と横捨身技（8.6%）が有意に高く，講道館杯の手技（10.8%）と横捨身技（3.6%），世界選手権の足技（26.3%）と抑込技（27.4%）が有意に低かった．一方，男子では，2 分類の勝利スコア獲得技との間に有意な関係は認められなかったが（ $\chi^2=1.156$, $df=2$, ns ），8 分類の勝利スコア獲得技の間には有意な関係が認められ（ $\chi^2=14.484$, $df=7$, $p<0.05$ ），講道館杯の足技（37.8%）と世界選手権の手技（8.8%）が有意に高く，講道館杯の腰技（5.2%）と世界選手権の足技（29.8%）が有意に低かった．これらの結果は，男女ともに国内大会と国際大会において，それぞれ異なる技術特性が存在することを示唆している．特に女子は，両大会間での技術特性の差異が顕著であると考えられる．

【結論】本研究において，柔道競技における国内大会と国際大会には，男女ともにそれぞれ異なる技術特性が存在することが示唆された．したがって，コーチングの実践現場では，これらの技術特性の違いを正しく理解した上で指導することが重要であると考えられる．

武道としての「競技かるた」の起源と今日 —遊びや競技の「楽しさ」に着眼して—

○清野宏樹（桃山学院大学）

【目的】「競技かるた」に青春をかける高校生たちの姿を描き、累計発行部数 2900 万部を越えたヒット漫画からアニメや映画、ドラマ化までされた末次（2008）『ちはやふる』。また、NHK『100 分 de 名著』で J・マクミラン（2024）「百人一首」から世界中に「かるた」の面白さの広まりが紹介された。そして、（一社）全日本かるた協会は、「競技かるたとは『小倉百人一首』のかるたの札を使う、老若男女が楽しめるスポーツ」と説明を行っている。さらに、競技者によっては、「競技かるた」をスポーツと呼ぶようになってきている。そこで本研究は、「競技かるた」の起源や遊戯、競技から武道としての位置づけを試みることを目的とした。

【方法】「競技かるた」及び「百人一首」に関わる史料及び選手の自伝、武道の定義づけに関わる文献考証を行うこととした。

【結果】「競技かるた」の歴史は、平安時代の二枚貝を 2 つに分け、一方を持ってもう一方を探し当てる「貝覆い（貝あわせ）」という遊びが流行したことによる。また、室町時代の天文 12（1543）年にポルトガルが伝来したカード（トランプ）に類似したかるた遊びが誕生。2 枚一組で合わせて取る、貝覆いの要素を取り入れた「歌がるた」がきた。そして、今日定着している小倉百人一首を記したかるたは、江戸時代元禄期 1688～1704 年には広まり、かるた取りは人々の気楽な遊びとなった。このかるた取りは、明治時代の 1892 年頃から競技として行われる。さらに、明治 37（1904）年に「東京かるた会」がルールを統一し、正式に「競技かるた」として次第に世に広まっていった（寒川，2015，高橋，2021，谷釜，2020）。ライフストーリーから永世クィーンの楠木（2013）の自伝を確認すると、小学 3 年時に競技かるたと出会いその面白さにはまり魅力に惹きつけられる。日々のハードな練習の積み重ねられたのは、純粋に「かるたが大好き！」という強い気持ちがあったからとする。後に名人・クィーン戦、全日本選手権大会等に出場し、そこでは、着物の義務があり、競技中の私語を慎み、互いの礼で始まる等の作法がある。それは、武道の礼節から「かるた道」と述ぶ。そして、競技かるたは、文化としてのスポーツであり、「頭脳スポーツ」や「マインド・スポーツ」と捉えた。

【考察】武道は古来の伝統文化ではなく、明治中期以降に武術や武芸が「近代化」される過程で形成された近代文化である（井上，2004）。さらに、学習指導要領の武道の取り扱いから考えると武道とは、狭義には、武技や武術等から江戸末期までに発生した我が国固有の文化とした捉え方である。また、「礼に始まって礼に終わる」という礼法も武道の大きな特色である。そこには、一定のルールで規定した技術を活用して勝負を争うところに違いがある。その為、ガッツポーズを抑制すべき行為として相手を尊重する態度と自己の感情をコントロールする能力が求められる。つまり、自分を律する克己の心を表すものとして、礼儀を守る、諸作を守る、形から入るという、所謂伝統的な考え方や行動の仕方がある（木村，2016）。先の楠木（2013）は、着物の着用や競技で私語を慎み、互いの礼で行う作法の大切さを伝えている。また、永世クィーンの渡辺（2012）は、「文系スポーツ」と位置づけ、構えや体重移動と払い方の基本、渡り手、逃げる手、手先の技、戻り手等の面白くするコツを伝えている。

【結論】歴史的な起源から、平安時代の二枚貝から始まり室町時代 1501～1600 年に、ポルトガル伝来のカードから「かるた遊び」、江戸時代 1688～1704 年には「小倉百人一首」とされ、明治 37（1904）年にできた東京かるた会がルールを統一し、正式に「競技かるた」に至った。

木村（2016）の江戸末期や井上（2004）の明治中期以降の発生とした競い合いの「楽しさ」や技、所作、礼法等の特性からもカードゲームの遊戯や武道としての位置づけが示唆された。

II P-5

近代剣道歌の時代的特徴—計量テキスト分析に基づく考察—

○小林勝法（文教大学）、佐藤皓也（新潟医療福祉大学）

【目的】

今村嘉雄編『武道歌撰集 下巻』（1989 年）に「近代武道書」として収録されている図書のうち剣道の指導書で、発行された時代が明治時代から昭和時代前期（1945 年以前）の 25 冊 240 首について、その内容を計量テキスト分析し、時代による特徴を明らかにする。

【方法】

分析の対象とした 240 首の内訳は、明治時代 43 首、大正時代 139 首、昭和時代前期 58 首であった。形態素解析辞書は、近代文語 UniDic（国立国語研究所）を使用し、計量テキスト分析には KH Coder v. 3. 02c を使用した。

まず、語の出現回数に着目し、出現回数が多い頻出語と回数は多くないものの特徴的な語を抽出した。そして、語と時代との関係を調べるために共起ネットワーク図を描画した。これは、出現回数を円の大きさと表し、出現することの多い時代を線で結んだ図である。

【結果および考察】

①出現回数

出現回数に着目すると、明治時代は「知る」(9)や「太刀」(7)、「身」(6)、「道」(6)が多く、「剣」(5)や「勝負」(4)が特徴的である。大正時代は「心」(49)や「太刀」(18)、「敵」(18)が多い。昭和時代前期は「心」(15)や「打つ」(15)、「技」(12)、「道」(8)が多く、特に「打つ」と「技」の比率がほかの時代よりも多い。

これらの頻出語を使った歌には以下のようなものがある。

＜明治時代＞命かけ君に捧げん剣太刀 仇に移るな花のしょうぶに（武道教範）

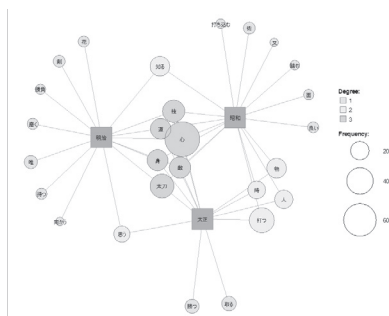
＜大正時代＞吾身とも敵をも敵と思はずば 心に掛る敵もあるまじ（剣術落葉集）

＜昭和時代前期＞身と心わさをきたへてよき人と なす道の場ぞおろそかにすな
（中学校剣道教範）

②共起ネットワーク

時代を外部変数として、頻出語上位 45 語による共起ネットワーク図を作成した（右図参照）。

図の中央に 3 つの時代に共通する語、すなわち、「心」や「太刀」、「敵」、「道」などが描かれた。そして、上述した頻出語が時代と関連して示されている。大正時代は明治時代と昭和前期と共通する語が多く、大正時代に特徴的な語は、「勝つ」と「取る」の 2 語である。



【結論】

- ① 3 つの時代に共通して多い語は、「心」や「太刀」、「敵」、「道」、「技」、「身」であった。
- ② 特徴的な語は、明治時代は「剣」や「知る」で、大正時代は「勝つ」と「取る」、昭和前期は「打つ」や「技」であった。明治時代の歌は剣術的な要素が残っており、昭和時代前期には剣道の競技的な要素が色濃くなっている。
- ③ 対象にした武道歌の数があまり多くなかったため、特徴を十分に引き出すことが出来なかったと思われる。より詳細に検討するためには、より多くの歌を対象にして分析する必要がある。

日本剣道形実施時の視線行動は熟練度に関係するのか？

○高橋 健太郎（関東学院大学）、安藤 翔（国士舘大学）、

【目的】

現在、スポーツ分野において視覚認知能力が注目されている。バスケットボールのフリースローにおける注視時間を異なる熟練度の被検者を対象に調査したものや、バドミントンのサーブ時における視線行動を調査した先行研究が挙げられる。剣道においても「目付」という言葉で表現されているように、従前より相手と対峙した状況で注視、または停留の時間や回数を指標とした目付を評価する試みがいくつかおこなわれている。剣道における攻防の基本要素は「日本剣道形」と呼ばれる形稽古へ集約されている。日本剣道形の熟練度に関する研究は、脳波及び表面筋電位を計測・評価した事例があるものの、視線行動を分析した事例は未だ無い。そこで本研究では、装着型視線計測装置を用いて日本剣道形実施中の視線行動を観察し、熟練度の評価になりうることが可能か検討することを目的とした。

【方法】

剣道経験者として3名（3±1.1段）、剣道未経験者3名（無段）、計6名を実験被験者とした。視線行動の計測には、GPE-4（株式会社ガゾウ）を使用し、視線映像はフルハイビジョンサイズ（1920×1080pix）、25fpsのフレームレートで撮影された。なお、視野映像用のレンズの仕様は視覚が120°（水平成分）×65°（垂直成分）であった。

実験に先立ち、剣道未経験者には全日本剣道連盟監修の日本剣道形DVDを鑑賞させ、日本剣道形の動作を覚えるように教示した。実験試技は、日本剣道形1本目から3本目とし、それぞれの形において打太刀、仕太刀を3回ずつ行わせた。

GPE-4で記録された視線座標の時系列に対して、視野映像カメラの仕様から資格に換算したうえで、視線速度 $v(t)$ [deg/s]を算出した。注視の判定には先行研究（加藤ら、2002）を参照し、速度10[deg/s]以下の状態が120ms持続した場合を注視とした。試技中における注視時間 $T\text{-fix}$ [s]と注視の生じた回数 $N\text{-fix}$ を集計し、競技経験レベルと被検者内要因（打太刀、仕太刀）との比較材料とした。その際、二元配置分散分析をおこない、有意水準は5%とした。

【結果および考察】

視線計測装置で計測された結果を以下に示す。視線速度 $v(t)$ の平均値は試技開始から終了まで熟練度の違い、打太刀、仕太刀の違いによる差は見られなかった。注視回数を比較した結果、経験者の方がいずれの場合においても高い傾向が見られていた。同様に注視回数においても、経験者の方が初心者に比べ優位に高い値を示していた。

本研究の結果、経験者において注視時間やその回数が多く観察された。他のスポーツにおいても同様な傾向は見られ、バスケットボールにおいても熟練者の方がフリースロー時の注視時間が長いと報告されている。剣道においても、本研究と場面設定が違うものの、相手の視線行動を調査した事例では、未熟練者において視線の動揺が認められ、熟練者は頭部への注視が多かったと報告されている。本研究では、視線計測装置を用いて、経験者と未経験者を対象に日本剣道形動作中の視線行動を評価した。その結果、初心者との違いは明らかになった。しかし、経験者の中でもより段位の高い者と低い者との違いが視線行動に影響を与え得るか否かについては明らかになっていない。この点においては今後の課題としたい。

ⅡP-7

運動有能感の向上を活用した剣道授業の開発

○畠田 瑞希（大阪教育大学教職大学院）・太田 順康（大阪教育大学）

【研究背景および目的】

先行研究では、運動有能感を高めることが、生徒にとって運動への内発的動機づけにつながる（岡澤・三上，1998）、および運動の楽しさの体験に寄与すること（岡澤・諏訪，1998）が明らかにされている。本研究の実施校における実践実習を通して、生徒が自ら課題を見つけて学ぼうとする姿勢が乏しく、主体的に授業へ参加できていないことが課題として挙げられた。特に剣道授業では、初心者段階において基本動作の繰り返しが授業の大半を占めるため、授業に集中できない生徒、自己課題を見出せない生徒、また運動が苦手な生徒や体力に自信のない生徒は、消極的な態度を示す傾向があった。中には、剣道や体育そのものに対して初めから諦めてしまう生徒も見受けられた。

このような状況を改善するために、本研究では独自の昇級審査制度を導入し、学習課題をスモールステップに分けて提示することで、生徒が段階的に達成感を得られるよう工夫した。スモールステップの設定によって、小さな成功体験を積み重ねることで運動有能感の向上を図り、剣道授業への積極的な姿勢を育み、技能の向上につながると仮定した。

そこで本研究では、独自に作成した昇級審査制度が、生徒の運動有能感、授業への意欲、剣道への興味・関心にどのような変化をもたらすかを検討することを目的とした。

【方法】

対象者：H 高等学校 1 年生男子 3 クラス 計 81 名

調査期間：4 月 22 日～6 月 24 日（6 時間）

調査方法：「運動有能感測定尺度を用いた質問紙調査（岡澤，1996、5 件法・12 設問）」・「剣道に対する興味・関心調査」、「学習感想の記録」、「昇級審査の感想、結果の分析」
剣道授業の前後で比較分析を行い、運動有能感、興味・関心、技能の変化を検討した。

【結果】

剣道授業開始前に実施した「運動有能感測定尺度」による調査では、下位 3 項目である「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の平均得点は、それぞれ 2.63、4.06、3.99 であり、「身体的有能さの認知」の得点が他の項目に比べて低い傾向が見られた。

本研究では、実践授業を通して運動有能感の向上を促し、それが剣道に対する興味・関心や授業への意欲の変化につながる。

剣道のスコア分析に基づく年代・ポジションと試合内容の関連

○池田孝博（福岡県立大学/鹿屋体育大学連携大学院）、青柳領（無所属）

【目的】柔道と比較すると剣道の試合分析の研究は少ないが、先行研究として、最高段位である八段の試合における移動距離（巽ほか、1996）、全日本剣道選手権大会における施技内容（中村ほか、1999）およびコロナ禍における暫定的規則が適用された大学生の地域大会の試合内容（池田ほか、2022）などが散見される。さて、剣道は国民スポーツ大会（旧国民体育大会を含む、以下「国スポ」）の競技種目の一つであるが、5人制団体戦で行われる成年男子の参加資格は、ポジションごとに生年月日で区切られ、10年（歳）単位による年代別の試合が実施される。このような競技特性について作道（2004）は、年代ごとの技と心の洗練・進化の修練過程が確認できると述べている。しかしながら、国スポの剣道競技について、その試合内容を分析した研究は見当たらない。そこで本研究では、国スポ剣道競技のスコアから、各ポジション（年代）と試合内容の関連について明らかにすることを目的とする。

【方法】分析対象は、コロナ禍後にほぼ同一ルールで実施された2023年（鹿児島特別国体）と2024年（佐賀国スポ）の2年分の大会、全470試合のデータである。全剣連の広報誌「剣窓」に掲載された試合結果から、各ポジションの対戦について試合時間（フルタイム/時間内）、勝敗（勝負あり/引き分け）、スコア（2-1/2-0/1-0/1-1/0-0）、有効打突として発現した本数、部位およびその種別をステージ（1回戦～決勝）ごとに試合内容として抽出した。開催年、ステージ、ポジションおよびホームチーム（開催県）との対戦か否かと、試合時間、勝敗およびスコアとの関連については χ^2 検定を適用し、ステージ、ポジションと試合内容の関連については数量化理論Ⅲ類を用いて検討した。

【結果および考察】開催年（大会）と試合時間（ $\chi^2[1] = .184$ ）、勝敗（ $\chi^2[1] = .015$ ）、スコア（ $\chi^2[4] = 4.543$ ）に有意な関連は認められず、開催県との対戦（ホーム戦）とそうでない試合（アウェー同士）についても同様に関連は認められなかった（試合時間 $\chi^2[1] = 3.401$ 、勝敗 $\chi^2[1] = 1.541$ 、スコア $\chi^2[4] = 5.146$ ）。そこで、開催年（大会）やホーム戦を考慮せずに、ポジション（年代）およびステージとスコア、出現本数、有効打突の部位とその種類（数）の関連を検討した結果、ステージが上がるにつれ、2-1、2-0、1-1のスコアとなり、出現本数が多く、有効打突の種類も多くなる傾向が示された。また、ポジションによる試合内容の一般的な傾向は認められず、それぞれに特徴が示された。また、スコアについては先鋒・中堅・大将（2-0、2-1、0-0）と次鋒・副将（1-0、1-1）に類似性が認められ、出現本数では本数が少ない次鋒戦とその他のポジションとに分類された。ポジションそれぞれの特徴として、先鋒戦は2-0のスコア（出現本数2）、面と小手、小手、突きとその他の部位で2種類以上の試合になる傾向が示されたが、次鋒戦は1-0（出現本数1）、面で1種類という特徴であった。また、大将戦は0-0の結果が多く、有効打突が出現した場合は面技が多い傾向であった。

【結論】同じ年代構成による試合内容は、年度や開催県に関係なく、同様の傾向を示すことを前提として国スポの試合内容を分析した。ステージについて示された特徴は、序盤の緊張感や試合への慣れの影響があることが予想される。また、20歳代前半の先鋒戦では、有効打突が多く、内容も多様であるのに対して、50歳代後半の大将戦はそれが少なく、面技に集約されることについては、「年代による心技の洗練・進化」と考えられる。ただ、次鋒戦から副将戦までの試合に一般化できるような傾向が認められないことから、これらのポジションの特徴は、年代よりも対戦する順番とその際のチームの状況の影響が大きいと思われる。

II P-9

剣道の竹刀形状が正面打撃時の速度に及ぼす影響

○山口幸一（関西福祉大学），尼子尚公（関西福祉大学），山本浩二（関西福祉大学）

【目的】

剣道は、竹刀を用いて攻防一体型の競技である。その竹刀の形状には、さまざまな種類があり、竹刀によって重心位置が異なる。通常型、胴張型・実践型（以下胴張型と略す）、古刀型の種類があり、競技者は、自己の技術によって竹刀を選定していると考えられる。川上ら（2010）は、軽量の竹刀を用いることにより、振上げ速度から打点位置までの速度が増加したと報告していることから、竹刀が競技者の技術に与える影響は大きいと考えられる。中学、高校、大学の試合においては、試合中の動作も多く、展開の切り替わりが速く技数も多い年代である。そこで本研究は、A 大学男女剣道部の学生を被験者とし、竹刀形状と竹刀の選定する要因について、質問紙調査を行った。その後、異なる形状の竹刀（胴張型・古刀型）を用いて正面打撃の試技を実施した。竹刀の形状が正面打撃の速度に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

【方法】

本研究の方法については、以下の通りの項目である。

1. 被験者：A 大学剣道部 10 名を対象とした（男子学生 5 名，女子学生 5 名）。
2. 質問紙：本研究の質問紙は、竹刀の選定基準、竹刀を選定する理由などを主に質問した。
3. 竹 刀：竹刀については、胴張型（柄側に重心位置がある竹刀形状）と古刀型（竹刀に均一な重心位置または、剣先側に重心位置がある竹刀形状）を用いた。竹刀の長さは、3 尺 9 寸（約 120 cm）。竹刀の重量については、一般と男子大学生 510 g 以上一般女と女子学生 440 g 以上（女子）のものを用了。
4. 試 技：胴張型と古刀型の竹刀を用いて一本で 5 試技（計 10 試技）を実施した。
5. 撮 影：試技の撮影は iPad pro（Apple 社製）を用いて、撮影を行った。
6. 分 析：5 試技の平均値を求め、群間の差を検討するために t 検定を用いた。有意水準は危険率 5%とした。

【結果および考察】

被験者の 7 名が胴張型を選定し、先が軽い形状を選定する傾向がみられた。これは、技数が多くなることによって、剣先側の軽い竹刀を用いる傾向があることが示唆された。

男女ともに胴張型に比べ、古刀型が有意に速い傾向を示した（ $p < 0.01$ ）。川上ら（2010）の結果は、竹刀を軽量にすることで速度は増加する報告であったが、重量を一定にした場合、剣先側に重心位置がある古刀型の特性上、振上げ動作から振下ろし動作に切替え、打撃位置までに剣先側の重心を利用して打撃しているものであることが示唆された。

【結論】

本研究は、A 大学剣道部員 10 名を対象とし竹刀形状の違いによる正面打撃時の速度について研究を行った。A 大学剣道部の学生は、竹刀の重心位置が手元に近い場所にある胴張型を選定する傾向がみられた。しかしながら、選定していた竹刀形状ではない古刀型の竹刀が正面打撃時の速度は速いことが明らかになった。

空手道競技における外傷発生率に関する考察

○元野紘平（神戸大学）、武岡由樹（神戸大学）、島稔樹（神戸大学）、
高島良典（神戸大学）、峯山佳恵（神戸大学）、黒田良祐（神戸大学）

【目的】空手道競技大会における学年別（小学生・中学生・高校生・大学生）の外傷発生率を算出し、競技特性との関連を明らかにすること。

【方法】対象は、2022年3月から2024年3月に大阪府、京都府、兵庫県で開催された空手道競技大会に参加した選手10688名とし、試合中に発生した外傷を記録分類した。外傷の種類及び部位について分析し、発生率を算出した。

【結果】調査対象の13大会において、外傷は408件発生し、総発生率は3.8%であった。頻度の高い外傷の発生率は、表皮剥離：1.1%、足部外傷：0.74%、頭部外傷：0.3%であった。学年別の表皮剥離、足部外傷の発生率に有意差は認めなかったが、頭部外傷の発生率では、大学生はどの群と比較しても有意に発生率が高かった（Fisherの正確検定 vs 小学生： $P<0.05$, vs 中学生： $P<0.05$, vs 高校生： $P<0.05$ ）。大学生になると、頭部の安全具の着用が義務付けられていない大会が存在し、さらに突きや蹴りが当たっても得点として認められるケースがある。その背景には、ルールのもやもやさがあると考えられる。大学生に対しては、頭部・顔面・頸部へのスキントッチまたは5 cm以内の距離での得点付与というルールの厳格化が、頭部外傷発生率の低下に有効であると考えられる。また、流派によって細かくルールは規定されているが、逆に流派ごとのルールがあることが各流派が集まる大会でのルールが煩雑になり、寸止めの解釈が曖昧になっている可能性もある。

【結論】

空手道競技大会において、頭部外傷の発生率は大学生で有意に高く、現行ルールの曖昧さがその要因の一つである可能性がある。特に大学生においては、頭部への攻撃に関するルールの見直し・厳格化が、外傷予防に寄与する可能性がある。

ご存知ですか！

全日本剣道連盟が推奨するルールを礎に、 安全用具を推進。

賠償責任保険対象商品

■SSPシール

1年間に100万本の竹刀に貼付



SSP Q1 000001
全日本武道具協同組合
※竹刀規格はQRコードから 全日本剣道連盟公認規格に基づいています

Shinai (竹刀) Safety (安全) Promotion (推進)



■安全顎

突きから喉を守る

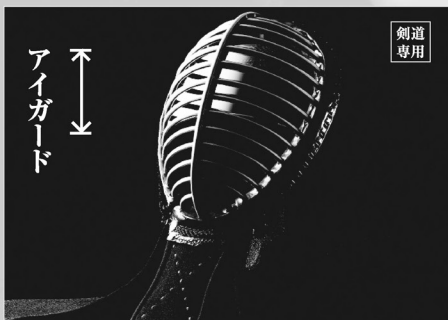


● 頸動脈突入防止
● 外見の変化なし
● どの防具にも適応

特許第5438204号

■アイガード

竹刀などの破片から目をガード！



アイガード

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大人用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

「安全対策の一つとして、初心者への剣道防具面には、必ず
備わっていることを推し進めています。」

■フェイスシールド

相手からの飛沫飛散の防止に！



フェイスシールド(一体型)

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大人用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」に
対応してフェイスシールド(一体型)を製作し、シールドの着用
を推進しています。



全日本武道具協同組合

zenbukyo.jp/



株式会社 建武堂

営業時間 AM10:00～PM7:00
(日曜・祭日はPM6:00まで) 毎週月曜定休

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-15-1 菱山ビル2F

TEL 03-3971-4840 (代) FAX 03-3971-4461

URL: <http://www.kenbu-do.co.jp/>

e-mail: information@kenbu-do.co.jp

剣士を第一に考えた 国産無垢材100%の剣道場床



当社が施工する剣道場の床は、材料支給から
施工・技術指導まで一貫してご提供いたします。

当社は環境保全のためにも国産無垢材を100%使用した弾性床構造の剣道場床
を推奨させていただいております。体育館などのウレタン塗装とは違って温かみ
があり、適度にクッションの効いた安全性の高い剣道場の床をご提案いたします。

<https://kendoujou.com>

English Site <https://architecture-dojo.com> Mail Address info@kendoujou.com

株式会社 五感 東京都江東区新木場1-6-13 木のくに屋ビル4F Tel:03-3522-4169 (受付時間 9:00～18:00 ※水曜定休)

建設業許可：東京都知事許可(般-29)第147244号

新設計で息スムーズ理想のマスク！

- 呼吸しやすい立体設計
- パワーネットメッシュ構造により、蒸れにくく抜群の通気性を誇ります。
(フィルター装着時: 不織布マスクの 10.8 倍の通気性 / 計測値)
- 吸汗性・速乾性・防活性 洗濯耐久性に非常に優れた素材です。
- 鼻出しを容易にする加工縫製構造の快適設計です。

不織布マスクの 10.8 倍の通気性
(フィルター装着時の計測値)
【試験方法 JIS 1096A 法通気性テストによる】



立体
フィルター
2枚入り

株式会社 松興堂

渋谷ショールーム

東京都渋谷区道玄坂2-17-3

TEL.03-3463-0471

<http://www.shokodo.com/>

安心の
日本製

極

剣道面マスク Kiwami

剣道専用

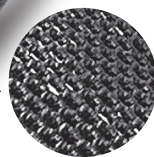
「感染拡大予防ガイドラインのマスク」応需

●洗って使える速乾性。

●メッシュ構造で高い通気性。

●呼吸に特化した口元立体形状。

激しい稽古でも！



価格：2,200 円（税込）カラー：(黒)/サイズ：フリーサイズ

武道具の総合メーカー

株式会社 ヒロヤ

〒672-8048 姫路市飾磨区三宅2丁目26番地

TEL 079-234-2220

FAX 079-234-3300

創業百余年

伝統と技術を守りながら
新たな挑戦を続ける
信頼のブランド



剣道具 一分五厘手刺

ブノ目刺

60本立 極上黒呂色塗胴付

森 武道具 株式会社

東京都中央区日本橋小伝馬町 6-12

営業時間：9時-19時（土曜 17時）

電話：03-3661-0469

定休日：日曜日・祝祭日

お気軽にお問い合わせください。ショッピングサイトはコチラ→



（五十音順）

日本武道学会賛助会員

- ・ 全日本武道具協同組合
(以下、五十音順)
- ・ 株式会社 建武堂
- ・ 株式会社 五感
- ・ 株式会社 松興堂
- ・ 株式会社 ヒロヤ
- ・ 森武道具株式会社

令和7年8月5日 印刷
令和7年8月6日 発行

発行所 日本武道学会

発行者 大保木 輝雄
〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園 2-3
公益財団法人日本武道館 中道場棟内
TEL・FAX 03-6269-9260
E-mail : budogaku@xj8.so-net.ne.jp
振替東京 102326
印刷所 株式会社ソウブン・ドットコム
東京都荒川区西尾久 7-12-16
電話 : 03-3893-0111



法政大学

HOSEI University

スポーツ健康学部

日本武道学会第58回大会事務局

〒194-0298 東京都町田市相原町4342

法政大学 多摩キャンパス

大会実行委員長 永木 耕介

大会実行副委員長 小田 佳子

第58回大会本部事務局：budoshomu@gmail.com